

滝沢御所遺跡

(一)津久田停車場前橋線上三原田バイパス地方特定道路整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

群馬県渋川土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

滝沢御所遺跡

(一)津久田停車場前橋線上三原田バイパス地方特定道路整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

群馬県渋川土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

赤城山の西麓では、河川の浸食により深い谷や起伏の大きい地形が広がっていますが、この地域を通過する道路状況を改善するため、群馬県渋川土木事務所により(一)津久田停車場前橋線上三原田バイパス道路整備事業が計画されました。当該道路整備の事業区間は、渋川市赤城町滝沢地内から同市赤城町持柏木までの総延長1,480mで、平成13年度より事業実施されていましたが、平成24年度の工事区間内に滝沢御所遺跡が存在することから、群馬県教育委員会文化財保護課と渋川土木事務所との協議・調整により、当事業団が渋川土木事務所からの委託をうけて発掘調査を実施することになりました。

発掘調査は、平成25年11月から2ヶ月という短い期間でしたが、縄文時代から近世に渡る重要な遺構・遺物を確認いたしました。特に、6世紀初頭に噴火した榛名山二ツ岳の火山灰の直下から馬の放牧地が確認され、これまで山麓端部の平坦地に限定されていた放牧地が、山麓中腹域まで広がることを確認できたことは、古墳時代における馬の飼育の規模や実体を解明する上で貴重な資料を提供するものと言えます。また、火山災害後の9世紀代には集落が立地し、再開発が行われたことも明らかとなりました。

こうした調査成果は、当地域だけではなく古代東国の歴史を研究・解明するためには必要不可欠なものですが、学校・社会教育や生涯学習の場においても活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から報告書の作成に至るまで、渋川土木事務所をはじめ群馬県教育委員会、渋川市教育委員会、ならびに地元関係者の皆様には多大なご指導、ご協力を賜りました。本報告書の上梓に際し、関係者各位に心から感謝を申し上げて、序といたします。

平成26年12月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 吉 野 勉

例 言

- 1 本書は、平成25年度(一)津久田停車場前橋線上三原田バイパス地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された「滝沢御所遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の所在地は、群馬県渋川市赤城町滝沢401-1、402、403-1、414-1番地である。
- 3 当遺跡の調査面積は、1,464㎡である。
- 4 事業主体 群馬県渋川土木事務所
- 5 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 6 発掘調査の体制及び期間は下記の通りである。
 - (1)発掘調査担当
齊藤利昭(上席専門員)、小野 隆(主任調査研究員)
 - (2)発掘調査期間
履行期間 平成25年10月1日～平成26年1月31日
発掘期間 平成25年11月1日～平成25年12月31日
- 7 報告書作成に係る整理事業の体制及び期間は下記の通りである。
 - (1)整理担当
石坂 茂(専門調査役)
 - (2)整理事業期間
履行期間 平成26年6月1日～平成26年12月31日
整理期間 平成26年6月1日～平成26年10月31日
- 8 報告書作成関係者
 - (1)編集・執筆 石坂 茂(専門調査役)、齊藤利昭(第1章1・2)
 - (2)石器・石製品遺物観察表 石田典子(主任調査研究員)
 - (3)縄文土器遺物観察表 石坂 茂
 - (4)奈良・平安時代遺物観察表 徳江秀夫(資料2課長)、大西雅広(上席専門員)
 - (5)金属製品遺物観察表 関 邦一(補佐(総括))
 - (6)金属製品保存処理 関 邦一
 - (7)遺構写真撮影 発掘調査担当者
 - (8)遺物写真撮影 石坂 茂
 - (9)石材同定 飯島静男(群馬県地質研究会会員)
- 9 発掘調査及び整理事業での業務委託
 - (1)遺跡掘削請負工事 株式会社歴史の杜
 - (2)遺構測量・空中写真撮影 技研測量設計株式会社
 - (3)遺物出土状況記録業務(洗浄) 社会福祉法人ゆずりは会
- 10 出土遺物・図面・写真等の資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 11 本遺跡の発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏に教示ならびに指導をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。(敬称略)
群馬県渋川土木事務所、渋川市教育委員会、石田 真(群馬県教育委員会)、増田 修(桐生市教育委員会)、大工原 豊(國學院大学)、林 克彦(石洞美術館)

凡 例

- 1 本書で使用する測量図の座標は、全て世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)を用いている。また挿図中に使用した方位は、座標北を表している。
- 2 調査対象地全域に5 m×5 mのグリッド網を設定し、南北軸を算用数字、東西方向をアルファベットにより識別した。尚、各グリッドの呼称は南東隅の交点を充てているが、基点となるA-1グリッドの座標値はX=57.100、Y=-70.500である。
- 3 本文中における各遺構の方位については、長軸線と座標北との角度を計測した。北を基準とし、東西90度以内の範囲で東に傾いた場合はN-O-Eのように記載している。
- 4 遺構図および遺物実測図の表示については下記の通りである。
 - (1)縮尺については、各図中に表示してある。ただし遺物の場合、表示された縮尺と異なるものについては、各図右下の表示スケールの上に当該遺物番号と縮尺を別記した。
 - (2)遺構断面図の基準線標高値については、各ポイントの右脇に○、○mと表記した。
 - (3)各遺構の平・断面図中のスクリーントーンは、以下の内容を表示している。

	炉・焼土痕、		樹木根や小動物の攪乱、		灰面、		粘土
---	--------	---	-------------	---	-----	---	----
 - (4)土器断面図中の▲は接合痕を、●は繊維含有を表示している。
 - (5)土器実測図中のスクリーントーンは、以下の内容を表示している。

	灰釉、		黒色
---	-----	---	----
- 5 遺物観察表の記載については、下記の通りである。
 - (1)土器の色調については、農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1997年度版を用いた。
 - (2)縄文土器の胎土については、A類～I類までの9つに分類して各アルファベットを欄内に記載しているが、その分類基準内容は観察表後段に表示してある。
 - (3)出土位置の「+」表記は、当該遺構の床面や底面からの遊離高をcmで表示した。
 - (4)計測値の()表記は、推定値を表す。
 - (5)各遺構内から出土した遺物のうち、その遺構には伴出し得ない明確に時期の異なるものについては、遺物包含層や遺構外からの出土遺物として一括した。
- 6 各遺物写真の縮尺は、おおむね実測図と同縮尺としている。
- 7 本書中に掲示した地形図等については、国土地理院発行の2万5千分の1地形図及び5万分の1地形図を使用しているが、その詳細については各図のキャプション末尾に記載してある。

目 次

第1章 発掘調査の概要

- 1. 調査に至る経緯 1
- 2. 調査の方法と工程 1

第2章 遺跡の立地と環境

- 1. 地理的環境 3
- 2. 歴史的環境 5
- 3. 基本層序 17

第3章 遺跡の調査内容

- 1. 確認された遺構の概要 18
- 2. 近世以降の遺構と遺物 19
 - (1) 1号建物遺構 21
 - (2) 土坑 23
 - (3) 溝状遺構 28
 - (4) 道路遺構 29
 - (5) 畠遺構 30
 - (6) 遺構外の出土遺物 32
- 3. 平安時代の遺構と遺物 32
 - (1) 竪穴住居 32
 - (2) ピット 37
 - (3) 遺構外の出土遺物 38
- 4. 古墳時代の遺構と遺物 39
 - (1) 馬蹄痕 39
 - (2) 道路遺構 39
- 5. 縄文時代の遺構と遺物 42
 - (1) 敷石住居 42
 - (2) 土坑 46
 - (3) 配石遺構 48
 - (4) 集石遺構 48
 - (5) 包含層の出土遺物 49
- 遺物観察表 65

第4章 調査の成果と課題 76

写真図版
抄録

挿図目次

第1図	津久田停車場前橋線上三原田バイパスの路線と発掘調査範囲	2	第25図	3号住居	37
第2図	滝沢御所遺跡の位置(国土地理院発行2万5千分の1地形図「鯉沢・渋川」使用)	4	第26図	3号住居出土遺物	38
第3図	周辺の遺跡分布(国土地理院発行2万5千分の1地形図「金井・伊香保・鯉沢・渋川」使用)	6	第27図	1～3・5号ピット	38
第4図	遺跡の基本層序	17	第28図	遺構外の出土遺物	38
第5図	グリッド及び旧石器トレンチの配置と土層図作成地点	19	第29図	古墳時代の遺構配置	40
第6図	近世以降の遺構配置	20	第30図	道路遺構	41
第7図	1号建物(上段基礎)	21	第31図	1号敷石住居	42
第8図	1号建物(下段基礎)	22	第32図	縄文時代の遺構配置	43
第9図	1号建物出土遺物	23	第33図	1号敷石住居出土遺物(1)	44
第10図	近世以降の土坑(1)	24	第34図	1号敷石住居出土遺物(2)	45
第11図	近世以降の土坑(2)	25	第35図	土坑(縄文時代)	47
第12図	近世以降の土坑(3)	26	第36図	土坑出土遺物	48
第13図	近世以降の土坑(4)	27	第37図	配石・集石遺構	49
第14図	7号土坑出土遺物	27	第38図	包含層出土石器の時期別分布	50
第15図	近世以降の溝状遺構	29	第39図	包含層出土石器の時期別数量	51
第16図	近世以降の溝状遺構・道路遺構・畠遺構	30	第40図	包含層出土石器(1)	52
第17図	溝状遺構の出土遺物	30	第41図	包含層出土石器(2)	54
第18図	近世以降の畠遺構	31	第42図	包含層出土石器(3)	55
第19図	遺構外の出土遺物	32	第43図	包含層出土石器(4)	56
第20図	平安時代の遺構配置	33	第44図	包含層出土石器(5)	57
第21図	1号住居	34	第45図	包含層出土石器の器種・系列別組成	59
第22図	1号住居出土遺物	35	第46図	包含層出土石器の系列別分布	60
第23図	2号住居	36	第47図	包含層出土石器(1)	61
第24図	2号住居出土遺物	37	第48図	包含層出土石器(2)	63
			第49図	古墳時代の放牧地が確認された遺跡(国土地理院発行2万5千分の1の地形図「金井・伊香保・鯉沢・渋川」使用)	77

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧(縄文時代)	8	第7表	ピットの規模一覧	37
第2表	周辺の遺跡一覧(弥生時代～平安時代)	12	第8表	道路遺構の規模一覧(古墳時代)	41
第3表	土坑の規模一覧(近世以降)	28	第9表	土坑の規模一覧(縄文時代)	46
第4表	溝状遺構の規模一覧	28	第10表	包含層出土石器の数量一覧	51
第5表	道路遺構の規模一覧(近世以降)	29	第11表	包含層出土石器の器種別数・重量一覧	59
第6表	畠遺構の規模一覧	30			

写真目次

PL. 1	1. 発掘調査開始前の遺跡状況(東より)	3. 7・20・31号土坑	
	2. 重機による表土層の掘削・搬出状況(東より)	4. 調査区南半部の遺構確認状況(南より)	
PL. 2	1. 調査区南壁面の土層堆積状況(北より)	5. 13・14号土坑	
	2. 同上(部分拡大)	6. 同左・埋没土堆積状況	
PL. 3	1. 1号建物遺構の全景(東より)	7. 17・26号土坑	
	2. 同上・建物基礎上段部の南東隅確認状況(北東より)	8. 同左・埋没土堆積状況	
	3. 同左(西より)	PL. 7	1. 24号土坑
	4. 同上・中央部の確認状況(東より)		2. 同左・埋没土堆積状況
	5. 同左・西側列の確認状況(北より)		3. 27～30号土坑
PL. 4	1. 1号建物基礎上段部の南側列確認状況(北より)		4. 同左・埋没土堆積状況
	2. 同左・調査風景		5. 第1文化面の調査風景
	3. 同上・上下段基礎の重層状況		6. 1号溝
	4. 同左		7. 2号溝
	5. 基礎下段部の確認状況(東より)		8. 4号溝
	6. 同左(北より)	PL. 8	1. 5号溝
	7. 同上・南側列の確認状況(東より)		2. 12号溝
	8. 同左・北側列の確認状況(東より)		3. 畠遺構の確認状況
PL. 5	1. 調査区南半部の土坑確認状況(北西より)		4. 同左
	2. 土坑群の確認状況(東より)		5. 1号畠
PL. 6	1. 4号土坑		6. 2号畠
	2. 同左・埋没土堆積状況		7. 2号畠

8. 3号畠
- PL. 9 1. 1号住居
2. 同上・埋没土堆積状況(セクションA→)
3. 同左・(セクション←A')
4. 同上・遺物出土状況
5. 同左・遺物出土状況(No.8)
- PL.10 1. 1号住居の竈確認状況
2. 同左・埋没土堆積状況(セクションD-D')
3. 同上・埋没土堆積状況(セクションC-C')
4. 同上・掘り方状況
5. 床面の掘り方状況
6. 同左・床下土坑の埋没土堆積状況
7. 住居内の遺物出土状況
8. 同左
- PL.11 1. 2号住居
2. 同上・埋没土堆積状況
3. 同上・遺物出土状況
4. 同上・竈確認状況
5. 同左・竈内遺物出土状況
- PL.12 1. 2号住居・竈埋没状況(セクションF-F')
2. 同左・貯蔵穴確認状況
3. 同上・貯蔵穴埋没状況(セクションD-D')
4. 同上・床面掘り方状況
5. 同上・床面掘り方の埋没状況
6. 同上・竈断ち割り調査状況
7. 同上・竈掘り方状況(セクションG-G')
8. 同左・(セクションE-E')
- PL.13 1. 3号住居の竈付設状況
2. 同左・北側隅の確認状況
3. 同上・埋没土堆積状況
4. 同上・遺物出土状況(No.3)
5. 同上・遺物出土状況(No.6)
6. 同上・遺物出土状況(No.2)
7. 同上・竈埋没状況(セクションA-A')
8. 同左(セクションB-B')
- PL.14 1. 榛名山ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)直下の馬蹄痕確認状況(南東より)
2. 同上・部分
3. 同左・前脚馬蹄痕の形状と大きさ
4. 同上・後脚馬蹄痕の形状と大きさ
5. Hr-FP直下の遺構確認風景
- PL.15 1. 榛名山ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)直下の2号道路遺構確認状況(南より)
2. 同上・Hr-FPの堆積状況
3. 同左
4. 1号道路遺構の確認状況(東より)
5. 同左・拡大
- PL.16 1. 縄文時代遺構の確認状況(南より)
2. 1号敷石住居
- PL.17 1. 1号敷石住居の石敷き確認状況
2. 同左・部分拡大
3. 同上・土器埋設戸の確認状況
4. 同左
5. 同上・断ち割り状況
6. 遺物出土状況(No.12)
7. 遺物出土状況(No.10・11)
8. 遺物出土状況(No.8)
- PL.18 1. 1号配石
2. 同左・拡大
3. 同上
4. 同左・土坑状の落ち込み断面
5. 同上・土坑状の落ち込み断面(拡大)
6. 1号配石の調査風景
7. 1号集石
8. 同左
- PL.19 1. 土坑調査の全景(北西より)
2. 37号土坑
3. 同左・埋没土堆積状況
4. 38号土坑
5. 同左・埋没土堆積状況
- PL.20 1. 39号土坑
2. 同左・埋没土堆積状況
3. 41号土坑
4. 同左・遺物出土状況
5. 同上・埋没土堆積状況
6. 42号土坑
7. 43号土坑
8. 同左・遺物出土状況
- PL.21 1. 44~47号土坑の確認状況(西より)
2. 44号土坑の埋没土堆積状況
3. 45号土坑
4. 同左・埋没土堆積状況
5. 46号土坑
6. 同左・埋没土堆積状況
7. 47号土坑
8. 同左・埋没土堆積状況
- PL.22 1. 包含層遺物の出土状況(O-21~22グリッド 東より)
2. 同上(O-21~22グリッド 東より)
- PL.23 1. 包含層遺物の出土状況(北より)
2. 同左(O-21グリッド)
3. 同上(I~N-15グリッド)
4. 同上(P-22グリッド)
5. 同上(J-13グリッド)
6. 同上(G-9グリッド)
7. 同上・石匙の出土状況(I-13グリッド)
8. 同上・打製石斧の出土状況(O-21グリッド)
- PL.24 1. 旧石器時代調査のトレンチ配置状況(北より)
2. 同上・トレンチ内の土層堆積状況

第1章 発掘調査の概要

1. 調査に至る経緯

群馬県渋川土木事務所により、赤城山西麓の起伏の大きな地域での道路状況を改善するため、直線化や道幅の拡充による移動時間の短縮と安全を確保する目的で、(一)津久田停車場前橋線上三原田バイパス道路整備事業が計画された。当該道路整備事業の事業区間は、渋川市赤城町滝沢地内から同市赤城町持柏木までの総延長1,480mであり、平成13年度より事業開始することとなった。

平成24年度に当該事業と埋蔵文化財の調和を図るため、事業主体者である渋川土木事務所より遺跡の有無を確認するための試掘調査依頼が群馬県教委文化財保護課(以下、文化財保護課)に提出されたのを受けて、同課により試掘調査がその都度実施されてきた。

滝沢御所遺跡の発掘調査実施の契機は、平成24年度に上記の起点から北方へ640mほど離れた渋川市赤城町滝沢400-3他で同事業の工事が実施されることとなり、文化財保護課により遺跡存在の有無を判断するための試掘調査が平成24年11月に実施されたことによる。

試掘調査では、南北を谷地形に挟まれた丘陵上の1,464㎡の範囲で6世紀初頭に噴火した榛名山二ツ岳の火山灰(榛名山二ツ岳渋川テフラ、以下Hr-FAと呼称)及び6世紀中葉の同火山噴火軽石(榛名山二ツ岳伊香保テフラ、以下Hr-FPと呼称)が重層的に堆積している状況が把握され、これら火山灰や軽石層の上下面において近世から古代の遺構の存在が確認された。この調査結果を基に、渋川土木事務所と文化財保護課による発掘調査実施の調整が行われ、平成25年度に公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下事業団)が発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の方法と工程

発掘調査は、試掘調査の結果を踏まえて平成25年11月1日～同年12月31日までの2ヶ月間に定められた。本調査開始に先立ち、試掘調査により榛名山二ツ岳の噴火に

伴う火山灰や軽石などのテフラ層が2層にわたって確認できたことから、これまでの当地域における考古学的調査の蓄積も踏まえて、各テフラ層の直上及び直下面での古墳時代や奈良・平安時代の遺構存在を考慮し、複数面に及ぶ文化層の調査計画を策定した。また、この多面調査に際して掘削排土量が多くなることが予想されたが、排土置場を調査対象地内に設定せざるを得ないことから、その確保のために調査対象区域を二分割して、掘削・排土・調査・埋め戻し等の作業を交互に繰り返しつつ調査を行うこととした。

第1面の調査は、現在の耕作土からHr-FP層直上までの層厚30cm前後の表土を掘削を重機で行い、その後人力による遺構確認作業や遺構掘削調査について遺跡掘削請負による発掘作業員が行った。また、各遺構の埋没土の観察や写真撮影等は担当者が行い、各遺構の埋没土層堆積図(セクション図)や遺構平面図、遺物出土状況図などの測量図作成は測量業者委託により行った。

第2・第3面の調査は、層厚20cm前後のHr-FP層及び層厚約10cmのHr-FA層について、その掘削除去から遺構確認・調査までを遺跡掘削請負業者が行い、第1面と同様に記録作業は担当者が、測量図作成は測量委託により実施した。

第4面の調査は、Hr-FA層以下の層厚約60cmの黒色土中から縄文土器破片が多く出土したため、5m×5mのグリッド網を調査区域全体に設定し、各グリッドを単位にして出土遺物の記録・取り上げを行った。その後、ローム層上位の漸移土層面(VIII層)にて、住居・土坑などの確認を行い、調査と記録作成を実施した。尚、グリッドの設定に際し、遺跡地南東部の国家座標X軸57.100、Y軸-70.500の交点を起点とし、5m間隔でX軸方向を算用数字、Y軸方向をアルファベットの記号を付し、各グリッド南東隅の交点を名称とした。(第5図)

旧石器調査については、6個所に5m×2.5mのトレンチを適宜設定し、IX～XII層までの層厚1mのローム層調査を行ったが石器を確認することはできず、全調査を終了した。

第1章 発掘調査の概要



第1図 津久田停車場前橋線上三原田バイパスの路線と発掘調査範囲

第2章 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

当遺跡は、渋川市赤城町滝沢に所在し、JR上越線の渋川駅から北東方向約4kmに位置している。当遺跡を載せる赤城山は県中東部に位置し、県北半部をほぼ南北に貫流する利根川を挟んで榛名山、子持山および前橋台地と接している。同山は黒松山(標高1,828m)を最高峰とした那須火山帯の南端に位置する第四紀の複合成層火山である。基盤層は火砕流堆積物であり、この上位に下部ロームをはじめとした中・上部ロームが堆積して原形面を形成している。遺跡内のローム層中には、浅間山を給源とする約1.5万年前の浅間白糸軽石(As-SP)、約1.6～2.1万年前の板鼻褐色軽石群(As-BP)や約2.1～2.2万年前の広域テフラの始良Tn火山灰(AT)、榛名山を給源とする約4万年前の榛名八崎軽石(Hr-HP)等の更新世のテフラが堆積している。また、これらのローム層の上位には、層厚0.5～1mほどの黒ボク土や淡色黒ボク土が堆積し、さらにその上位に当遺跡の西方16kmに位置する榛名山ニッ岳を給源とする6世紀第1四半期の榛名ニッ岳渋川テフラ(Hr-FA)と6世紀第2四半期の榛名ニッ岳伊香保テフラ(Hr-FP)が、約30～50cm前後の層厚で堆積している。

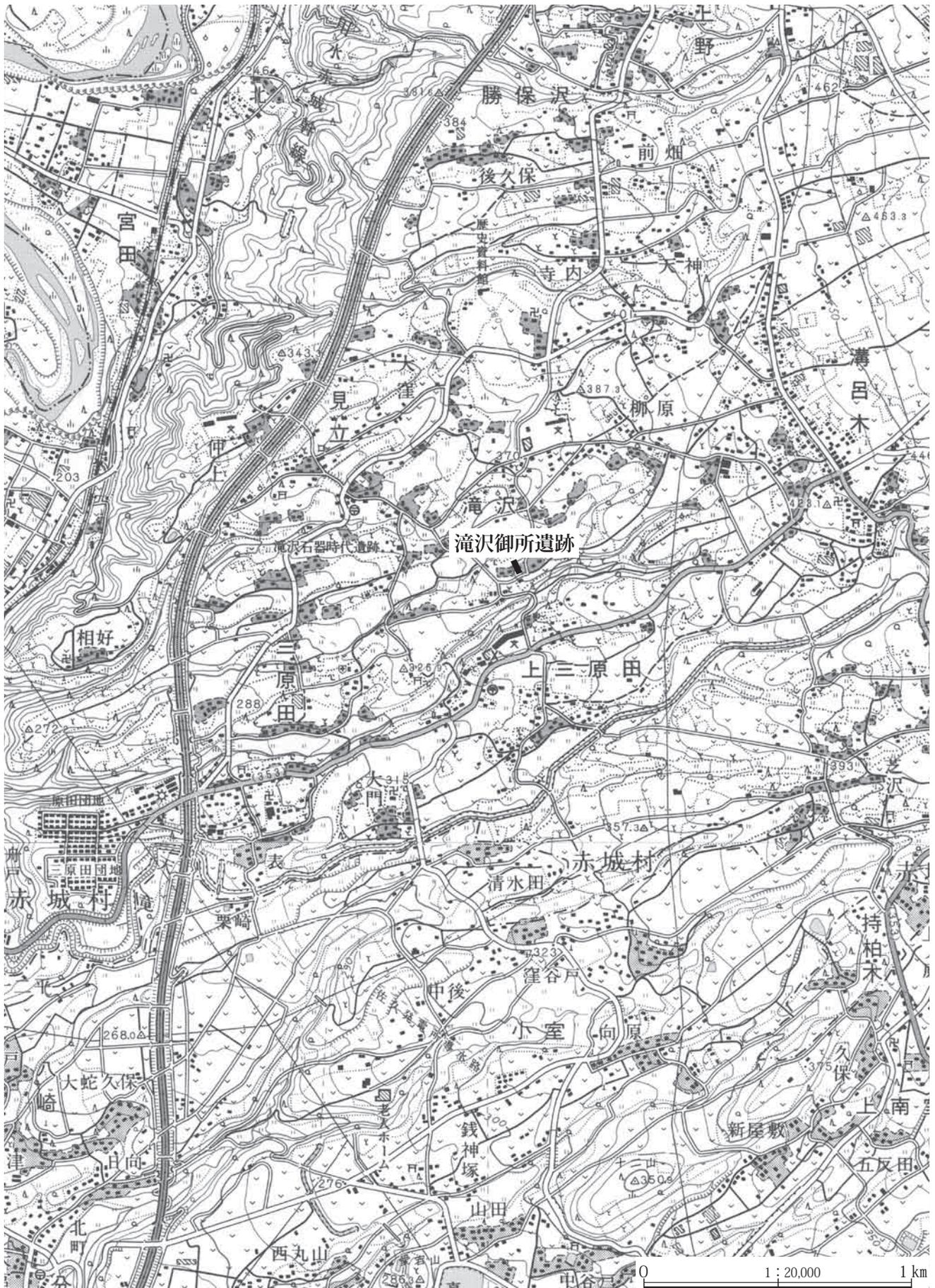
赤城山西・南麓における全体的な地形を概観すると、南麓は浅い編射谷と緩やかな原形面からなる広大な裾野地形を呈するが、北西麓にいくにつれて比較的大規模な幅射谷が発達した丘陵地形を呈する。南・西麓ともに、標高500m付近で山地地形から丘陵地形へと地形が変換し、現在ではこの近辺を境にして上位部では落葉広葉樹を主体とした山林地帯、下位部では集落及び畠地を中心とした耕作地が展開している。西麓の末端部は、三国山脈に端を発する利根川によって大きく侵食され、現在では比高差約100mの崖線が形成されるとともに、同河川に近接した地点では幅200～500mにおよぶ数段の河岸段丘が形成されている。また、西麓では山頂部に形成されたカルデラ湖の大沼を源流とする沼尾川のほかに、標高550m～300mにかけて赤城町内だけでも60箇所を超える

多数の湧水点が存在し、これらの流水を集めた急勾配の中・小河川が山麓斜面を流下して利根川へと注いでいるが、それらの侵食作用により樹枝状の開析谷が発達している。特に、利根川の崖線と近接するその末端部では、下刻侵食作用により台地との比高差が50m前後の深い開析谷が形成され、これらの開析谷に挟まれた台地部は幅の狭い馬背状の丘陵地形を呈している。

当遺跡もこうした東方から西方へと傾斜する幅250mほどの馬背状丘陵の北側緩斜面部に位置しており、標高は348mである。当遺跡の北東約800mには標高360m地点より湧出する小河川によって幅約80mの開析谷が形成されている。また、南側でも同様の開析谷が存在し、これらと丘陵部との比高差は約10～20m前後である。

前述したように、当地域には6世紀第1・2四半期に噴出した火山灰・軽石が少なくとも30cm以上の層厚で堆積し、古墳時代には甚大な被害を及ぼしたことが判明しているが、逆にこの火山噴出物の堆積が当時の生活面を保護する機能を果たしたことにより、他地域では確認不可能な生活痕跡の発見をもたらしている。

現在、この軽石をはじめとする火山噴出物は表土層中に多量に鋤込まれており、極めて保水性に乏しい土壌を形成しているが、これを耕作土とする台地部の畠地ではこんにゃく等の農作物が特産物として栽培されている。一方、利根川沿いの河岸段丘上や中小河川に面した開析谷内では、小規模ながら棚田状の水田が経営されているが、用水を確保するために湧水や小河川を利用した溜井・溜池などの灌漑施設も存在している。



第2図 滝沢御所遺跡の位置(国土地理院発行2万5千分の1地形図「鯉沢・渋川」使用)

2. 歴史的環境

当遺跡の立地する赤城山西麓やその周辺域は、6世紀第1・第2四半期に噴出した二度にわたる榛名山二ツ岳の火山灰・軽石が多量に堆積し、噴出・降下方向の中心部域では2m以上に及ぶ層厚も認められる。こうした大量の火山噴出物堆積により、古墳時代以前の文化面が完全に埋没し、地表からの遺跡確認が困難な状況にあった。近年、幹線道路交通網整備や圃場整備などの工事に伴う遺跡発掘調査により、各時代の文化的動向も徐々に明らかになりつつある。ここでは、遺跡内容が大きく異なる縄文時代と弥生時代～平安時代を区別して遺跡一覧を作成すると共に、広域にわたる遺跡分布を概観する都合上、地形的に主要河川の利根川と吾妻川により隔絶された下記の3地区を単位にして、各時代別様相を概述する。

尚、分布図・表の作成は、主要な遺跡を対象にしており、網羅的には行っていないことを付記しておきたい。

- A地区：吾妻川及び利根川の右岸域で、榛名山の南東麓にあたる区域。
- B地区：吾妻川と利根川に挟まれた旧子持村域で、子持山の南麓から東麓にあたる区域。
- C地区：利根川の左岸域で、赤城山の南西麓にあたる区域。

(1) 縄文時代

草創期 第3図に示されるように、縄文時代の遺跡分布はC地区の湧水地や開析谷に隣接した標高180～450mの丘陵上に中心域がある中で、当期ではB地区の旧利根川流水域に接した河岸段丘上に立地する傾向をもつ。これについては、サケ・マスなどの季節的河川漁撈と関連付けられているが、竪穴住居等の遺構を伴わないことから、定住的生活にはほど遠い前時代的な遊動的な生活形態が想定される。隆起線文・爪形文・多縄文土器や有舌尖頭器などの石器が出土した遺跡として、白井北中道Ⅱ(119)を始め白井十二(116)、吹屋犬子塚(121)、吹屋中原(123)、吹屋三角(126)、白井南中道(138)があり、特に白井北中道Ⅱ遺跡ではほぼ完形に復元可能な隆起線文土器が出土している。

早期 当期では、小規模ながら竪穴住居による集落

形成が明瞭になり、1地点における定着性が強まる。C地区を主体にA・B地区にも立地が認められるが、代表的事例として井草Ⅰ式～稲荷台式期の竪穴住居6軒を確認した城山(97)がある。一時期1～2軒での小規模集落が特徴的で、河床礫を用材にした石組み屋外炉の存在も注意される。その他に竪穴住居が真壁諏訪(80)で確認され、また土坑や遺物出土のみの遺跡は、勝保沢中ノ山(8)をはじめ33遺跡がある。

立地は草創期での河岸段丘上とは異なり、丘陵部に移行する傾向がかなり明瞭である。これは後述する前期の立地動向と重複しており、気候温暖化に伴う植生変化に連動した初期定住化が、相同のエリアを生活領域とした結果と考えられる。ただし、住居構造の脆弱さや短期利用、それに複数期にわたる集落形成などから、季節的あるいは短期間での移動と同一場所への回帰行動が想定される。この他に、陥穴を伴う遺跡がC地区の銭神塚(61)で確認されるが、同域では標高200～350mを中心にして前・中期の陥穴も存在し、当期から明瞭化する定住に付随した罫猟による狩猟域形成として注目される。

前期 C地区での発掘調査や遺跡分布調査の成果により、当期の集落立地が他期を遙かに上回って最多となること明らかになってきた。その動向は、関山・黒浜式期に顕著な増加現象があり、諸磯b式期にピークを迎えつつ同c式期には漸減に転じて、十三菩提式期では集落形成を認めることが困難な状況となる。初頭の花積下層式期の集落は三原田城(43)、見立相好(17)、三原田仲井(22)、上三原田中坪(26)のみであり、続く二ツ木式期でも見立峯(30)を始め上三原田大宮(25)、上原・三角(89)、芝山(99)の4遺跡を確認するとどまる。中葉の関山式期に入ると見立十三塚(33)、諏勝保沢中ノ山、諏訪西(18)、三原田諏訪上(20)を始め18遺跡で、次いで黒浜・有尾式期では中畦(19)、三原田諏訪上、上三原田大宮、分郷八崎(58)の他に14遺跡で集落が確認されて増加傾向が顕著となる。関山式期には、深い掘り込みや炉・柱穴を伴う定型的な住居構造が確立するが、集落規模的には2～3軒による小規模なものが主体的である。また、各住居単位での拡張や建て替えの痕跡もかなり高頻度で認められ、1地点での居住期間がかなり長期に渡るか、あるいは一定期間を空けて反復的に同一住居を利用する状況が窺える。諸磯a式期の集落は三原田三反田(21)の他



第3図 周辺の遺跡分布(国土地理院発行2万5千分の1地形図「金井・伊香保・鯉沢・渋川」使用)

に3遺跡と少ないが、同b式期には集落形成が最多となり、白井十二や吹屋伊勢森(115)を含め18遺跡を上げることができる。当期集落も小規模だが、他地域の安中市中野谷松原遺跡では大型住居や掘立柱建物、墓坑群などを伴う環状集落が形成されており、遺跡・集落数の増加に象徴される人口増加に対応した、地域集団の統合機能を担う拠点集落が出現する。次の諸磯c式期では集落数が漸減し、滝沢天神(14)、滝沢日向堀(29)の他に3遺跡を数えるのみで、十三菩提式期では皆無となる。こうした衰退現象の背景については、気候変動・資源の枯渇・社会構造の変化などが指摘されている。

中期 初頭の五領ヶ台式期～阿玉台I式期では、前期末の文化的衰退現象がそのまま継続し、集落形成は三原田三反田と滝沢江戸久保(31)のみにとどまる。集落数が増加に転じるのは阿玉台II式期以降であり、C地区を中心に房谷戸(50)、三原田(44)、上三原田東峯(39)、道訓前(70)を始め8遺跡を数える。注目されるのは、三原田、上三原田東峯、道訓前などの遺跡では、後半段階に出現・形成される大規模環状集落地への先行立地や環状集落形態のアウトライン決定が、阿玉台II式段階に存在することである。ただし、集落規模は一時期2～5軒程度で、小・中規模集落が主体を占める。勝坂3式期以降の後半段階では、集落数が爆発的な増加を見せ始め、拠点的な大規模環状集落の形成を伴いつつ加曾利E3式期にピークとなる。山麓末端の台地・丘陵部では、三原田、上三原田東峯、道訓前などの遺跡で大規模環状集落が形成され大きな画期を迎える。このような大規模環状集落は、一義的には一時期10～20軒による集中的居住が長期間にわたって繰り返し行われた痕跡の累積結果であるが、同時に一定範囲の同族的単位集団を統合する拠点集落でもあり、基本的には相互に5km前後の間隔を置いて分布している。350軒弱の竪穴住居を確認した三原田遺跡を基点にすると、上三原田東峯遺跡は北東へ2km離れ、道訓前遺跡は南東へ4km離れて立地する。また、第3図にプロットされていないが、道訓前遺跡のさらに南東4kmには旭久保遺跡Cの環状集落が立地している。半径3km以内の同一領域内に2つ以上の拠点集落が存在する場合は、同一集団による一対の拠点集落と見なす考え方(谷口1993)や、北米や極東の狩猟採集民のような冬期と夏期の季節的拠点集落を持ち、両集落間を振り

子状に反復利用する民族誌の事例(小林1986)に倣うならば、上記の三原田遺跡周辺の遺跡は同一領内のものであり、かつ三原田遺跡と上三原田東峯遺跡とは季節的拠点集落の関係を示唆している。さらに、三原田遺跡の3km圏外に位置する道訓前遺跡や旭久保遺跡Cなどは、各領域における拠点集落と見なすことができる。しかし、こうした大規模環状集落も柄鏡形敷石住居形態が確立・普遍化する加曾利E4式期には解体し、集落・遺跡数の減少と分散化を伴いつつ、多分に呪術的性格を持つ柄鏡形敷石住居の出現と共に一時期2軒前後の小規模集落を主体とする構造へと変容を遂げてゆく。本報告の滝沢御所遺跡(32)でも、この時期の柄鏡形敷石住居と想定される住居1軒が確認されているが、環状集落解体後に小規模・散在化する居住形態や集落動向を反映したものだろう。同期の集落遺跡には、三原田、空沢(160)の他に2遺跡があるに過ぎない。

後・晩期 中期末葉の環状集落解体に連動した集落・遺跡数の減少傾向は、さらに明瞭となる。前半段階には少ないながら、群馬県の史跡に指定された小室敷石住居跡(66)や前中後(62)、北町(56)、滝原(90)、浅田(189)の他に9遺跡がある。その中でも前中後遺跡は、称名寺式期～堀之内2式期の柄鏡形敷石住居が存在し、その張出基部の左右には延長15mの弧状列石が配置されると共に、その下位に4基の土坑墓や配石墓が付随している。こうした弧状列石や集団墓を随伴する柄鏡形敷石住居については、地域集団の葬祭儀礼を執行・統括するリーダーが居住する特別な家屋＝「核家屋」とされ、一集落の範囲を超えて地域集団全体をも統率する機能・性格を持った人物の存在が想定されている。これに類似した弧状列石遺構を随伴する堀之内2式期～加曾利B1式期の柄鏡形敷石住居が、浅田遺跡でも1軒確認されている。ただし、浅田遺跡では弧状列石の下位に配石墓などは存在せず、周縁に日時計状や方形組石状の配石遺構が複数基組み込まれるにとどまる。次の加曾利B1式期以降には集団墓が特定集落から分離・独立して墓域を形成する傾向が明確となり、滝沢(28)や押手(107)では、配石墓や石棺墓群が上位の列石と一体化しつつ祭祀場への変容に伴い積み石状に変化している。当期の集落については極めて痕跡的となり、第3図中にプロットされる遺跡は存在しないほど希薄となる。吹屋犬子塚で、包含層中から加曾利

第2章 遺跡の立地と環境

第1表 周辺の遺跡一覧(縄文時代)

番号	遺跡名	時期別の遺跡内容						備考(住居数)	番号	遺跡名	時期別の遺跡内容						備考(住居数)
		草創期	早期	前期	中期	後期	晩期				草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	
8	勝保沢中ノ山遺跡		△	●	△	△		前期14	94	天神山遺跡					△		
9	見立大久保遺跡			●	●	△		前期4	95	十二ノ後遺跡			●				前期1
13	滝沢柳原遺跡			●				前期1	96	下箱田向山遺跡			●				前期8
14	滝沢天神遺跡-A・B・C-			●	△			前期5	97	城山遺跡		●	○				早期6
15	見立八幡遺跡			●	●	●		17	98	東篠遺跡		△	○				
16	見立溜井遺跡		△	●	●	△		8	99	芝山遺跡			●	●			前期16、中期1
17	見立相好遺跡			●				前期3	100	瓜山遺跡		△	△	●			中期2
18	諏訪西遺跡		△	●	●			前期12	101	上白井西伊熊遺跡			●	○	△		前期6
19	中畦遺跡		△	●	○	●		前期8	102	中郷遺跡			●	●	○		前期14、中期108、後期1
20	三原田諏訪上遺跡		△	●	●			前期21、中期4	104	池田沢東遺跡			△	△	△		
21	三原田三反田遺跡		△	●	●	△		前期9、中期1	107	押手遺跡			●		●	○	前期1、後期2
22	三原田仲井遺跡			●	●	△		前期8	108	丸子山遺跡			△	△	●		後期1
23	上三原田日向遺跡			△	△				112	吹屋遺跡			●				前期7
25	上三原田大宮遺跡		○	●	●			前期11、中期1	115	吹屋伊勢森遺跡			●	△	△		前期5
26	上三原田中坪遺跡		△	●	△			前期1	116	白井十二遺跡		○	●				前期12
27	見立清水遺跡			△	△				117	白井佐又遺跡			△	△	△	△	
28	滝沢石器時代遺跡		△	●	●	●	●	前期2、中期6、後期1、晩期4	118	白井北中道Ⅲ遺跡			●				前期6
29	滝沢日向堀遺跡			●	●	●		前期4、中期5、後1	119	白井北中道Ⅱ遺跡		△	△	○	△	△	
30	見立峯遺跡			●	●			前期14、中期2	120	白井北中道遺跡			△	△	△	△	
31	滝沢江戸久保遺跡			●	●			中期1	121	吹屋犬子塚遺跡		△	△	●	△	△	前期1
32	滝沢御所遺跡				●			住居1	123	吹屋中原遺跡		△	△	●	●	△	前期2、中期1
33	見立十三塚遺跡		○	●	●	△		前期12、中期1	125	中郷恵久保遺跡			△	○	○		
34	上三原田庚塚遺跡			●				前期8	126	吹屋三角遺跡		△				△	
36	上三原田大島遺跡								127	中郷田尻遺跡			△	△	△		
39	上三原田東峯遺跡			●	●			前期4、中期13	128	吹屋糶屋遺跡			△	△	△	△	
42	上三原田大門遺跡			●				前期1	134	白井丸岩遺跡			△	△	△	△	
43	三原田城遺跡		△	●	△			前期9	135	白井大宮遺跡			○	△	○	△	
44	三原田遺跡			●	●	●		前・後期：数軒、中期300以上	138	白井中南道遺跡		△	△	△			
49	西ノ平遺跡			●				前期1	141	白井二位屋遺跡			△				
50	房谷戸遺跡Ⅰ				●			中期18	142	金井東裏遺跡			●	●	●		
51	房谷戸遺跡Ⅲ			△	●			中期1	153	高源地東Ⅰ遺跡			○	●	●		中期1、後期1
53	竹ノ原遺跡			△	△	△			155	諏訪ノ木遺跡			△	●	△	△	前期1
56	北町遺跡			●	●	●		前～後期8	156	石原久保貝道遺跡					△		
57	田ノ保遺跡					△			159	石原東遺跡			△		△		
58	分郷八崎遺跡		△	●	○	△		前期11	160	空沢遺跡			△	●	●	△	前期1、中期25
60	群馬用水分郷八崎遺跡			●	●			前期1、中期1	161	行幸田寺後遺跡					△		
61	銭神塚遺跡		○	△	△				162	空沢西遺跡				○	△		
62	前中後遺跡Ⅰ～Ⅳ区			△	●	●		中期1、後期9	164	行幸田西遺跡					△		
63	六反田遺跡Ⅱ				●			中期1、後期9	165	行幸田城山遺跡			●	●			前・中期13
64	西坂脇遺跡			●		○		前期4	166	中筋遺跡			△	●	△	△	前期2
66	小室遺跡				△	●			175	行幸田山遺跡			△	△	●		中期40
67	小室高田遺跡		△	●	△			中期33	176	神宮寺西遺跡				●			中期2
68	棗久保遺跡			●				前期1	177	有馬後田東遺跡				●			前期6
69	森山遺跡			●				前期2	188	半田中原・南原遺跡			○	●	●	○	前期6、中期22
70	道訓前遺跡		△	△	●			中期40	189	浅田遺跡						●	
71	味噌野遺跡Ⅲ・Ⅳ			●	△			前期3									
73	下遠原遺跡A～D区			●	●			前期7、中期10									
76	水泉寺地区遺跡群			●	●			前期4									
78	真壁向山遺跡			●				前期1									
80	真壁諏訪遺跡		●	△				早期1									
81	下山田原遺跡Ⅲ			●				前期1									
82	開発遺跡			●				前期3									
83	八幡山遺跡			●	△			前期5									
89	上原・三角遺跡		○	●	●			前期9、中期6									
90	滝原遺跡					●		後期1									
92	真壁城山遺跡			●				前期1									

凡例
 ● 竪穴住居を伴う集落遺跡
 ○ 土坑等を伴う遺跡
 △ 遺物包含層のみの遺跡

B1式期の土器を確認している程度であり、晩期についてはさらに痕跡的となる。他地域での状況を考慮すれば、遺跡立地自体が中小河川に面した沖積地近縁の低地部を指向する傾向が顕著に認められることから、今後低位段丘面の調査を通じてその実態が明らかになると考えられる。

(2) 弥生時代

縄文時代晩期末葉の遺跡動向に類似して、前期前半は皆無の状況にある。前期後半から中期にかけてようやく集落形成が見られるようになり、A地区を中心に中村(170)、有馬(184)、有馬条里(173)などで確認されている。立地的には利根川の低位段丘面上に占地し、次の古墳時代へと連続する言わば拠点集落形成と考えられるが、中村遺跡の場合、中期後半の3軒の住居を圍繞するような複数条の溝が存在し、環濠集落の可能性が窺える点で注目される。前半期に特徴的な再葬墓は、第3図の範囲外北側に存在する南大塚遺跡や押手遺跡(107)で確認されている。後期に入ると遺跡・集落数が飛躍的に増加し、A地区では榛名山麓端部や利根川右岸段丘上の金井東裏(142)、中筋(166)、有馬廃寺(182)、有馬条里、有馬などの遺跡で、またB・C地区では樽(46)、田尻(48)、群馬用水分郷八崎(60)、下遠原(73)などの遺跡で集落が確認されている。全体的にはA地区での集落形成が顕著に認められるが、C地区の田尻・群用分郷八崎・下遠原の各遺跡では、剣・鏃などの鉄器が竪穴住居内から出土しており、後期集落内における鉄製武器・製品の普及・保有状況の一端を物語ると共に、利根川を挟んで対岸に立地する有馬条里遺跡の礫床墓副葬品と対比されるものとして注目される。墓に関わる遺物の確認事例は少ないが、有馬遺跡では方形周溝墓の主体部である礫床墓や壺棺墓内からガラス玉や鉄剣などの副葬品が出土している。こうした礫床墓は中村、田中(157)でも確認されており、礫床の上部に木棺が載ることを含めて当域における地域的な埋葬様式として把握されている。他の方形・円形周溝墓については、空沢(160)、神宮寺西(176)などA地区での存在が目立つが、B・C地区では、押出、田ノ保(57)でも確認されている。古墳時代への過渡期には、C地区での集落立地も活性化するようになり、代表的事例として三原田三反田(21)や分郷八崎(58)、水泉寺地区遺跡群

(76)などがあげられる。B地区では僅少だが、白井北中道Ⅲ(118)と中郷田尻(127)がある。

当時代の水田や畠などの生産址については未確認であり、規模や内容を含めて今後の調査課題となっているが、A地区に見られる集落形成の優位性は、後述する古墳時代に明らかのように、基本的には水田可耕適地の有無あるいはその広狭に関連性を持つと考えられ、次時代への継続的な集落立地が顕著なことも特徴的である。

(3) 古墳時代

当時代は遺構の種類が多岐にわたるため、集落・生産址・放牧地・墳墓に項目分けしてその概要を記述する。

集落 51遺跡が確認でき、弥生時代後期を遙かに上回る著しい増加傾向に転じるが、A地区とB・C地区とでは若干の様相が異なる。例えば、弥生時代中期から継続的に営まれる4～5世紀代の集落は、有馬条里(173)や有馬(184)などいずれもA地区に限定されている。一方、C地区では4世紀代の集落が北町(56)と分郷八崎(58)で確認されているが、前後時期の継続性に乏しい。また、滝沢天神(14)、三原田諏訪上(20)、分郷八崎、下遠原(73)などの遺跡では、弥生時代後期末と6世紀後半の集落が併存するが、4～5世紀代が欠落している。こうした傾向は、B地区でもほぼ同様な状況にある。

5世紀後半になると、宮田諏訪原(3)を始め27遺跡で新たに集落が形成され、各地区共に飛躍的な増加や、標高300m付近の丘陵部にまで集落展開するなどの文化的高揚が顕著に認められる。

6世紀初頭～中葉では、榛名山二ツ岳噴火によるHr-FAやHr-FPで直接埋没した中筋(166)と黒井峯(106)、西組(190)が特筆される。これらの遺跡では、竪穴住居に付随する垣根で圍繞された平地式住居や祭祀遺構・水田・畠・道などの遺構が確認され、当該期の集落構造の実体を解明した点は重要である。

ところで、当域は6世紀中葉に噴出した軽石(Hr-FP)の堆積により壊滅的な被害を被っているが、その程度は噴出の軌道上に位置するA地区北半部・B地区・C地区北半部が最も過酷で、層厚約1～2mにも及ぶ軽石堆積が認められる。その後、この地区での集落形成は基本的に平安時代まで認められないが、B地区の黒井峯、白井南中道(138)や白井二位屋(141)では小規模ながら7世紀

後半の集落が立地し、他区域に先駆けた再開発や復興の兆しが窺える

生産址 Hr-FAとHr-FPの2回に及ぶ火山噴出物の直下から、水田が19遺跡、畠が29遺跡で確認されているが、A地区の有馬条里遺跡では時期的にそれらに先行する3世紀末～4世紀初頭の浅間軽石(As-C)や5世紀代の榛名有馬火山灰(Hr-AA)下から畠が確認されている。当域は、弥生時代の集落形成や後述する前期古墳の出現においても他区域に先行しており、相互に関連した文化動向として理解される。

6世紀初頭のHr-FA直下では、小区画水田がA地区の中村、B地区の吹屋糺屋(128)、C地区では当時代の水田跡調査の草分けとなった宮田(193)や田ノ保(57)等を始め12遺跡で、また畠がA地区の中村・有馬、B地区の吹屋中原(123)・吹屋糺屋、C地区の宮田諏訪原など11遺跡で確認されている。

6世紀中葉のHr-FP直下では、先と同様の小区画水田がA地区の中村・有馬条里、B地区の吹屋犬子塚(121)・中郷恵久保(125)、C地区の田ノ保など16遺跡で、また畠がA地区の高源地東I(153)、B地区の黒井峯・吹屋伊勢森(115)、C地区の宮田諏訪原など21遺跡で確認されている。

これらHr-FAとHr-FPの火山噴出物で埋没した生産址に特徴的なことは、A地区の水田域が広大な面積に展開するのに対して、B・C地区では幅狭な開析谷を利用した狭小面積にとどまることと、Hr-FAの被災後に畠地から水田耕地への変換がA地区を中心に顕著に認められることである。こうした背景には、元来の地形や火山噴火がもたらした地形・土壌変化が関係しているだろうが、水田耕地化への強い動向が存在したことを示すものだろう。また、B地区では多くの場合、Hr-FP直下の畠と後述する放牧地とが同一遺跡内に併存しており、相互に密接な関連性を有している。

放牧地 B地区を中心にして、Hr-FPの直下から21遺跡で確認されている。同域では、道路建設関連の発掘調査により、約400haもの広大な面積に及ぶ放牧地が想定されている。前述したように、各遺跡において放牧地と畠とが同一面に併存していることから、二圃制や畠作休耕中の放牧地利用、あるいは放牧地の一角を利用した畠耕作などが想定されている。当報告の滝沢御所遺跡の放

牧地は、畠が確認されていないために両者の関係は不明だが、C地区における初例の放牧地として特筆される。尚、Hr-FA直下の放牧地は、現在のところ金井東裏(142)のみであるが、当域における馬匹飼育が6世紀初頭までさかのぼる点は重要であろう。

墳墓 当時代を特徴付ける前方後円墳については、A地区の大崎3号墳(151)に対してその可能性が指摘されているものの、確実な事例は現在まで知られていない。4世紀代に遡る前期の古墳は、A地区の丘陵部に立地する行幸田山(175)で、鉄剣や銅鏡を副葬した高塚墳のA-1号墳が確認されているに過ぎない。基本的に上記事例を含め、方形周溝墓(低墳丘墓)及びその系統が当期の墳墓として主体的であり、A～C地区の標高200m前後の河岸段丘や山麓端部に立地する田尻(192)、押手(107)、空沢(160)、中村(170)などで確認されている。周溝墓は5世紀前半まで存続し、黒井峯、見立溜井(16)、田ノ保等で確認されているが、副葬品は管玉・ガラス玉を中心とした玉類であり、副葬品を伴わないものも多い。行幸田山遺跡の事例は、A地区の優位・先進性を象徴するものであるが、それに後続する当古墳群の造営は5世紀後葉で終焉し、これ以降支配領域を一瞥できる丘陵上立地は認められない。

先の生産址と同様に6世紀代の火山噴出物を基軸に見れば、Hr-FAの下位では5世紀代の竪穴式円墳が、A地区の半田中原・南原27号墳(188)や空沢7号墳、C地区の宮田河岸古墳群(4)などを上げることができる。Hr-FP下位では、A地区の空沢、B地区の浅田3号墳(189)、中ノ峯古墳(109)などが代表的で、横穴式が主体となる。一方、Hr-FPの上位に構築された古墳(群)は、7世紀後半にまで下るものがほとんどであり、A地区の半田中原・南原やB地区の吹屋I～III号墳(130)、C地区の久保地古墳群(5)などが代表的である。こうした火山噴出物と古墳の築造動向は、6世紀初頭のHr-FAによる被害は克服し得たものの、6世紀中葉の1～2m厚に及ぶHr-FP災害から復興するためには、約100年の歳月を必要としたことが窺える。

尚、大陸に起源を持つとされる積石塚古墳は、A地区を中心に丸子山(108)、坂下町古墳群(149)、東町古墳(150)、行幸田畑中(167)などがあり、5世紀末を中心に6世紀後半まで存在している。また、7世紀末の截石積

み石室を持つ古墳は、A地区の虚空蔵塚古墳(146)や第3図の範囲外だが金井古墳、B地区の將軍塚古墳等がある。

以上、集落・生産域・墓制・放牧地の4項目について概述したが、放牧地を除く3項目について総合的に見れば、大差ではないもののA地区の優位・先進性を看取することができよう。そうした文化的差異の背景については、後段の第4章にてあらためて触れたい。

(3)奈良・平安時代

6世紀中葉の榛名山二ツ岳火山災害からの本格的な地域復興・再開発は、7世紀を超えて8世紀まで待たなければならなかったことが、集落立地動向から看取することができる。他地区に先駆けた集落形成は、A地区の半田中原・南原(188)に見ることができる。当遺跡では、8世紀前半の竪穴住居62軒、掘立柱建物36棟の他に、約6ha以上を圍繞すると推定される幅1.5m×深さ0.6mの区画溝を確認したが、区画内は無遺構であることから律令期の「有馬島牧」とされ、弘仁9(818)年の大地震で廃絶している。これに近接する中村(170)では、8世紀中葉～後葉の竪穴住居34軒、掘立柱建物5棟などが確認されたが、いずれも9世紀代まで継続することなく廃絶しているのが特筆される。

A～C地区の奈良・平安時代の集落は、当報告の滝沢御所遺跡を含め76遺跡を数えるが、その大半が9～10世紀代に帰属し、半田中原・南原遺跡や中村遺跡のような8世紀代の集落は極めて僅少な状況にある。こうした中で、A地区の金井製鉄遺跡(191)やC地区の羽場(52)では、8世紀代の製錬炉や小鍛冶遺構が確認されており、その存在が注目される。尚、9～10世紀代の集落で、50軒以上あるいはそれに近似する竪穴住居を確認した上記以外の代表的な遺跡としては、A地区の石原西浦(154)、諏訪ノ木(155)、石原東(159)、八木原沖田(171)、B地区の中組(105)、白井南中道(138)、白井二位屋(141)、C地区の分郷八崎(58)、箱田遺跡群(89)等がある。こうした継続的な集落は、各地区におけるいわば「拠点集落」の一つを構成するものと考えられる。

一方、律令期における和名類聚抄の「郷」に関連した遺跡としては、A地区の有馬条里(173)で「有馬□□」と刻書された石製紡錘車が出土し、有馬郷との関連性が指摘

されている。また当遺跡では9～11世紀の竪穴住居46軒、製錬炉3基、鍛冶1基などが確認され、平地部に展開する製鉄遺跡としても重要である。また、寺院等の宗教施設については、上野国分寺と同型式瓦の出土した8世紀前半～後半の有馬廢寺(182)や、8世紀末～9世紀前葉の瓦塔設置仏教遺構(仏堂跡)を伴う集落が確認されたC地区の三原田諏訪上(20)などがあり、この三原田諏訪上については、「深渠郷」との関連性が指摘されている。

条里制地割との関係については、有馬条里遺跡周辺の田畝区画において戦前までその痕跡をとどめており、古地図や空中写真などから東西約16町、南北約9町の広さが想定・復元されている。

尚、古墳時代の放牧地が多数確認されているB地区に関しては、律令期の御牧との関連性が指摘されているが、先に見てきたように当地区のHr-FP災害からの復興は早くとも7世紀後半以降であり、かつ同期の放牧地は確認されていないことを考慮すれば、現段階では直接的な関連性を認めることはできない。

C地区の赤城山西南麓では、9世紀代以降に標高300mを超えての集落形成がかなり活発に認められるが、これまでの赤城山南麓域での調査・研究成果に照合させれば、用水とした小河川や湧水等の冷温対策をはじめとする農業技術改善を伴った開析谷の水田開発・耕地化が、その背景にあると考えられる。当報告の滝沢御所遺跡では、周辺谷地部でのこうした水田を確認し得ていないが、その存在を考慮する必要がある。

第2章 遺跡の立地と環境

第2表 周辺の遺跡一覧(弥生時代～平安時代)

番号	遺跡名	時代	遺跡の内容									備考	
			集落			墳墓		水田		畠			放牧地
			弥生	古墳	奈・平	弥生	古墳	古墳	平安	古墳	平安		
1	津久田甲子塚古墳	古墳					○						
2	猫持久保遺跡	古墳								○			
3	宮田諏訪原遺跡	古墳		□						□○			
4	河岸古墳群	古墳					○						
5	久保地古墳群	古墳					○						
6	宮田瘤ノ木遺跡	古墳		○									
7	弁天塚古墳	古墳					○						
8	勝保沢中ノ山遺跡	古墳		□									
10	寺内遺跡	古墳		○									
11	寺内(勝保沢城)遺跡	古墳		□○									
12	勝保沢剃刀窪遺跡	古墳		○									
14	滝沢天神遺跡-A・B・C-	弥生・古墳	●	□									
15	見立八幡遺跡	古墳					○						
16	見立溜井遺跡	古墳		□			■						古墳：周溝墓
17	見立相好遺跡	古墳		□									
18	諏訪西遺跡 (諏訪西小塚古墳)	古墳					○						
19	中畦遺跡	古墳・奈良平安			●		○						
20	三原田諏訪上遺跡	古墳・奈良平安		□○	●		○						
21	三原田三反田遺跡	弥生・古墳・奈良平安	●	□	●				□○				
23	上三原田日向遺跡	古墳							□				
24	上三原田中坪前遺跡	奈良平安			●								
25	上三原田大宮遺跡	奈良平安			●								
27	見立清水遺跡	古墳		□									
28	史跡滝沢石器時代遺跡	古墳・奈良平安		□○	●								
29	滝沢日向堀遺跡	古墳・奈良平安		□	●								
30	見立峯遺跡	古墳・奈良平安		◎	●								
32	滝沢御所遺跡	平安			●						○		
35	庚塚古墳	古墳					○						
36	上三原田大島遺跡	古墳・奈良平安		◎	●								
37	十二塚古墳	古墳					○						
38	地藏塚古墳	古墳					○						
39	上三原田東峯遺跡	古墳・奈良平安		◎	●		○						
40	稲荷塚古墳	古墳					○						
41	大門塚古墳	古墳					○						
45	樽舟戸遺跡	古墳		□									
46	樽遺跡	弥生	●										
47	悪津古墳群	古墳					○						
48	田尻遺跡	弥生	●										
49	西ノ平遺跡	奈良平安			●								
50	房谷戸遺跡Ⅰ	古墳・奈良平安		◎	●								
51	房谷戸遺跡Ⅲ	古墳		◎									
52	羽場遺跡	奈良平安			●								
53	竹ノ原遺跡	奈良平安			●								
54	谷津遺跡	奈良平安			●								
55	大宮遺跡	奈良平安			●								
56	北町遺跡	弥生・古墳	●	□									
57	田ノ保遺跡	古墳				■		△□○	◎				弥生：周溝墓
58	分郷八崎遺跡	弥生・古墳・奈良平安	●	□	●								
59	分郷八崎塚原古墳群	古墳					○□						
60	群馬用水分郷八崎遺跡	弥生	●				○						
65	カンカン山古墳	古墳					○						
71	味噌野遺跡Ⅲ・Ⅳ	奈良平安			●								
72	下中井古墳群	古墳					○						
73	下遠原遺跡A～D区	弥生・古墳	●	□									
74	中遠原古墳群	古墳					○						
75	上遠原古墳群	古墳					○						
76	水泉寺地区遺跡群	弥生・古墳・奈良平安	●	◎	●		○						
77	真壁塚原古墳群	古墳					○						
78	真壁向山遺跡	奈良平安			●		○						
79	越後坂古墳	古墳					○						

2. 歴史的環境

番号	遺 跡 名	時 代	遺 跡 の 内 容										備 考		
			集 落			墳 墓		水 田		畠		放牧地			
			弥生	古墳	奈・平	弥生	古墳	古墳	平安	古墳	平安				
82	開発遺跡	奈良平安			●										
84	東田古墳群	古墳					○								
85	四之宮古墳群	古墳					○								
86	朝日塚古墳	古墳					○								
87	宮廻遺跡	奈良平安			●										
88	西浦遺跡	奈良平安			●										
89	箱田遺跡群 (上原・三角遺跡)	奈良平安			●										
91	八幡塚古墳	古墳					○								
93	天神山古墳群	古墳					○								
94	天神山遺跡	奈良平安			●										
97	城山遺跡	奈良平安			●										
98	東篠遺跡	奈良平安			●										
99	芝山遺跡	奈良平安			●										
101	上白井西伊熊遺跡	古墳						古墳			○		○		
102	中郷遺跡	古墳									○		○		
103	行人塚古墳	古墳						○							
104	池田沢東遺跡	古墳									○				
105	中組遺跡	古墳・奈良平安			●						◎				
106	黒井峯遺跡	古墳		□○○			□	○			○				
107	押手遺跡	弥生・古墳・奈良平安		○	●	◆■					○				弥生：再葬墓・周溝墓
108	丸子山遺跡	古墳						□	□						
109	中ノ峯古墳	古墳						○							
110	大日塚古墳	古墳						○							
111	北牧相ノ田遺跡	古墳・奈良平安			●				○						
112	吹屋遺跡	古墳		□									○		
113	笄塚古墳	古墳						○							
114	大塚(稲荷塚)古墳	古墳						○							
115	吹屋伊勢森遺跡	古墳									○		○		
116	白井十二遺跡	古墳											○		
117	白井佐又遺跡	古墳・奈良平安			●						○		○		
118	白井北中道Ⅲ遺跡	弥生・古墳・奈良平安	●	□	●			○			○		○		Hr-FP上面構築の7世紀代円墳
119	白井北中道Ⅱ遺跡	古墳									○		○		
120	白井北中道遺跡	古墳									○		○		
121	吹屋犬子塚遺跡	古墳							□○		○		○		
122	犬子塚古墳	古墳						○							
123	吹屋中原遺跡	古墳									□○		○		
124	吹屋恵久保遺跡	古墳		○							○		○		
125	中郷恵久保遺跡	古墳・奈良平安		□	●			□○			○		○		
126	吹屋三角遺跡	古墳						○							
127	中郷田尻遺跡	弥生・古墳・奈良平安	●	□○	●			□○			○				
128	吹屋靴屋遺跡	古墳						□○			□○		○		
129	北牧大境遺跡	古墳・奈良平安			●			□○							
130	吹屋Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ号墳	古墳						○							Hr-FP上面構築の7世紀代円墳
131	三夜塚古墳	古墳						○							
132	庚人塚古墳	古墳						○							
133	吹屋瓜田遺跡・鯉沢瓜田遺跡	古墳							□○						
134	白井丸岩遺跡	古墳									○		○		
135	白井大宮遺跡	古墳・奈良平安			●						□○		○		
136	金比羅塚古墳	古墳						○							
137	加藤塚古墳	古墳						○							
138	白井南中道遺跡	古墳・奈良平安		◎	●						○		○		
139	白井玉椿遺跡	奈良平安			●										
140	白井吹谷戸遺跡	奈良平安			●										
141	白井二位屋遺跡	古墳・奈良平安		◎	●						○		○		
142	金井東裏遺跡	弥生・古墳	●	□							□		○		
143	丸山古墳	古墳						○							
144	金井前原古墳	古墳						○							
145	金井前原遺跡	弥生・古墳	●	○	●										

第2章 遺跡の立地と環境

番号	遺跡名	時代	遺跡の内容										備考
			集落			墳墓		水田		畠		放牧地	
			弥生	古墳	奈・平	弥生	古墳	古墳	平安	古墳	平安		
146	虚空蔵塚古墳	古墳					○						
147	延暦塚古墳	古墳					不明						
148	坂之下遺跡	奈良平安			●			□					
149	坂下町古墳群	古墳					□	☒					
150	東町古墳	古墳					□	☒					
151	大崎古墳群	古墳					○						前方後円墳は未確定
152	石原清水田遺跡	奈良平安			●								
153	高源地東1遺跡	古墳・奈良平安		□	●			○		□○			
154	石原西浦遺跡	奈良平安			●								
155	諏訪ノ木遺跡	古墳・奈良平安			●		○						
156	石原久保貝道遺跡	弥生・奈良平安	●		●								
157	田中遺跡	弥生・古墳・奈良平安		□	●	■							弥生：礎床墓
158	石原東古墳群	弥生・古墳	●				○						
159	石原東遺跡	弥生・古墳・奈良平安	●		●		○	□○		◎			
160	空沢遺跡	古墳・奈良平安			●	■	□○	☒					弥生：円形周溝墓
161	行幸田寺後遺跡	奈良平安			●								
162	空沢西遺跡	奈良平安			●								
163	糶屋遺跡	古墳・奈良平安		□	●								
164	行幸田西遺跡	古墳		□									
166	中筋遺跡	弥生・古墳・奈良平安	●	□◎	●		○	□		□			
167	行幸田畑中遺跡	弥生・古墳・奈良平安	●	□	●		○	☒		□			
168	十二山古墳群	古墳					○						
169	中村岡前遺跡	古墳・奈良平安			●			□				○	
170	中村遺跡	弥生・古墳・奈良平安	●	◎	●	■	○	□○		□			弥生：周溝墓
171	八木原沖田遺跡	古墳・奈良平安		◎	●					◎			
172	有馬条里遺跡(沖田地区)	古墳・奈良平安		◎	●			○					
173	有馬条里遺跡	弥生・古墳・奈良平安	●	□○	●	■		○		△□			弥生：周溝墓
174	有馬中井遺跡	奈良平安			●								
175	行幸田山遺跡	古墳・奈良平安		○	●		■○						前期古墳は方形の高塚墳 As-C下周溝墓
176	神宮寺西遺跡	弥生	●			■							
177	有馬後田東遺跡	弥生・古墳・奈良平安	●	□◎	●		○						
178	八木原久保遺跡	奈良平安			●								
179	有馬金石遺跡	弥生・奈良平安	●		●								
180	有馬久宮間戸遺跡	古墳・奈良平安		◎	●								
181	有馬寺畑遺跡	弥生・古墳・奈良平安	●	◎	●	■				□			弥生：周溝墓
182	有馬廢寺遺跡	弥生・奈良平安	●										
183	有馬小貝戸遺跡	奈良平安			●								
184	有馬遺跡	弥生・古墳・奈良平安	●	□	●	■				△			弥生：周溝墓
185	若宮遺跡	奈良平安			●								
186	劍城遺跡	奈良平安			●								
187	半田薬師遺跡	奈良平安			●					◎			
188	半田中原・南原遺跡	古墳・奈良平安			●		○					●	約6haを区画する溝
189	浅田遺跡	古墳					○						
190	西組遺跡	古墳		○	●					○			
191	金井製鉄遺跡	古墳											奈良時代の製鉄遺構
192	田尻遺跡	古墳					■						4世紀前葉の方形周溝墓
193	宮田遺跡	古墳						○					

凡例

【集落】

- △ As-C下位
- Hr-FA下位
- Hr-FP下位
- ◎ Hr-FP上位

【墳墓】

- ◆ 再葬墓
- 周溝墓
- ◎ 前方後円墳
- 円墳
- 方墳
- ☒ 積石塚

【水田・畠】

- △ As-C下位
- Hr-FA下位
- Hr-FP下
- ◎ Hr-FP上位

【放牧地】

- Hr-FA下位
- Hr-FP下位

参考文献(第2表の遺跡番号と対応)

- 1 『津久田甲子塚古墳』赤城村教委 2005
- 2 『宮田諏訪原遺跡Ⅲ・猫持久保遺跡』赤城村教委 2004
- 3 『宮田諏訪原遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ』赤城村教委 2005・2005
『宮田諏訪原遺跡Ⅲ・猫持久保遺跡』赤城村教委 2004
- 4 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 5 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 6 『宮田窟ノ木遺跡』赤城村教委 1995
- 7 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 8 『勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ』(財)群埋文 1988
- 9 『見立溜井遺跡・見立大久保遺跡』赤城村教委 1985
- 10 『寺内遺跡』赤城村教委 1975
- 11 『寺内(勝保沢城)遺跡発掘調査概報』赤城村教委 1996
- 12 『勝保沢剱刀窪遺跡』赤城村教委 1999
- 13 『滝沢柳原遺跡』赤城村教委 2005
- 14 『滝沢天神遺跡-A地点-・棚下ひばり塚』赤城村教委 2005
『滝沢天神遺跡-B地点-』赤城村教委 2005
『滝沢天神遺跡-C地点-・滝沢江戸久保遺跡』赤城村教委 2005
- 15 『見立八幡遺跡』渋川市教委 2008
- 16 『見立溜井遺跡・見立大久保遺跡』赤城村教委 1985
『見立溜井Ⅱ遺跡』赤城村教委 2005
- 17 『見立相好遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』赤城村教委 2005
- 18 『中畦遺跡・諏訪西遺跡』(財)群埋文 1986
『中畦遺跡・諏訪西遺跡』赤城村教委 2000
- 19 『中畦遺跡・諏訪西遺跡』(財)群埋文 1986
『中畦遺跡・諏訪西遺跡』赤城村教委 2000
- 20 『三原田諏訪上遺跡Ⅰ～Ⅳ』赤城村教委 2004・2005
『三原田諏訪上遺跡Ⅴ・南雲諸峯遺跡』渋川市教委 2009
- 21 『三原田三反田遺跡』赤城村教委 2001
- 22 『三原田仲井遺跡』赤城村教委 2004
- 23 『上三原田日向遺跡・上三原田大宮遺跡・上三原田中坪前遺跡・見立峯遺跡Ⅰ』赤城村教委 2002
- 24 『上三原田日向遺跡・上三原田大宮遺跡・上三原田中坪前遺跡・見立峯遺跡Ⅰ』赤城村教委 2002
- 25 『上三原田日向遺跡・上三原田大宮遺跡・上三原田中坪前遺跡・見立峯遺跡Ⅰ』赤城村教委 2002
- 26 『上三原田中坪遺跡(中坪古墓)』赤城村教委 2004
- 27 『見立清水遺跡』渋川市教委 2007
- 28 『史跡瀧沢石器時代遺跡Ⅰ・Ⅱ』渋川市教委 2008
- 29 『見立峯遺跡Ⅱ・滝沢日向堀遺跡』赤城村教委 2003
- 30 『上三原田日向遺跡・上三原田大宮遺跡・上三原田中坪前遺跡・見立峯遺跡Ⅰ』赤城村教委 2002
『見立峯遺跡Ⅱ・滝沢日向堀遺跡』赤城村教委 2003
- 31 『滝沢天神遺跡-C地点-・滝沢江戸久保遺跡』赤城村教委 2005
- 32 『滝沢御所遺跡』(公財)群埋文 2014
- 33 『見立十三塚遺跡Ⅰ・Ⅱ』赤城村教委 2005
- 34 『上三原田庚塚遺跡・上三原田大門遺跡』渋川市教委 2012
- 35 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 36 『上三原田大島遺跡』赤城村教委 2005
- 37 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 38 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 39 『上三原田東峯遺跡Ⅰ・Ⅱ』赤城村教委 2001・2002
- 40 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 41 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 42 『上三原田庚塚遺跡・上三原田大門遺跡』渋川市教委 2012
- 43 『三原田城遺跡・八崎城址・八崎塚・上青梨子古墳』(財)群埋文1987
- 44 『三原田遺跡第1～3巻』群馬県企業局 1980・1990・1992
- 45 『樽舟戸遺跡』赤城村教委 1999
- 46 『旧敷島村の遺跡附樽遺跡』赤城村教委 1998
- 47 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 48 『八崎の寄居・田尻遺跡』北橋村教委 1999
- 49 『西ノ平遺跡』北橋村教委 1996
- 50 『房谷戸遺跡Ⅰ』(財)群埋文 1989
- 51 『北橋村村内遺跡Ⅲ』北橋村教委 1995
- 52 『分郷八崎遺跡』北橋村教委 1986
- 53 『竹ノ原・銭神塚遺跡』渋川市教委 2010
- 54 『谷津遺跡』北橋村教委 1994
- 55 『渋川市市内遺跡5』渋川市教委 2012
『渋川市内発掘調査報告書(石原西浦遺跡3・石原東古墳群2・八崎大宮遺跡2・中筋遺跡13次・白井谷戸遺跡)』渋川市教委 2014
- 56 『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教委 1996
- 57 『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教委 1996
『田ノ保遺跡Ⅲ』北橋村教委 2001
- 58 『分郷八崎遺跡』北橋村教委 1986
- 59 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 60 『群馬用水分郷八崎遺跡・滝原遺跡・下遠原遺跡E区・八幡山遺跡・真壁城山遺跡・棗久保遺跡・西浦遺跡・水泉寺遺跡B区』渋川市教委 2012
- 61 『竹ノ原・銭神塚遺跡』渋川市教委 2010
- 62 『11.前中後Ⅱ遺跡』『村内遺跡Ⅰ』北橋村教委 1993
『前中後遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区』渋川市教委 2010
- 63 『六反田遺跡Ⅱ』北橋村教委 1997
- 64 『西坂脇遺跡』北橋村教委 1992
- 65 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 66 『小室遺跡』北橋村教委 1968
- 67 『小室高田遺跡Ⅰ-ii・Ⅰ-i・Ⅱ』北橋村教委 2005・2006
- 68 『群馬用水分郷八崎遺跡・滝原遺跡・下遠原遺跡E区・八幡山遺跡・真壁城山遺跡・棗久保遺跡・西浦遺跡・水泉寺遺跡B区』渋川市教委 2012
- 69 『森山遺跡』北橋村教委 1987
- 70 『道訓前遺跡』北橋村教委 2001
- 71 『味噌野遺跡Ⅲ』北橋村教委 1999
『渋川市市内遺跡Ⅲ』渋川市教委 2010
- 72 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 73 『下遠原遺跡A・C区』渋川市教委 2008
『北橋村村内遺跡Ⅱ』北橋村教委 1994
『群馬用水分郷八崎遺跡・滝原遺跡・下遠原遺跡E区・八幡山遺跡・真壁城山遺跡・棗久保遺跡・西浦遺跡・水泉寺遺跡B区』渋川市教委 2012
- 74 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 75 『北橋村村内遺跡Ⅴ』北橋村教委 1997
- 76 『水泉寺地区遺跡群』北橋村教委 1990
『群馬用水分郷八崎遺跡・滝原遺跡・下遠原遺跡E区・八幡山遺跡・真壁城山遺跡・棗久保遺跡・西浦遺跡・水泉寺遺跡B区』渋川市教委 2012
- 77 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 78 『村内遺跡Ⅰ』北橋村教委 1993
『北橋村村内遺跡Ⅱ』北橋村教委 1994
『真壁向山遺跡Ⅴ』北橋村教委 1995
- 79 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 80 『箱田遺跡群(上原・三角遺跡)・真壁諏訪遺跡』北橋村教委 1999
- 81 『下山田原遺跡Ⅲ』渋川市教委 2010
- 82 『開発遺跡』北橋村教委 1995
- 83 『群馬用水分郷八崎遺跡・滝原遺跡・下遠原遺跡E区・八幡山遺跡・真壁城山遺跡・棗久保遺跡・西浦遺跡・水泉寺遺跡B区』渋川市教委 2012
- 84 『北橋村村内遺跡Ⅷ』北橋村教委 2000
- 85 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 86 『朝日塚古墳』北橋村教委 1985
- 87 『北橋村村内遺跡Ⅱ』北橋村教委 1994
- 88 『群馬用水分郷八崎遺跡・滝原遺跡・下遠原遺跡E区・八幡山遺跡・真壁城山遺跡・棗久保遺跡・西浦遺跡・水泉寺遺跡B区』渋川市教委 2012
- 89 『箱田遺跡群(上原・三角遺跡)・真壁諏訪遺跡』北橋村教委 1999
- 90 『群馬用水分郷八崎遺跡・滝原遺跡・下遠原遺跡E区・八幡山遺跡・真壁城山遺跡・棗久保遺跡・西浦遺跡・水泉寺遺跡B区』渋川市教委 2012
- 91 『北橋村村内遺跡Ⅳ』北橋村教委 1996
- 92 『群馬用水分郷八崎遺跡・滝原遺跡・下遠原遺跡E区・八幡山遺跡・真壁城山遺跡・棗久保遺跡・西浦遺跡・水泉寺遺跡B区』渋川市教委 2012
- 93 『天神山古墳群Ⅰ』渋川市教委 2010
- 94 『天神山遺跡』北橋村教委 1997
- 95 『北橋村村内遺跡Ⅵ』北橋村教委 1998
- 96 『下箱田向山遺跡』(財)群埋文 1990
- 97 『城山遺跡』北橋村教委 1989
- 98 『東篠遺跡・瓜山遺跡』北橋村教委 1990
- 99 『芝山遺跡』北橋村教委 1993
- 100 『東篠遺跡・瓜山遺跡』北橋村教委 1990
- 101 『上白井西伊熊遺跡一縄文時代以降編一』(財)群埋文 2010
- 102 『中郷遺跡(1)・(2)』(財)群埋文 2008・2010
- 103 『上毛古墳総覧』群馬県 1938
- 104 『池田沢東遺跡発掘調査報告書』子持村教委 1989
- 105 『中組遺跡』子持村教委 1990
- 106 『黒井峯遺跡Ⅰ』子持村教委 1985
『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村教委 1991
- 107 『押手遺跡発掘調査概報』子持村教委 1987
- 108 『丸子山遺跡』子持村教委 2005
- 109 『中ノ峯古墳発掘調査報告書』子持村教委 1980

第2章 遺跡の立地と環境

- 110 『上毛古墳綜覧』群馬県 1938
 111 『北牧相ノ田遺跡』子持村教委 2000
 112 『吹屋遺跡』(財)群埋文 2007
 113 『上毛古墳綜覧』群馬県 1938
 114 『上毛古墳綜覧』群馬県 1938
 115 『吹屋伊勢森遺跡』(財)群埋文 2006
 116 『白井十二遺跡』(財)群埋文 2008
 117 『白井佐又遺跡発掘調査報告書』子持村教委 2005
 『白井佐又遺跡Ⅱ』渋川市教委 2010
 118 『白井北中道Ⅲ遺跡(1)・(2)』(財)群埋文 2009
 119 『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』(財)群埋文 1996・1998
 120 『白井遺跡群(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)』(財)群埋文 1997・1998
 121 『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』(財)群埋文 1996・1998
 122 『上毛古墳綜覧』群馬県 1938
 123 『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』(財)群埋文 1996・1998
 124 『吹屋恵久保遺跡』渋川市教委 2006
 125 『中郷恵久保遺跡』(財)群埋文 2006
 126 『吹屋三角遺跡』(財)群埋文 2007
 127 『中郷田尻遺跡』(財)群埋文 2007
 128 『吹屋糺屋遺跡』(財)群埋文 2007
 129 『北牧大境遺跡』(財)群埋文 2004
 130 『上毛古墳綜覧』群馬県 1938
 131 『上毛古墳綜覧』群馬県 1938
 132 『上毛古墳綜覧』群馬県 1938
 133 『吹屋瓜田遺跡』(財)群埋文 1996
 『鯉沢瓜田遺跡』子持村教委 2000
 134 『白井遺跡群(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)』(財)群埋文 1997・1998
 135 『白井大宮遺跡』(財)群埋文 1993
 『白井大宮Ⅱ遺跡』(財)群埋文 2002
 136 『上毛古墳綜覧』群馬県 1938
 137 『上毛古墳綜覧』群馬県 1938
 138 『白井遺跡群(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)』(財)群埋文 1997・19998
 『白井遺跡群-集落編Ⅱ- (白井南中道遺跡)』(財)群埋文 1996
 『白井南中道遺跡』子持村教委 1998
 139 『白井玉椿遺跡』渋川市教委 2009
 140 『渋川市内発掘調査報告書(石原西浦遺跡3・石原東古墳群2・八崎大宮遺跡2・中筋遺跡13次・白井吹谷戸遺跡)』渋川市教委 2014
 141 『白井遺跡群-古墳時代編- (白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)』(財)群埋文 1997・1998
 『白井遺跡群-集落編Ⅰ- (白井二位屋遺跡)』(財)群埋文 1994
 『白井二位屋遺跡Ⅲ』子持村教委 2005
 『白井二位屋遺跡4』(有)毛野考古学研究所 2012
 142 『年報32』(公財)群埋文 2013
 143 『丸山古墳発掘調査報告書』渋川市教委 1978
 144 『渋川市誌 第二巻』群馬県 1993
 145 『市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』渋川市教委 1989
 『金井前原Ⅱ遺跡』渋川市教委 1997
 146 『上毛古墳綜覧』群馬県 1938
 147 『群馬県遺跡台帳Ⅱ』群馬県教委 1972
 148 『坂之下遺跡発掘調査報告書』渋川市教委 1988
 『市内遺跡18・19』渋川市教委 2005・2006
 149 『坂之下遺跡発掘調査報告書』渋川市教委 1988
 150 『渋川市誌 第二巻』渋川市 1993
 151 『渋川市誌 第二巻』渋川市 1993
 152 『石原清水田遺跡』渋川市教委 1995
 153 『高源地東Ⅰ遺跡』(財)群埋文 2006
 154 『西浦遺跡』渋川市教委 1986
 『石原西浦遺跡Ⅱ』渋川市教委 1995
 『渋川市内発掘調査報告書(石原西浦遺跡3・石原東古墳群2・八崎大宮遺跡2・中筋遺跡13次・白井吹谷戸遺跡)』渋川市教委 2014
 155 『諏訪ノ木遺跡』渋川市教委 1981
 『諏訪ノ木Ⅱ遺跡』渋川市教委 2000
 『諏訪ノ木Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ～Ⅹ遺跡』渋川市教委 2001・2003・2004・2006
 『石原東遺跡D区・諏訪ノ木Ⅴ遺跡』(財)群埋文 2005
 『市内遺跡17～19』渋川市教委 2004～2006
 156 『市内遺跡Ⅵ・Ⅸ』渋川市教委 1933・1996
 『石原東遺跡F区』渋川市教委 2001
 『市内遺跡16・19』渋川市教委 2003・2006
 157 『田中遺跡』渋川市教委 1999
 『渋川市内遺跡Ⅻ』渋川市教委 1999
 158 『石原東古墳群』渋川市教委 1997
 『渋川市内発掘調査報告書(石原西浦遺跡3・石原東古墳群2・八崎大宮遺跡2・中筋遺跡13次・白井吹谷戸遺跡)』渋川市教委 2014
 159 『石原東・中村日焼田遺跡』渋川市教委 1991
 『市内遺跡Ⅳ』渋川市教委 1991
 『石原東遺跡・中村日焼田遺跡・中村久保田遺跡』渋川市教委 1993
 『石原東遺跡(Ⅱ)・(Ⅲ)』渋川市教委 1994・1995
 『石原東遺跡D区・諏訪ノ木Ⅴ遺跡』(財)群埋文 2005
 『石原東遺跡E区・F区』渋川市教委 2001
 160 『空沢遺跡』渋川市教委 1978
 『空沢遺跡第2次・諏訪ノ木遺跡発掘調査概報』渋川市教委 1980
 『空沢遺跡第3次・5次～10次』渋川市教委 1982・1985・1986・1988～1991
 『空沢遺跡O地点』渋川市教委 1987
 『市内遺跡Ⅴ・Ⅵ・Ⅻ』渋川市教委 1992・1993・2000
 161 『市内遺跡Ⅵ』渋川市教委 1993
 162 『空沢西遺跡』渋川市教委 2003
 163 『市内遺跡発掘調査報告書』渋川市教委 1988
 164 『市内遺跡Ⅴ』渋川市教委 1992
 165 『市内遺跡Ⅰ』渋川市教委 2008
 166 『中筋遺跡』渋川市教委 1987
 『中筋遺跡第2次・5次・7次～9次・11次・12次発掘調査概要報告書』渋川市教委 1988・1991・1993・1995・1996
 『市内遺跡Ⅲ・Ⅳ』渋川市教委 1990・1991
 『渋川市内発掘調査報告書(石原西浦遺跡3・石原東古墳群2・八崎大宮遺跡2・中筋遺跡13次・白井吹谷戸遺跡)』渋川市教委 2014
 167 『行幸田畑中B遺跡』渋川市教委 1995
 『市内遺跡Ⅶ』渋川市教委 1994
 168 『渋川市誌 第二巻』渋川市 1993
 169 『中村岡前遺跡』渋川市教委 2001
 170 『中村遺跡』渋川市教委 1986
 171 『市内遺跡Ⅲ・Ⅳ』渋川市教委 1990・1991
 『八木原沖田Ⅲ～Ⅹ遺跡』渋川市教委 1993・1995・1996・1998
 172 『有馬条里遺跡』渋川市教委 1983
 173 『有馬条里遺跡Ⅰ・Ⅱ』(財)群埋文 1989・1991
 174 『市内遺跡ⅩⅦ』渋川市教委 2001
 『市内遺跡18』渋川市教委 2005
 175 『行幸田山遺跡』渋川市教委 1987
 176 『神宮寺西遺跡』渋川市教委 1988
 177 『市内遺跡発掘調査報告書』渋川市教委 1988
 『市内遺跡Ⅵ』渋川市教委 1993
 『市内遺跡19』渋川市教委 2006
 178 『市内遺跡Ⅹ』渋川市教委 1997
 179 『市内遺跡15』渋川市教委 2002
 180 『有馬久宮間戸遺跡』渋川市教委 1997
 『渋川市内遺跡Ⅺ』渋川市教委 1998
 『市内遺跡Ⅻ』渋川市教委 2000
 181 『有馬寺畑遺跡』渋川市教委 2014
 『市内遺跡Ⅻ』渋川市教委 2000
 182 『有馬麻寺跡』渋川市教委 1988
 183 『有馬小貝戸遺跡』渋川市教委 1997
 184 『有馬遺跡Ⅰ・大久保B遺跡』(財)群埋文 1989
 『有馬遺跡Ⅱ』(財)群埋文 1990
 185 『若宮遺跡』渋川市教委 1998
 186 『市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』渋川市教委 1991
 『市内遺跡Ⅶ・Ⅸ・Ⅹ』渋川市教委 1994・1996・1997
 『市内遺跡15・16』渋川市教委 2002・2003
 187 『半田薬師遺跡』渋川市教委 1995
 『市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』渋川市教委 1989
 『市内遺跡Ⅵ・ⅩⅦ』渋川市教委 1993・2001
 『市内遺跡15・16・18・19』渋川市教委 2002・2003・2005・2006
 188 『半田中原・南原遺跡』渋川市教委 1994
 『半田南原遺跡』渋川市教委 1994
 『渋川市内遺跡Ⅻ』渋川市教委 1999
 193 『宮田遺跡』『群馬県史』資料編2 原始古代2 1986
 195 『渋川市金井古墳調査概報』『コイノス』7 群馬大学 1956

3. 基本層序

遺跡内の土層堆積状態は、近世～現代にかけての畠耕作や居住に伴う広範な土壌攪乱を受け、必ずしも良好とはいえない状況が認められる。また、遺跡の立地地点が南側の丘陵尾根から北側の沖積地へと傾斜する場所でもあり、比較的上位に堆積する榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)をはじめ、下位にある縄文土器の包含層の層厚も均一ではなく、地点によっては部分的に欠落する土層も見られる。

ここでは、各地点の堆積土層を総合的に観察し、基本土層としてまとめているが、石器の検出は認められなかったものの、旧石器時代の調査地点におけるローム層の堆積状況を含めて記述しておきたい。

尚、基本土層の観察・作図地点については、19頁の第5図に掲載してある。

●基本土層

- I層：黒色土。表土層で現在の耕作土。層厚15～25cm。
- II層：黒色土。Hr-FPを多量に含む。層厚10～20cm。
- III層：6世紀第2四半期の榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)の堆積層。層厚10～30cm。当該層の上面が文化層の第1面である。
- IV層：黒褐色土。Hr-FPとHr-FAとの間層。層厚5～15cm。当該層の上面が文化層の第2面である。
- V層：6世紀第1四半期の榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)の堆積層。層厚5～10cm。
- VI層：黒色土。色調の濃淡により上下2層に分層できる地点もある。層厚15～20cm。当該層の上面が文化層の第3面である。下半部では縄文時代の遺物が包含されている。
- VII層：黄褐色土。いわゆる淡色黒ボク土で、縄文時代中・後期を主体とした遺物包含層。色調の濃淡により上下

a・bの2層に分層できる地点もある。層厚15～25cmを測る。

VIII層：暗褐色土。ロームへの漸移層であり、色調の濃淡により暗褐色土のVIIIa層と鈍い黄褐色土のVIIIb層とに分層できる地点もある。縄文時代前期を主体とした遺物包含層だが、当該層の上面または下面にて住居や土坑をはじめとする大半の遺構確認を行っている。層厚20～50cm。VI層下位から当該層までを含めて文化層の第4面として扱っている。

IX層：ローム層。部分的にハードロームが表出。層厚20～50cm。

Xa層：浅間白糸軽石(As-Sr)とロームとの混土層。層厚10～20cmを測る。

Xb層：浅間白糸軽石(As-Sr)の堆積層。層厚15～25cm。

XI層：淡黄色シルト。しまり弱い。層厚20～30cm。

XII層：浅間板鼻褐色軽石(As-BP)の堆積層。a～cのユニットに分層できる。層厚

50～70cm。

XIIIa層：にぶい黄橙色シルト層。層厚10～15cm。

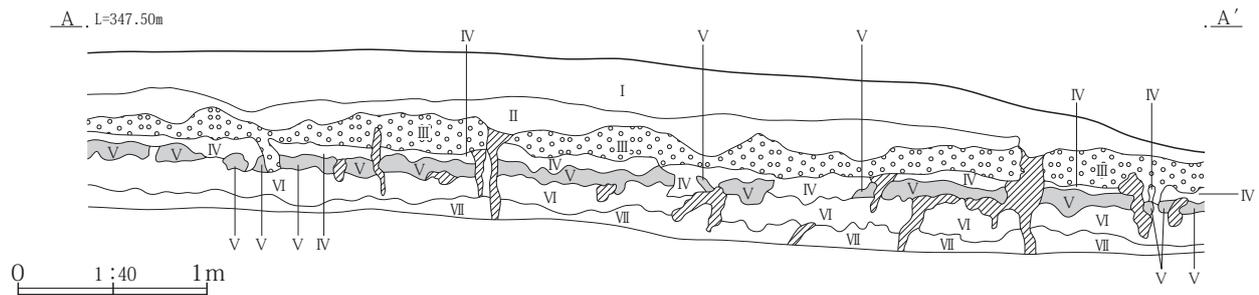
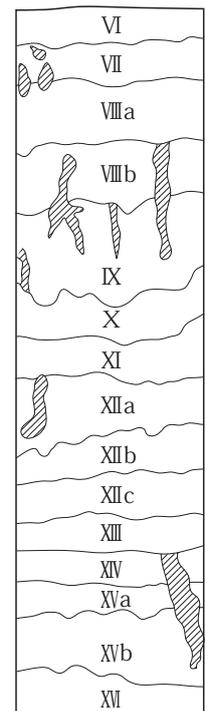
XIIIb層：暗黄橙色シルト層。層厚10～15cm。

XIV層：灰色土。層厚15～30cm。

XVa層：八崎軽石を少量含み締まりの強い暗褐色土。層厚10～15cmを測る。

XVb層：八崎軽石を中量含み締まり・粘性のある暗褐色土。層厚25～35cm。

XV層：榛名八崎火山灰(Hr-HP)の堆積層。



第4図 遺跡の基本層序

第3章 遺跡の調査内容

1. 確認された遺構の概要

第1章の「調査の方法と工程」において既述したように、当遺跡では6世紀代の榛名山二ツ岳の2度にわたる噴火に伴う層厚約40cmのテフラが堆積し、時代や時期を識別する場合の指標となると共に、古墳時代の地表面や縄文時代の文化層を保護する役割も果たしている。

従って、発掘調査自体もこのテフラ層を基準として文化面を設定することに優位性があることから、上位面より第1・2・3・4面と名称を付し、順次上位から下位へと調査を実施した。ここでは、各文化面(層)から確認された遺構について、その概要を記述する。

第1面(平安時代～近世以降) 6世紀第2四半期に噴出した層厚20cm前後のHr-FP層(Ⅲ層)の上面にあたる。この軽石層上面で確認できる人為的な掘り込みには、ビニールやコンクリート塊などが混在する現代のごみ穴等も認められるが、これらを除外した上での確認遺構内容は、9世紀代の竪穴住居3軒とピット4基、近世以降と想定される上下2段に石組みされた建物基礎1基、畠4区画、溝状遺構12条、土坑38基などである。

当遺跡では、Hr-FP火山災害直後の6世紀中葉から8世紀代にかけての人為的活動痕跡は見られず、9世紀代に入ってからようやく集落が営まれる。その後、断絶期を挟みつつ近世段階で再び居住や畠作が行われるようになったと考えられる。

第2面(6世紀中葉) 6世紀第2四半期に噴出したHr-FP層の直下面、つまりIV層上面にあたる。この噴火は、榛名山北東方向に大量の軽石を降り積もらせ、旧子持村や赤城町北部地域で2mを超える堆積が認められるほか、遠く宮城県の大賀城にまで到達していることが確認されている。当遺跡は、軽石噴出の主軸方向から南にそれていたため、その堆積はかなり薄かった。軽石直下の地表面には、幅58～96cmの道跡2条と馬蹄跡と思われる浅い凹が95箇所を確認された。道跡は、他の地表面より固く踏み締まっており、1条は調査区中央から北東の谷方向に直線的に伸び、もう1条は北斜面寄りで調査区域を東西に横断するように伸びていた。これらの道跡は、

主に馬の畜舎と放牧地との往復歩行により形成されたことが、黒井峯遺跡をはじめとした周辺遺跡の調査により明らかとなっているが、当遺跡も放牧地として利用されていたことを示している。また、円形や楕円形の無数の小さな凹凸が認められると共に、炭化物や焼土等の痕跡は顕著に認められないものの、煤ぼけたような黒色面が観察でき、全体的に草原的な植生が焼き払われたような状況を看取することができる。

第3面(6世紀初頭) 6世紀第1四半期に噴出したHr-FA層(V層)の直下面、つまりVI層上面に当たる。同層の堆積が認められる区域全面を精査したが、第2面で見られた馬蹄痕を含め、何ら人為的な痕跡は確認できなかった。また、大きな樹木の繁茂を示すような株痕も皆無であり、他遺跡で確認されているようなクマザサなどが繁茂・卓越する植生の広がりが見込まれる。

第4面(縄文時代) 基本土層のVI層～VIII層までの黒色土や淡色黒ボク土中に包含される土器・石器類および住居・土坑等の遺構を含む文化層である。可能性としては、6世紀初頭～縄文時代までの長期間に及ぶ文化層であるが、実際には縄文時代以外の遺構・遺物は皆無である。層厚は50cm～100cmを測り、VI～VII層上半部では縄文時代中期後半から後期前半の遺物が包含され、VII層下半部～VIII層にかけて同前期を主体に早期後半までの遺物が包含されている。

確認された遺構は、中期末葉の敷石住居1軒と土坑4基、前期の土坑2基、時期不明の土坑4基、配石と集石が各1基である。これら遺構の掘り込み面は、数基の土坑を除いて確認できなかったが、中期末葉の敷石住居はVIII層の上面に構築されており、周辺他遺跡の調査を参照すれば、淡色黒ボク土のVII層上面から掘り込んでいると想定される。

旧石器時代については、第1章にて既述したように6個所に5m×2.5mのトレンチを適宜設定し、IX～XII層までの層厚1mのローム層調査を行ったが、石器等を確認することはできず、ローム層の堆積状況を記録するに留めた。尚、トレンチ配置については第5図を参照されたい。

2. 近世以降の遺構と遺物

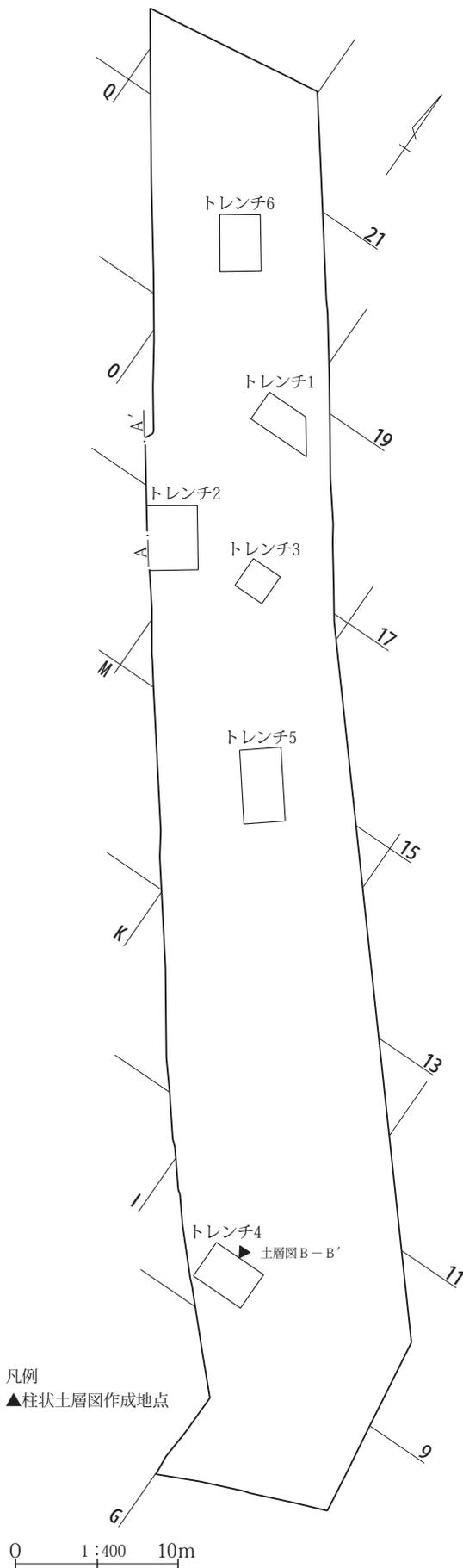
当該期の遺構については、1号建物を除き平安時代の竪穴住居と共にⅢ層(Hr-FP)の上面にて確認作業を行っている。確認された遺構の内容は、上下2段に石組みされた建物基礎1基、土坑38基、溝状遺構12条、道路遺構3条、畠4区画などである。これらの遺構の帰属時期は、出土遺物が皆無のものも多く、また時期を明示するような特徴的遺物も僅少なことから、確定することが困難である。ただし、各遺構内の埋没土はⅠ層またはⅡ層に近似したHr-FPを多量に含む締まりの弱い黒色土であり、煙管や蹄鉄などの金属製品の出土も考慮すれば、近世～近代にかけての時期が想定される。

調査区内における各遺構の分布状況は、畠が北半部に、建物基礎や溝・土坑が南半部を中心に行っていることが看取できる。特に、南半部の遺構群については、その主軸方位がかなり近似していることから、相互に何らかの関係性を持つと考えられる。

尚、1号建物を除く各遺構内の埋没土については、相互に類似した様相が認められることから、その観察内容を下記の通り類型・統一化して記載した。ただし、これと様相を異にする場合は個々にその土層内容を記載してある。

【近世～近代遺構の埋没土層】

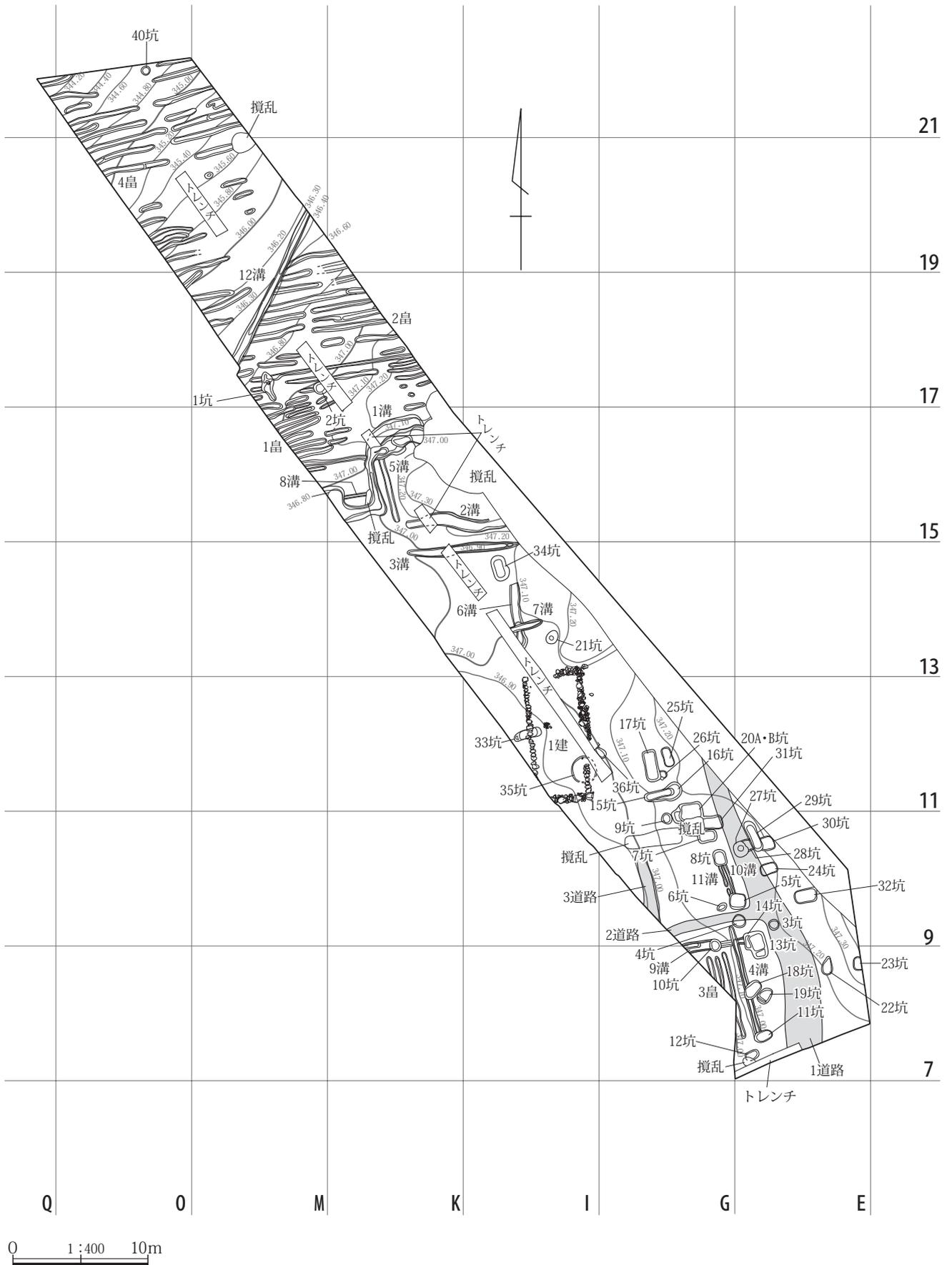
- 1 Ⅰ層に類似した暗褐色土。榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)を多量に含む。
- 2 1に類似した暗褐色土で、中量のHr-FPや少量の榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)ブロックを含む。
- 3 Ⅰ層とⅡ層との混土層。Hr-FPを中量に含む。
- 4 Ⅱ層に類似した黒褐色土。Hr-FPを多量に含む。
- 5 Hr-FPを主体にⅠ層に類似した暗褐色土を少量含む。
- 6 Hr-FAブロックを主体に少量のⅣ層ブロックやHr-FPを含む。
- 7 Ⅳ層に類似した黒褐色土を主体にHr-FAブロックを中量含む。
- 8 Ⅵ層に類似した黒色土を主体にHr-FAやⅣ層ブロックを少量含む。
- 9 灰白色の灰層。
- 10 9層とⅣ層との混土層でHr-FPを中量含む。
- 11 青灰色粘質土。



凡例
▲柱状土層図作成地点

0 1:400 10m

第5図 グリッド及び旧石器トレンチの配置と土層図作成地点



第6図 近世以降の遺構配置

(1) 1号建物遺構

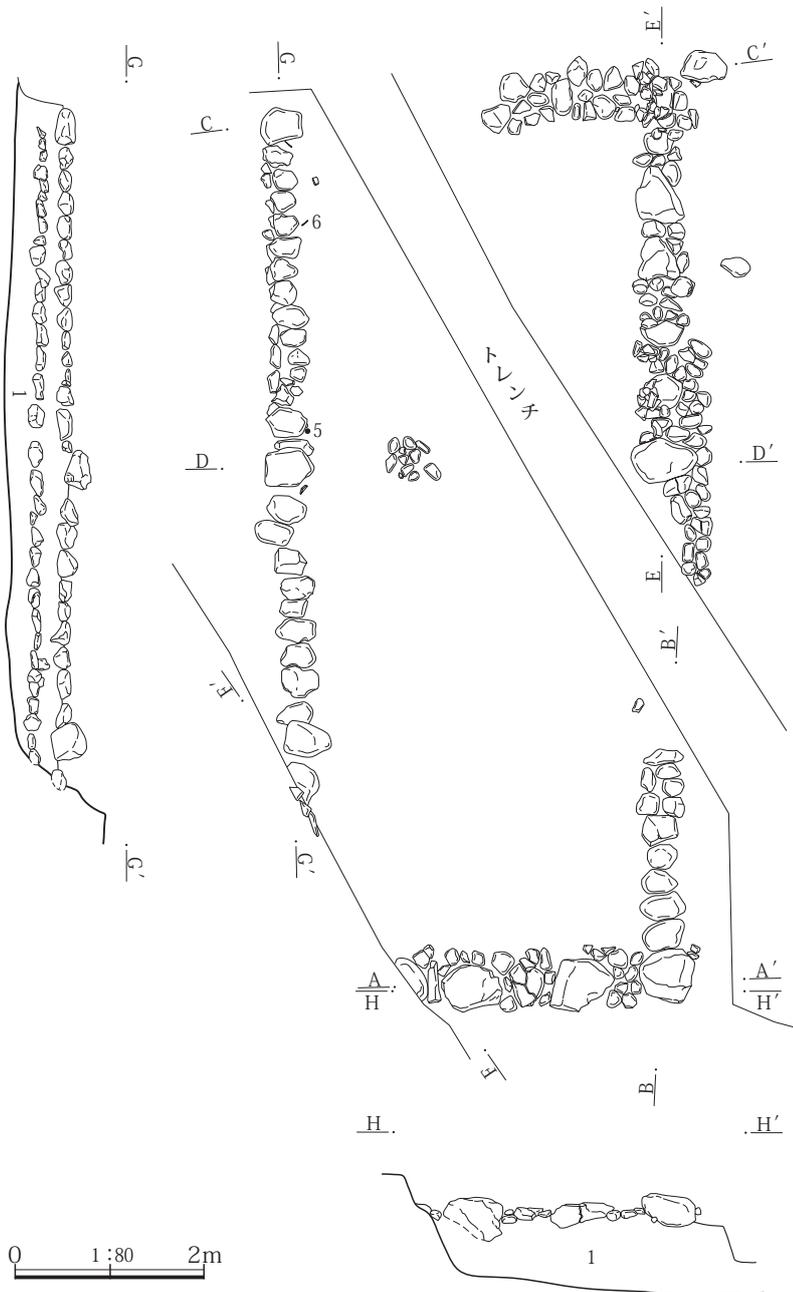
調査区南半部のI-11~12グリッドに位置している。本調査に先立つ試掘調査において、建物の基礎部分と想定される上下2段の石敷きが確認されていたことから、大型重機による表土層の掘削・排土作業段階で、その基礎上面部分の確認を人力により行った。当該地点は上層からの人為的攪乱が広範囲に及び、標準的な土層堆積が認められなかったが、表土層を約30cm掘り下げた段階で、建物基礎の一部を確認した。試掘による石敷きの確認状況から布掘りによる布石地業が想定され、その掘り方の

確認を試みたが、土壌攪乱の影響や地山と埋没土との識別が困難なことから断念し、布基礎の全体確認を主眼に調査を行った。

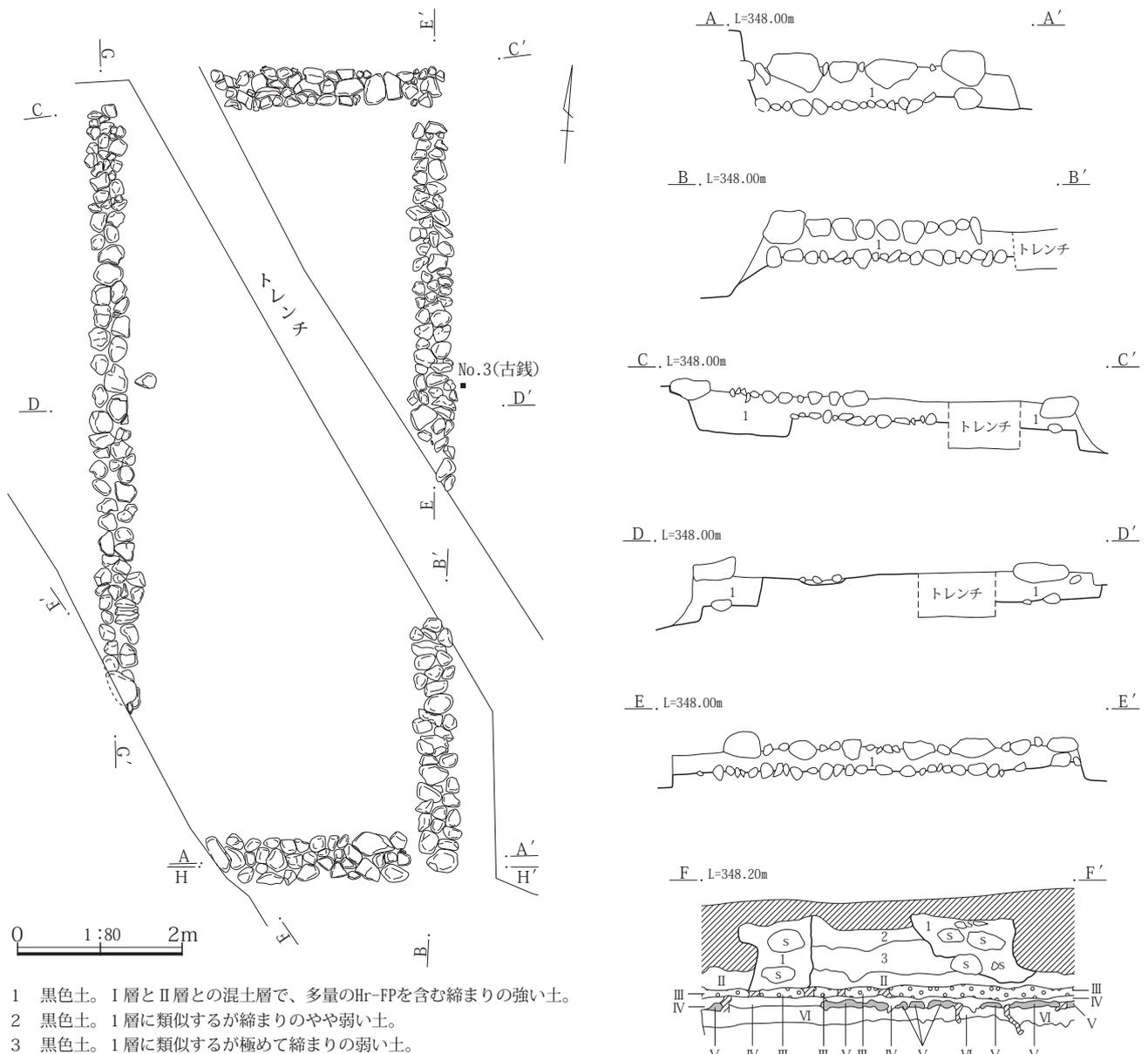
この布基礎の構築状況については、南西隅が調査区境の第7図F-F'セクション内で観察でき、布基礎は攪乱層の中位にて幅0.75~1.25m、深さ0.75~0.8mの布掘りを施工しているのがわかる。また、上下2段の構築状況は、布掘り底面を10cm程度埋め戻して石材を設置するか、あるいは直置きに近い状況で下段を設置し、その上位に15~20cm厚の黒色土を埋填して上段部分を構築していることが、第6・7図のA~E・Gの各セクションにて確認できる。この上下段中に挟在する黒色土は、火山軽石(Hr-FP)を多量に含んで締め難いこともあり、突き固め等の地業痕跡は認められなかった。

各段の布基礎を構成する石材は、いずれも赤城山麓で産出する輝石安山岩の垂角礫を使用しているが、下段と上段とでは使用する石材の大きさやその配置方法にかなり大きな差異が認められる。下段では、長径20cm前後の小形垂角礫を主体にして直径40cm前後の礫を部分的に配置している。各用材の配列は、幅約50cmの範囲に2~3列を複列配置する状況が窺え、各礫の長軸を一定方向に揃える状況は認められないものの、ある程度平坦面が上面になるように配置している状況が認められる。また、各礫面トップを直線で連結すると、その比高差がほぼ5cm以内に収束しており、礫上面を水平に揃えるような施工がなされていると想定される。

一方、上段の布基礎では長径50cm以上の垂角礫が多用されることと、長径60~70cm前後の大形垂角礫が南側列と東側列にて相互に20~50cmの間隔(各石材の中心部間隔では60~70cm)で配置され、下段のような小形礫が少ないのが特徴的である。各用材の配列は、西側列では長径約40cmの中形礫を主体にその長軸方向を



第7図 1号建物(上段基礎)



第8図 1号建物(下段基礎)

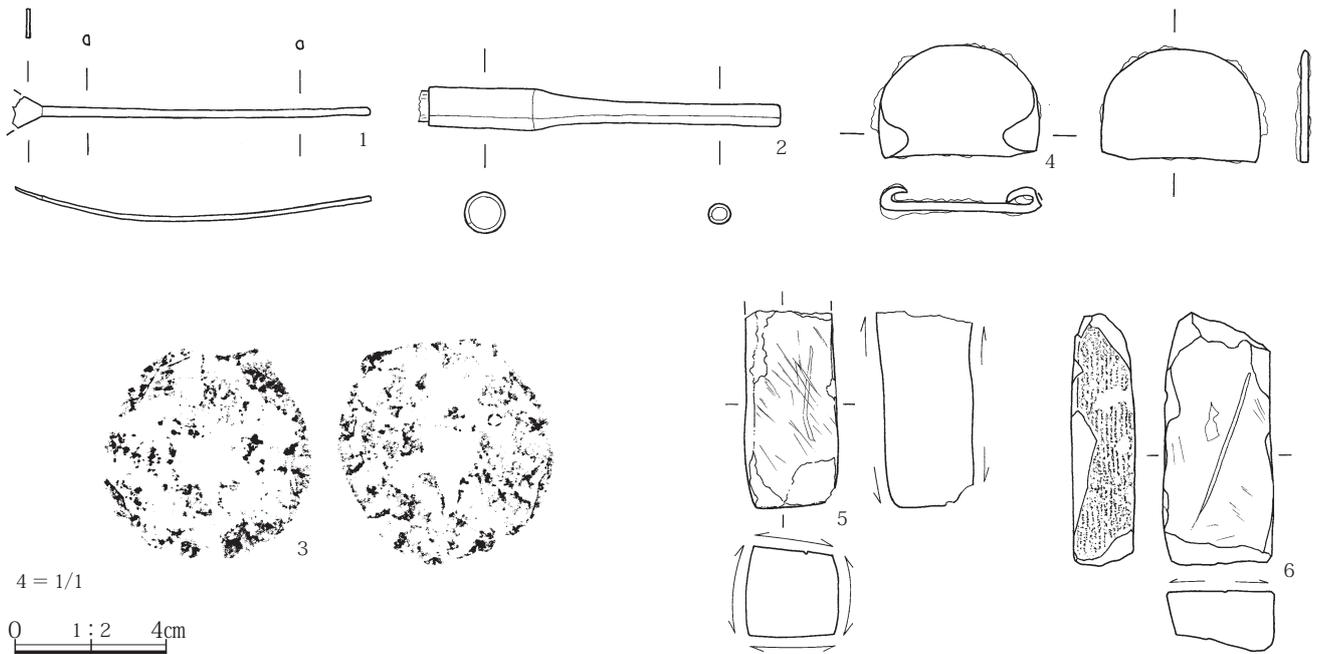
梁行方向に揃えて石垣の小口積に近似した配置をしているが、南側列と東側列では前述したように大形礫が一定間隔で配置され、それらの間隙を長径20cm前後の小形礫で充填している。攪乱等により原位置を保っていない大形礫の一部を除いて各礫面トップを直線で結んだ場合、それらの比高差は5cm以内であることから、下段の布基礎と同様にある程度水平面を保持するための施工が窺える。

このように布基礎を2段に構築する理由については、当域の地山に榛名山二ツ岳火山の軽石(Hr-FP)が多量に含まれることに関係すると推定される。この軽石の中心的降下ルートに当たる旧子持村や渋川市北部域では、道

路建設に伴い路盤の不安定化を避けるために、事前での軽石撤去を行っており、この布基礎についても同様の意識の中で上下に重層化することにより地盤の強度向上を狙ったものだろう。

この上段の布基礎上面にどのような工法で建物を構築したのかが問題だが、大形礫に直接柱を立てるような「礎石建て」なのか、あるいは布基礎の方向に沿って土台の角材を敷く「土台敷き」の工法が採用されていたのかは、俄に判断し難い。ただし、大小の垂角礫を無整形で使用していることを考慮すると、「土台敷き」の可能性が高いのではなかろうか。

布基礎の規模を石敷きの中心部間で計測すると、上下



第9図 1号建物出土遺物

段ともに桁行9.40～9.45m×梁間3.95～4.00mを測る。柱間で換算すれば、桁行5間×梁間2間であり、各柱間の間隔は桁行1.88～1.89m、梁間1.98～2.00mとなる。1尺=30cmと見た場合、1間幅が6尺強となるが、先述したようにこの布基礎の上面に土台の角材が敷設されていたとすれば、この数値も参考程度に留めるべきだろう。また、この布基礎の桁行(長軸)の方位はN4度Wで、桁行をほぼ南北方向に合わせた長形状を呈する。

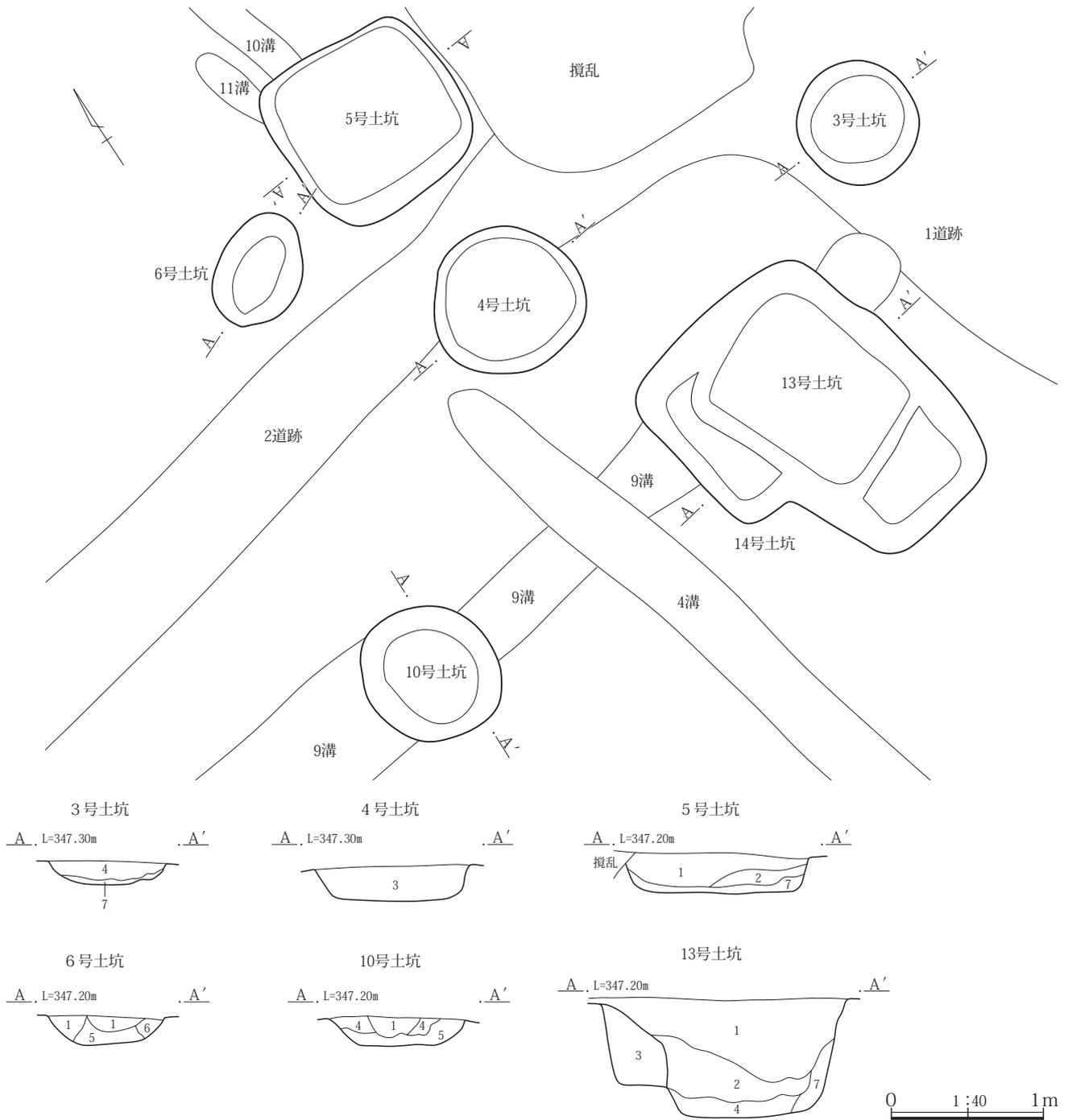
出土遺物としては、西側列の石材周辺を中心にして匙・煙管などの金属製品や鉄製の寛永通寶、砥沢砥石の欠損品2点の他に、図示していないが小破片の近世陶磁器類20点余が確認されている。これらの遺物が布基礎に伴うか否かは判断し難いが、近隣住民からの聞き取り調査によれば、約80年前にはこの布基礎上に建造物が存在していたことが判明しており、時代的に近世～近代にかけての所産であることを示すと考えられる。

(2) 土 坑

調査区南半部のE～F-7～12グリッドを分布の中心域として、Ⅲ層(Hr-FP)の上面にて38基の土坑を確認した。各土坑の規模・形状等については第3表に一括してあるが、ここでは平面形を基準に分類し、分類ごとの特徴を記述する。

平面形状別に見ると、長形状が25基、次いで円形状

が8基、楕円形状が4基を数え、長形状が最多を占める。長形状土坑の特徴を残存状況が良好なものと見ると、最大規模が29号の長径240cm×短径120cm×深さ50cmを筆頭にして、最小が23号の長径102cm×短径60cm×深さ44cmであり、平均値としては長径152cm×短径83cm×深さ37cmを測る。規模的には平均値近辺の土坑が主体を占め、形態と共にかなり規格的な様相を呈している。また、主軸方位で分類すれば、N66度E～N89度Eの範囲に収束するグループA(5・7・11・12・16・20AB・24・30～32号)と、それらの方位とはほぼ90度ずれたN10度W～N18度Wの範囲に収束するグループB(8・13・14・17・25・33・34号)の2つに大別することができる。平面形状が長方形に確定できない18・19号土坑は、両グループの中間的な方位を示すが、22・29号土坑は後者のグループBに含めることが可能だろう。数量的には、グループA：11基、グループB：9基であり、両者間に大きな差異はない。埋没土の状況は、人為的な埋填を明示するものではなく、そのほとんどがⅠ・Ⅱ層に類似したHr-FPを多量に含む黒色土で自然埋没している。各土坑の重複関係を見ると、同類同士では20A・20B号と13・14号の2例が認められるのみであり、主軸方位の斉一的傾向とも併せて当該土坑の機能・性格を考える上で留意すべき点であろう。他に不確定な長形状だが、28号が円形土坑の27号により切られ、15号が楕円形土坑の16号

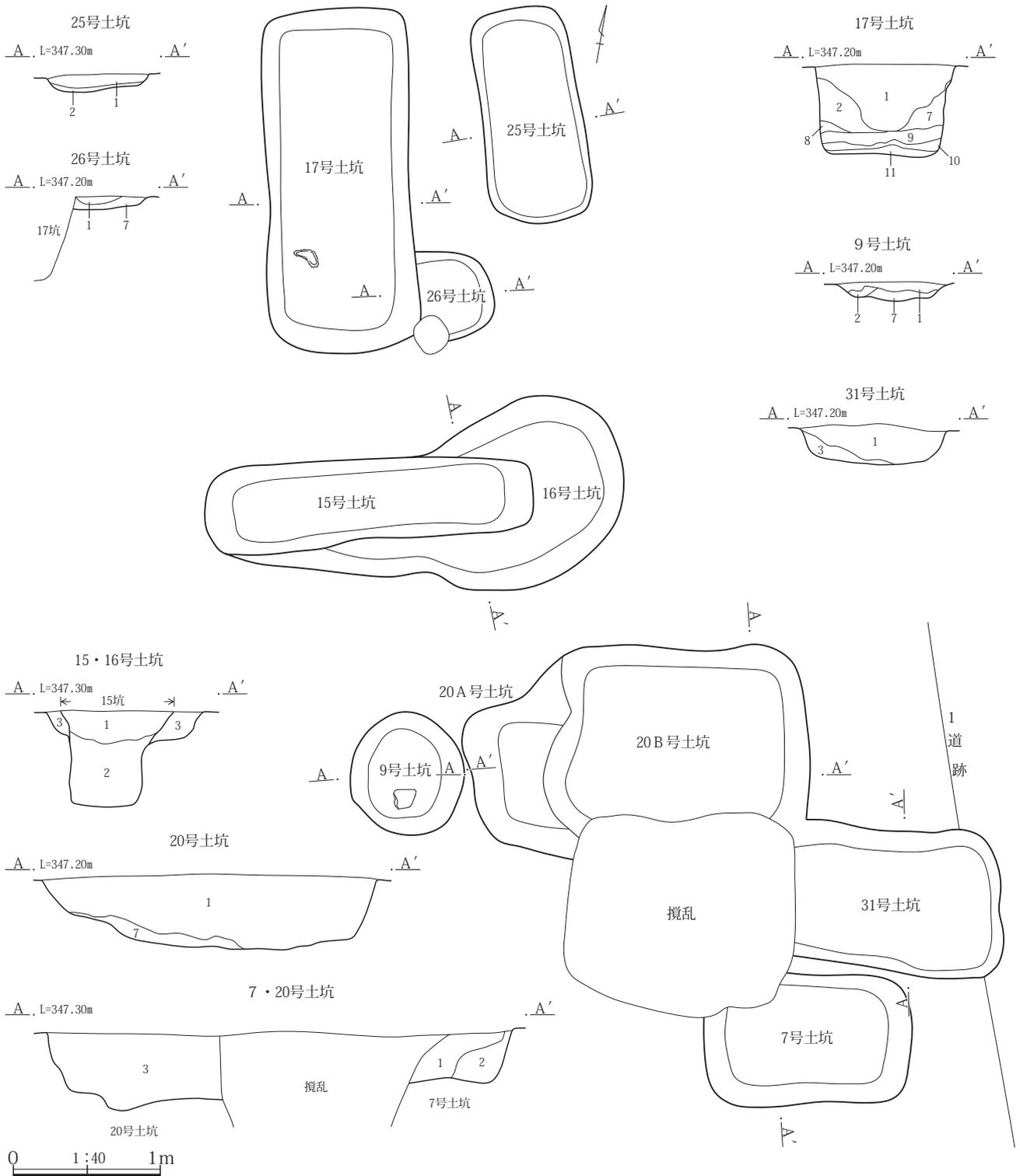


第10図 近世以降の土坑(1)

を切っている。また、他遺構との重複関係では、7基(5・8・10・11・13・14・18号)が4・9・10・11号溝と切り合っているが、両者の埋没土が類似していることもあり、双方の新旧関係を明確に把握できなかった。ただし、南端部で9号溝と重複する13号土坑では、堆積土層中に9号溝の痕跡が認められないことから、溝状遺構→長方形土坑という時間的新旧関係を窺うことができる。出土遺物が確認できるのは、7・13・14・29・31号の5基である。7号では第15図に示したように、蹄鉄1点と砥沢石を石

材とする欠損した砥石3点、それに小破片の近世陶磁器類4点が埋没土中より出土している。墓等への埋納と見なすよりは、ゴミ坑への投棄に近い出土状況と考えられる。当土坑以外の遺物は図示していないが、小破片の近世陶磁器類が1～2点出土している。

8基の円形土坑では、最大規模が35号の長径204cm×短径178cm×深さ16cmで、最小規模が3号の長径80cm×短径78cm×深さ16cmであり、平均値は長径106cm×短径93cm×深さ26cmである。規模的には、35号を除いて直径



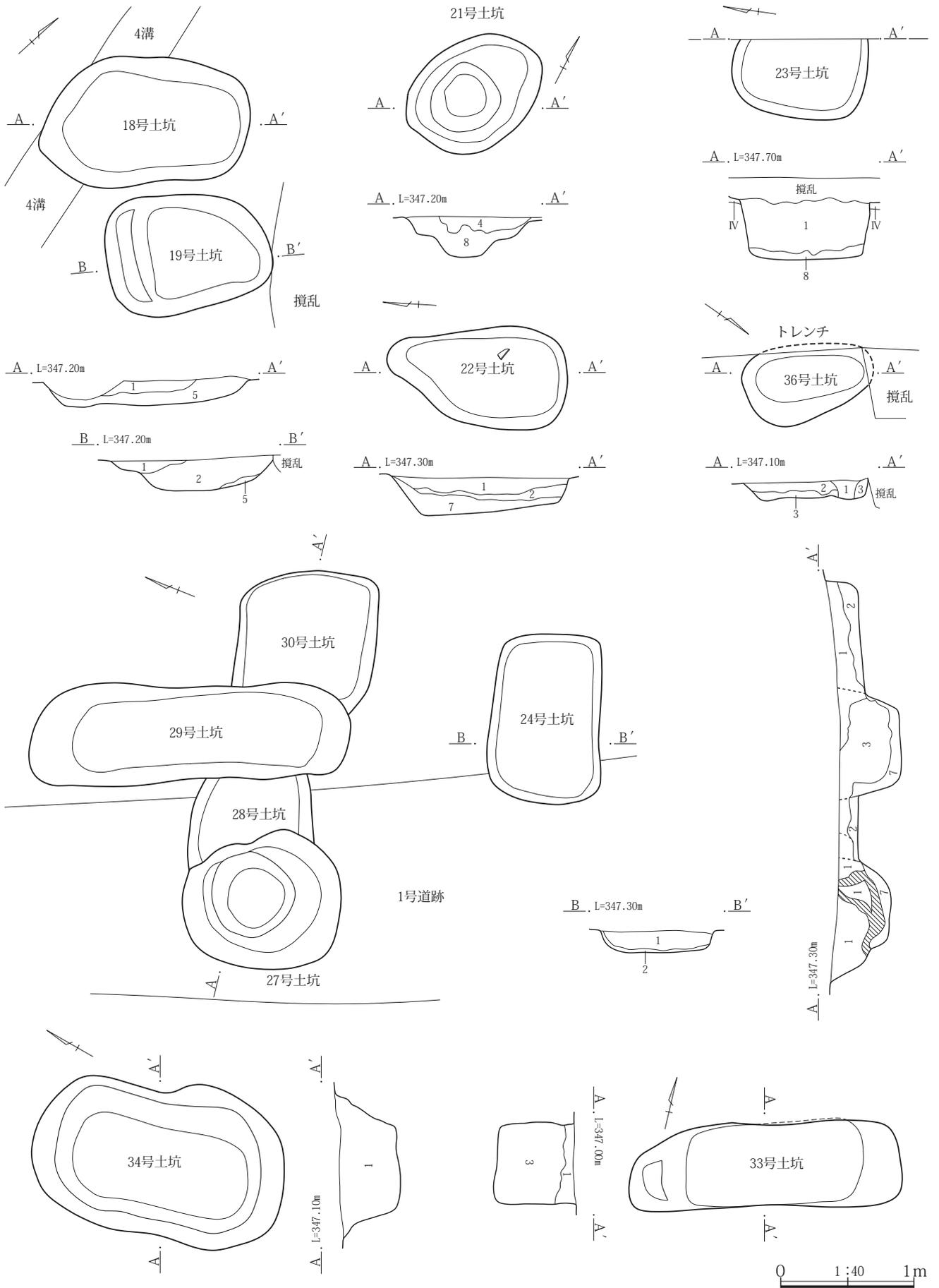
第11図 近世以降の土坑(2)

1 m前後の土坑が主体を占め、深度の浅いのが目立つが、長方形土坑と同様にかなり規格的な様態が認められる。埋没土の状況は先の長方形土坑と大差なく、同様の黒色土が自然堆積している。数量的な少なさもあり、分布的には長方形土坑に近接しつつ散在している状況だが、2号や40号のように調査区の北半部に位置する土坑もあ

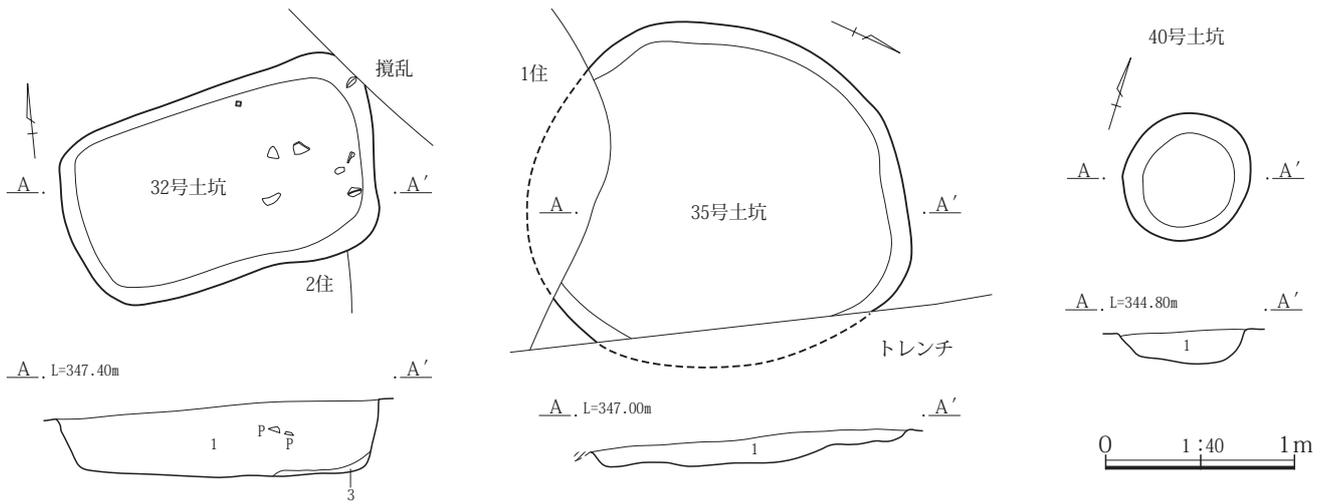
る。尚、出土遺物が確認できる円形土坑はないが、長方形の28号土坑を切る27号土坑を重視すれば、時期的に長方形土坑→円形土坑という時間的変遷も考慮される。

4基の楕円形土坑では、最大規模が15号の長径224cm×短径56cm×深さ61cmで、最小規模が6号の長径78cm×短径56cm×深さ21cmであり、ちなみに平均値は長径136

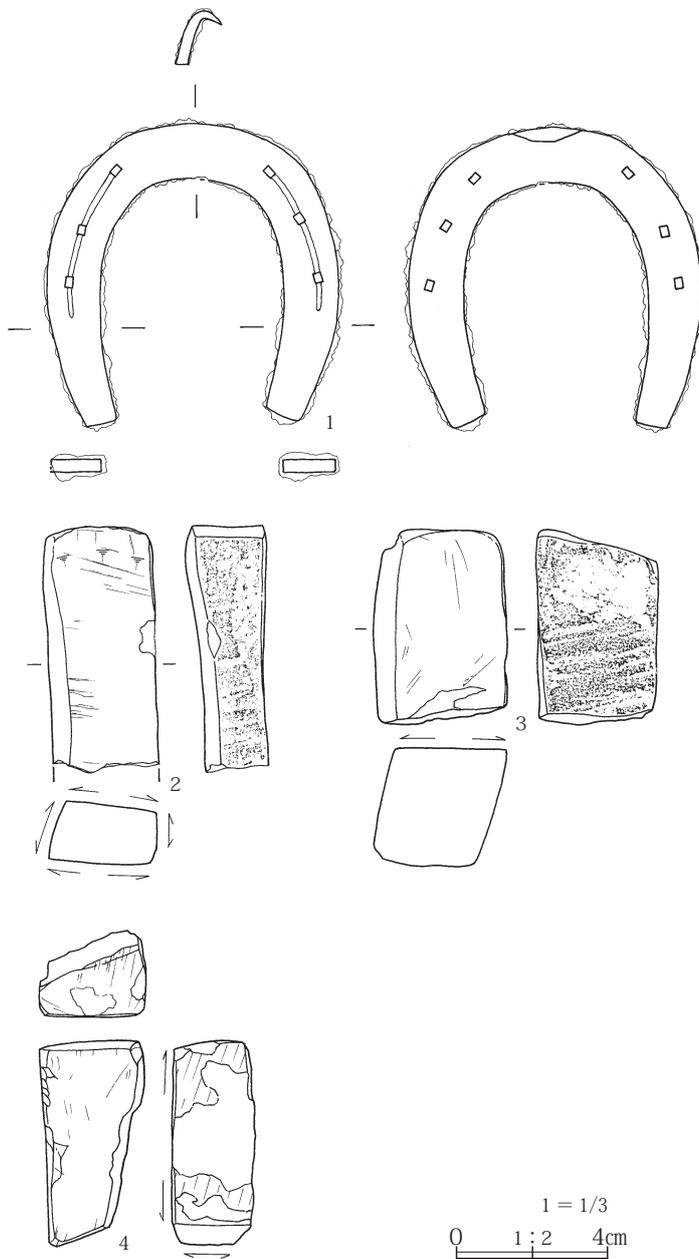
第3章 遺跡の調査内容



第12図 近世以降の土坑(3)



第13図 近世以降の土坑(4)



第14図 7号土坑出土遺物

cm×短径64cm×深さ37cmである。同形状の土坑数量が少ないため規模の面で差異が大きく、傾向把握は困難である。各土坑の主軸方位は、21号と不明の36号を除いて、6・15号は先の長方形土坑グループAとほぼ同様のN60度E～N77度Eであり、両者間に共通する何らかの規制の存在が窺える。また分布的にも長方形土坑の中心域に存在している。埋没土の状況は、先の長方形・円形土坑とも類似したHr-FPを多量に含む黒色土を主体にして、自然埋没している。各土坑からの遺物出土はない。他形態土坑との重複関係は、長方形の16号を切っている15号以外は確認できず、数量的にも少ないことから、両者の時期的新旧関係を示す参考事例に留めておく。また、他の遺構との重複関係では、北半部で1号畠を切っている1号がある。

以上、各土坑の特徴について概述したが、各形態の土坑の機能・性格や時期については、出土遺物の少なさもあり、特定することは困難である。ただし、分布域が1号建物とも重なる点は、両者の有機的関係性を示唆しているとも考えられる。また、主軸方位の2方向性をもつ長方形土坑については、利根川対岸の旧子持村地区においても確認されており、後段の第4章にてその機能・性格に関しての対比・考察を行いたい。

第3表 土坑の規模一覧

番号	位置	時期	平面形	規模(cm)			方位	備考
				長径	短径	深さ		
1	M-17	近世～近代	不整楕円形	228	46	62	N20度W	1畠を切る
2	M-17	近世～近代	円形	92	(70)	53		
3	F-9	近世～近代	円形	80	78	16		
4	F-9	近世～近代	円形	100	100	23		
5	F-9	近世～近代	円形	120	118	28	N89度E	10・11溝と重複
6	G-9	近世～近代	楕円形	78	56	21	N60度E	
7	G-10	近世～近代	長方形	144	88	32	N78度E	
8	G-10	近世～近代	長方形	120	92	21	N13度W	10・11溝と重複
9	G-10	近世～近代	円形	85	79	15		
10	G-8	近世～近代	円形	100	88	19		9溝と重複
11	F-7	近世～近代	長方形	138	74	30	N68度E	4溝と重複
12	F-7	近世～近代	長方形	106	54	15	N66度E	
13	F-8	近世～近代	長方形	205	(12)	78	N13度W	14坑を切る
14	F-8	近世～近代	長方形	124	(40)	58	N10度W	9溝と重複
15	G-11	近世～近代	楕円形?	224	56	61	N77度E	16坑を切る
16	G-11	近世～近代	長方形	222	61	61	N78度E	15坑に切られる
17	H-11	近世～近代	長方形	236	96	64	N11度W	26坑を切る
18	F-8	近世～近代	長方形?	156	92	19	N41度E	4溝と重複
19	F-8	近世～近代	長方形?	123	84	29	N37度E	
20A	G-10	近世～近代	長方形	238	-	55	N82度E	20B坑を切る
20B	G-11	近世～近代	長方形	-	96	30	N82度E	20A坑に切られる
21	H-13	近世～近代	楕円形	106	80	29	N28度E	
22	E-8	近世～近代	長方形?	135	74	28	N0度W	
23	E-8	近世～近代	長方形	102	(60)	44	不明	
24	F-10	近世～近代	長方形	130	80	21	N72度E	
25	G-11	近世～近代	長方形	150	68	12	N18度W	
26	G-11	近世～近代	長方形?	62	(50)	10	不明	17坑に切られる
27	F-10	近世～近代	円形	120	(90)	45		28坑を切る
28	F-10	近世～近代	長方形?	(90)	-	26	不明	27・29坑に切られる
29	F-10	近世～近代	長方形	240	120	50	N23度W	28・30坑を切る
30	F-10	近世～近代	長方形	104	(80)	30	N78度E	29坑に切られる
31	G-10	近世～近代	長方形	(140)	(90)	28	N88度E	
32	E-9	近世～近代	長方形	170	100	41	N78度E	
33	I-12	近世～近代	長方形	205	60	60	N16度W	
34	J-14	近世～近代	隅丸方形	190	108	50	N16度W	
35	I-11	近世～近代	円形	204	178	16		
36	H-11	近世～近代	楕円形?	-	-	18	不明	
40	O-21	近世～近代	円形	70	55	24		

その規模はいずれも最大幅90cm、最大深度30cmを下回り、自然埋没していることや流水の痕跡が認められないという共通性を有する。その走向については、ほぼ東西に延びるグループA(2・3・7・8・9号)と、南北方向のグループB(4・5・6・10・11号)、北東から南西方向へ延びるグループCの12号などがある。先述の1号は、グループA・Bの両方向性を持つ。グループA・Bは、相互に90度ずれる走向性を有しており、埋没状況から水路的機能が認められないことと合わせ、何らかの土地区画に関わる機能を持つと想定される。例えば、東西方向に併走する2・3号と、それに隣接して南北に走向する5・6号などは、そうした土地区画状況の一端を示すものだろう。また、その北側に隣接してクランク状に屈曲する1号も、そうした機能を持つ可能性が高い。

南半部では、4・9～11号と円形・長方形土坑(5・8・10・11・13・14・18号)との重複関係が認められるが、「土坑」の項目にて前述したように両者の新旧関係は確定できない。また、1号建物や1～3号道との時間的関係も不明だが、これらの遺構と重複してい

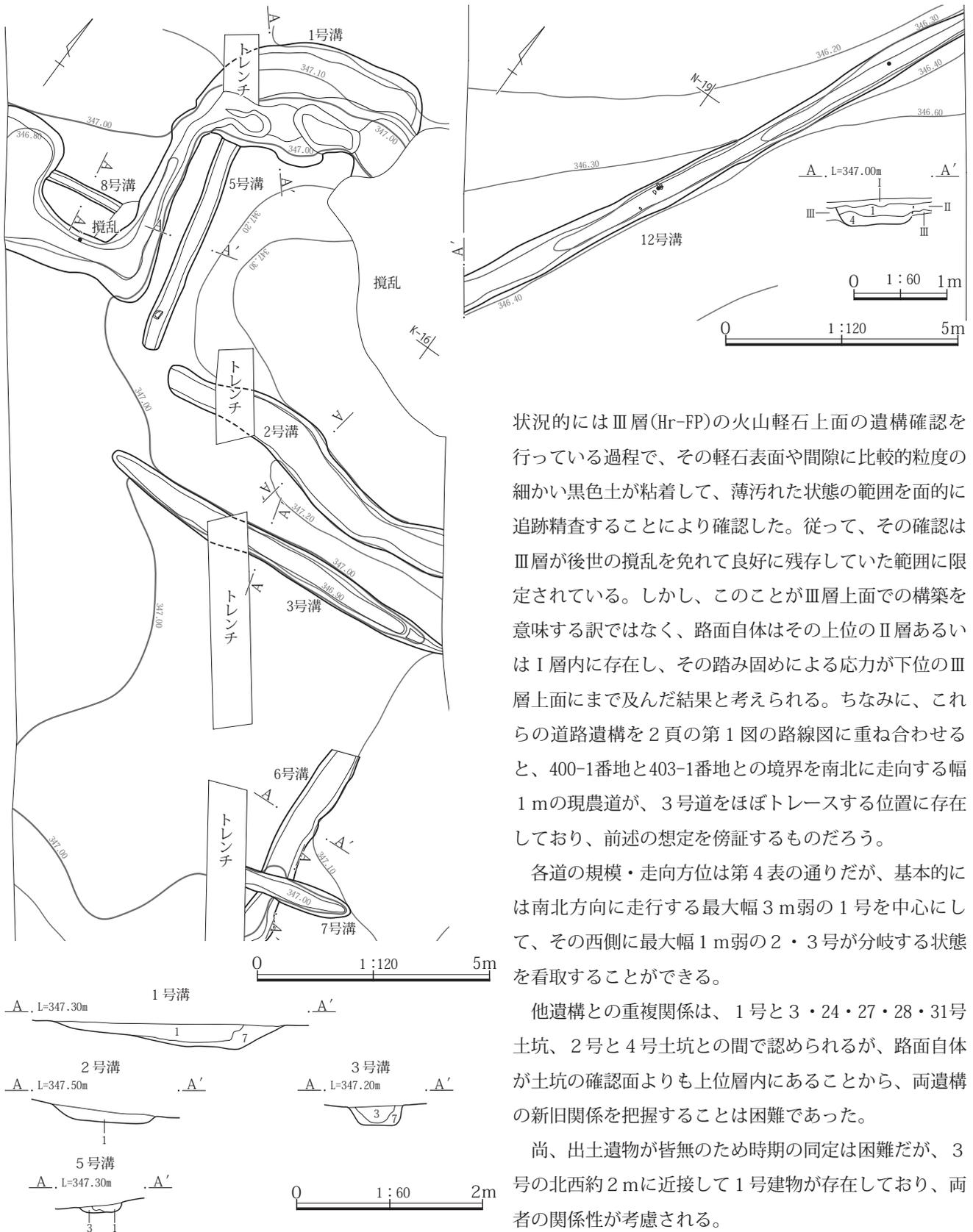
(3) 溝状遺構

Ⅲ層(Hr-FP)の上面にて12条を確認したが、その分布は調査範囲のほぼ全域に散在している。各溝状遺構のグリッド位置や規模等については、第4表に一括してあるが、クランク状に屈曲する最大幅3m弱の1号を除いて、

ない点を重視すれば、計画的な配置関係を持つ可能性もある。出土遺物は1号で煙管が、11号では用途不明の金属製品が、12号では近世の磁器破片が各埋没土中から確認されている他は皆無である。これらの溝を含め、各溝の帰属時期を確定することは困難だが、上記の他遺構との関係を考慮すれば、近世～近代の可能性が高い。

第4表 溝状遺構の規模一覧

番号	位置	時期	断面形	規模			走向方位	備考
				幅(cm)	深(cm)	長(m)		
1	K～L-15～16	近世～近代	逆台形	56～268	3～22	11.40	N74度E	5・8溝と2畠を切る
2	J～K-15	近世～近代	逆台形	65～112	10～22	7.22	N88度E	
3	J～K-14	近世～近代	逆台形	21～71	5～29	8.20	N85度E	
4	F～G-7～9	近世～近代	逆台形	38～54	7～16	8.20	N15度W	9溝を切り、11・18坑と重複。
5	K～L-15～16	近世～近代	逆台形	41～45	3～12	4.75	N81度E	1溝に切られる
6	J-13～14	近世～近代	逆台形	54～76	1～6	4.50	N6度E	7溝に切られる
7	I～J-13	近世～近代	逆台形	42～56	2～11	2.38	N74度E	6溝を切る
8	L-15	近世～近代	逆台形	22～26	6～16	1.67	N14度W	1溝に切られる
9	F～G-8～9	近世～近代	逆台形	40～84	9～18	4.32	N80度E	4溝に切れ10・13・14坑と重複
10	G-9～10	近世～近代	逆台形	24～30	4～15	2.22	N19度W	5・8坑と重複
11	G-9～10	近世～近代	逆台形	20～26	7～12	2.28	N19度W	5・8坑と重複
12	M～N-17～19	近世～近代	逆台形	45～80	3～19	12.30	N26度E	1・2畠を切る



第15図 近世以降の溝状遺構

(4) 道路遺構

調査区南半部で1～3号の道路遺構を確認した。

状況的にはⅢ層(Hr-FP)の火山軽石上面の遺構確認を行っている過程で、その軽石表面や間隙に比較的粒度の細かい黒色土が粘着して、薄汚れた状態の範囲を面的に追跡精査することにより確認した。従って、その確認はⅢ層が後世の攪乱を免れて良好に残存していた範囲に限定されている。しかし、このことがⅢ層上面での構築を意味する訳ではなく、路面自体はその上位のⅡ層あるいはⅠ層内に存在し、その踏み固めによる応力が下位のⅢ層上面にまで及んだ結果と考えられる。ちなみに、これらの道路遺構を2頁の第1図の路線図に重ね合わせると、400-1番地と403-1番地との境界を南北に走向する幅1mの現農道が、3号道をほぼトレースする位置に存在しており、前述の想定を傍証するものだろう。

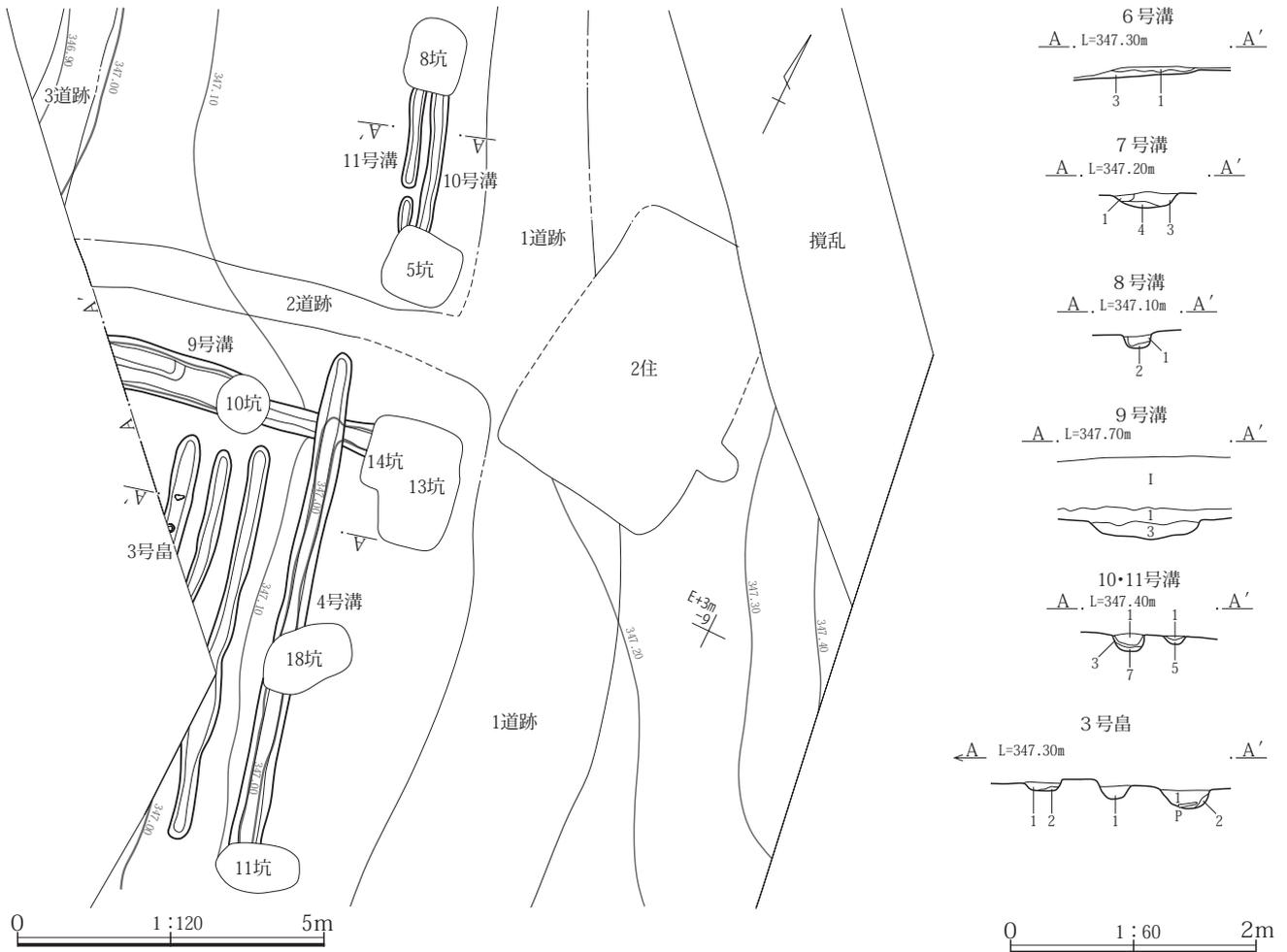
各道の規模・走向方位は第4表の通りだが、基本的には南北方向に走行する最大幅3m弱の1号を中心にして、その西側に最大幅1m弱の2・3号が分岐する状態を看取することができる。

他遺構との重複関係は、1号と3・24・27・28・31号土坑、2号と4号土坑との間で認められるが、路面自体が土坑の確認面よりも上位層内にあることから、両遺構の新旧関係を把握することは困難であった。

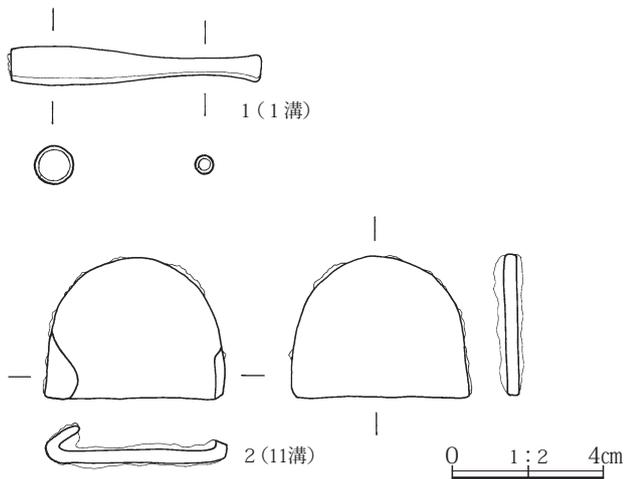
尚、出土遺物が皆無のため時期の同定は困難だが、3号の北西約2mに近接して1号建物が存在しており、両者の関係性が考慮される。

第5表 道路遺構の規模一覧 (近世以降)

番号	位置	時期	規模		走向方位	備考
			幅(cm)	長(m)		
1	E-7	近世～近代	30～275	21.45	N18度W	3・24・27・28・31坑と重複
2	F-9	近世～近代	63～86	6.75	N80度E	4坑と重複
3	H-9	近世～近代	72～95	4.86	N16度W	



第16図 近世以降の溝状遺構・道路遺構・畠遺構



第17図 溝状遺構の出土遺物

(5) 畠遺構

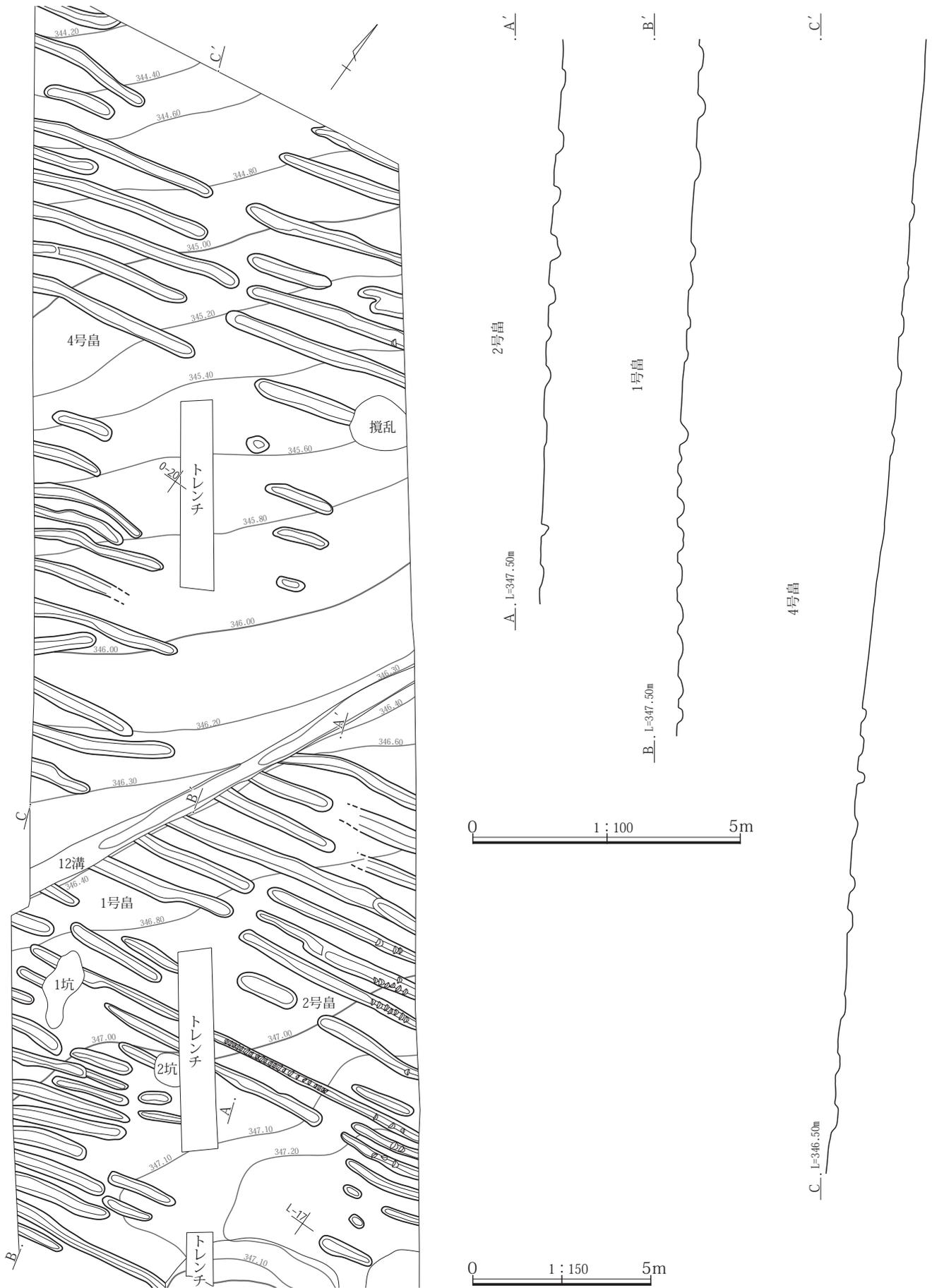
調査区域の北半部を中心にして、Ⅲ層(Hr-FP)上面にて4区画の畠を確認した。各区画の畠は、細い溝状の畝間のみが残存し、畝本体は上層からの攪乱等により確認できなかった。また、1～4号の各畠を区画する畦状の盛り土や溝などは確認されていないため、南半部に隔絶した3号を除いて、相互に隣接する1・2・4号の区画識別は、畝間の走向・断続状況・間隔等の相違により行った。

各畠の畝間規模については、第5表にまとめてあるように、幅・深さに共に最大・最小値にはかなりの開きがあるが、平均値で見れば幅30cm前後、深さ10cm前後の範囲

に収まる。また、畝間自体の深さは層厚約20cm前後のⅢ層内にとどまるものが多数を占めるが、少数ながらその下面から約15cm下位のⅥ層にまで達するものもある。走向方位では、

第6表 畠遺構の規模一覧

番号	位置	時期	断面形	畝間規模(cm)			走向方位	備考
				幅	深さ	間隔		
1	K～N-16～17	近世～近代	逆台形	22～54	1～18	50～74	N71度E	1・2坑に切られる
2	K～N-17～19	近世～近代	逆台形	24～70	2～25	68～98	N79度E	12溝に切られる
3	F～G-7～8	近世～近代	逆台形	25～40	5～17	64～102	N13度W	
4	N～Q-19～22	近世～近代	逆台形	26～56	1～17	80～150	N76度E	



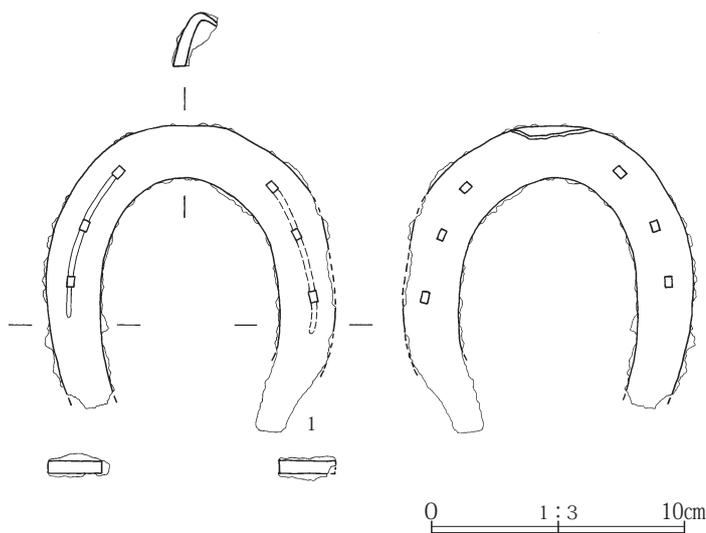
第18図 近世以降の畠遺構

1・2・4号がほぼ東西方向であるのに対して、3号は南北方向をとる。畝間相互の中心間隔は、2・4号が110cm前後、1・3号が60cm前後を主体としており、栽培作物等の差異を反映している可能性もある。相互に隣接する2号と4号の走行方向にほとんど差異がないことを加味すれば、両者は同一区画として識別できるとも考えられる。

他遺構との重複関係では、1・2号が12号溝や1・2号土坑に切られているのが確認でき、可能性としては各畝がそれらの遺構よりも時期的に先行するとも考えられる。いずれにしても、前述の各遺構と同様に帰属時期を明示する出土遺物はなく、状況的には近世～近代の時間幅の中に収束すると想定される。

(6) 遺構外の出土遺物

第19図に掲示したように、Ⅲ層上位の攪乱土層中から蹄鉄1点が確認されている。左右に3個の角孔を持ち、裏面には孔を連繋する浅い溝がある。先端部は舌状に作り出されてほぼ直角に折り曲げられており、全体的に錆び付いてはいるものの、地金が良好に残っている。これとほぼ同一形態の蹄鉄が7号土坑内から出土しており、同一時期の所産と推定される。帰属時期は不明だが、残存状態を見る限り近世を遡ることはないだろう。



第19図 遺構外の出土遺物

3. 平安時代の遺構と遺物

2項の「近世以降の遺構と遺物」で既述したように、当該期の遺構についてはⅢ層(Hr-FP)上面において、近世以降の遺構と共に文化層第1面の遺構として確認した。遺構の内容は、竪穴住居3軒とピット4基のみだが、調査区南半部のF～I-9～11グリッドにかけた狭小な範囲に集中している。

(1) 竪穴住居

3軒の竪穴住居の中で、全体を調査し得たのは1号のみである。2号は住居の北東隅を後世の攪乱により壊され、3号はその大半が調査区外に存在することから、北東隅を調査したにとどまった。各住居の出土遺物から判断すると、9世紀後半～10世紀初頭にかけて1号→2号→3号の順に構築されたと考えられるが、明確な支柱穴が認められないことや竈がいずれも東壁に敷設されている点で共通している。1号はその外周にテラス状の平坦面が確認された点で注目されるが、他の住居にもこうした「施設」が構築当初に付帯していたのか否かについては、後世の攪乱等もあり不明である。

● 1号住居(第21・22図、PL. 9・10・25)

位置 H～I-10～11グリッド

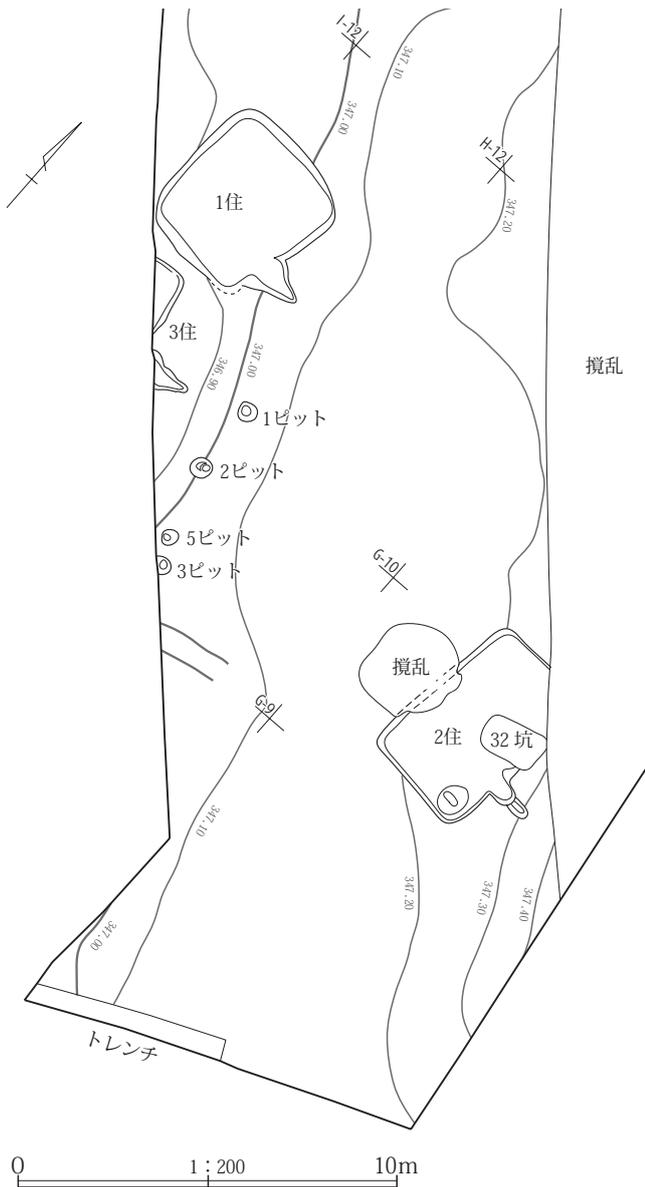
方位 N100度E 面積 2.25㎡

重複 近世以降の35号土坑により、外周部北西隅のテラスを切られている。

形状 主軸を東西方向に持つ正方形を基本とするが、北辺に対向する南辺長が約50cm短いため、若干歪んだ形状を呈する。また、北・南辺が外側に湾曲しているが、周溝により圍繞された平面形状が整然としていることから、廃絶後の壁面崩落による変形と想定される。

規模 一辺の長さが3.72mで、深さ49～75cmを測る。

竈 東壁の南隅に近接して、その外側に造り出されている。燃烧部の規模は幅70cm×奥行73cmであり、煙道部の掘り方は幅40cm×長さ53cm、勾配約30度で付設されている。竈内での灰層堆積は確認できないが、底面から約10cm上位に天井部材の崩落層(15層)が認められる。また、焚き口手前の長径1.7m×短径1.2mの範囲に焼土ブロック化した竈部材が散在している。



第20図 平安時代の遺構配置

貯蔵穴 竈周辺部には存在しないが、床面中央のやや西壁寄りに長軸を南北方向に持つ長径160cm×短径106cm×深さ56cmの楕円形状の床下土坑が存在する。その内部からは遺物の出土はなく、締まりの弱い黄褐色土で埋填されていた。

周溝 竈周辺部を除いて、幅20～34cm、深さ6～14cmの規模で全周している。

床面 他に比べて南壁周辺が5cm前後低くなるが、ほぼ水平に構築されている。叩き床状の堅緻な面は認められず、掘り方とは最大20cm程度の深度差がある。南壁周溝に隣接した長径53cm×短径45cm×深さ25cmの浅い掘り込みは、出入口部の梯子等の施設に関わる可能性がある。

柱穴 精査にもかかわらず確認できなかったことか

ら、掘立構造ではないと判断される。

埋没土 上半部はHr-FPを含む暗褐色土が主体的で、下半部では焼土ブロックを含む褐色土が堆積するが、いずれも自然堆積状況を示している。埋没方向としては、主として丘陵斜面上位の北東側からの流入・堆積が想定できる。

外周部 住居の掘り込み際から地山を幅49～70cm、深さ15cm前後に浅く掘り窪めたテラス状の平坦面が、ほぼ全周している。当部位からの遺物出土はなく、その機能・性格については不明だが、この範囲を含めて居住スペースであったことも考えられる。

遺物 埋没土中を含め、土師器の甕類76点、坏類2点、器種不明4点、須恵器の坏類37点、甕類1点、器種不明1点などの大小破片と紡輪1点、刀子1点などが出土した。土師器や須恵器の完形品はなく、2・4・5が床面直上またはそれに近似した状態で出土した他は、いずれも埋没土中からの出土である。また、7の紡輪は床面掘り方内から、8の刀子は西側中央の周溝内からの出土である。尚、北西隅に近接して粘土塊2点が出土している。

所見 深い掘り込みを持つことや、外周部にテラス状の付帯施設を持つ点が特徴的である。出土土器は破片を主体としているが、その型式的特徴から9世紀第3四半期に比定でき、当該住居も同期の所産と考えられる。

● 2号住居(第23・24図、PL.11・12・25)

位置 E～F-9～10グリッド

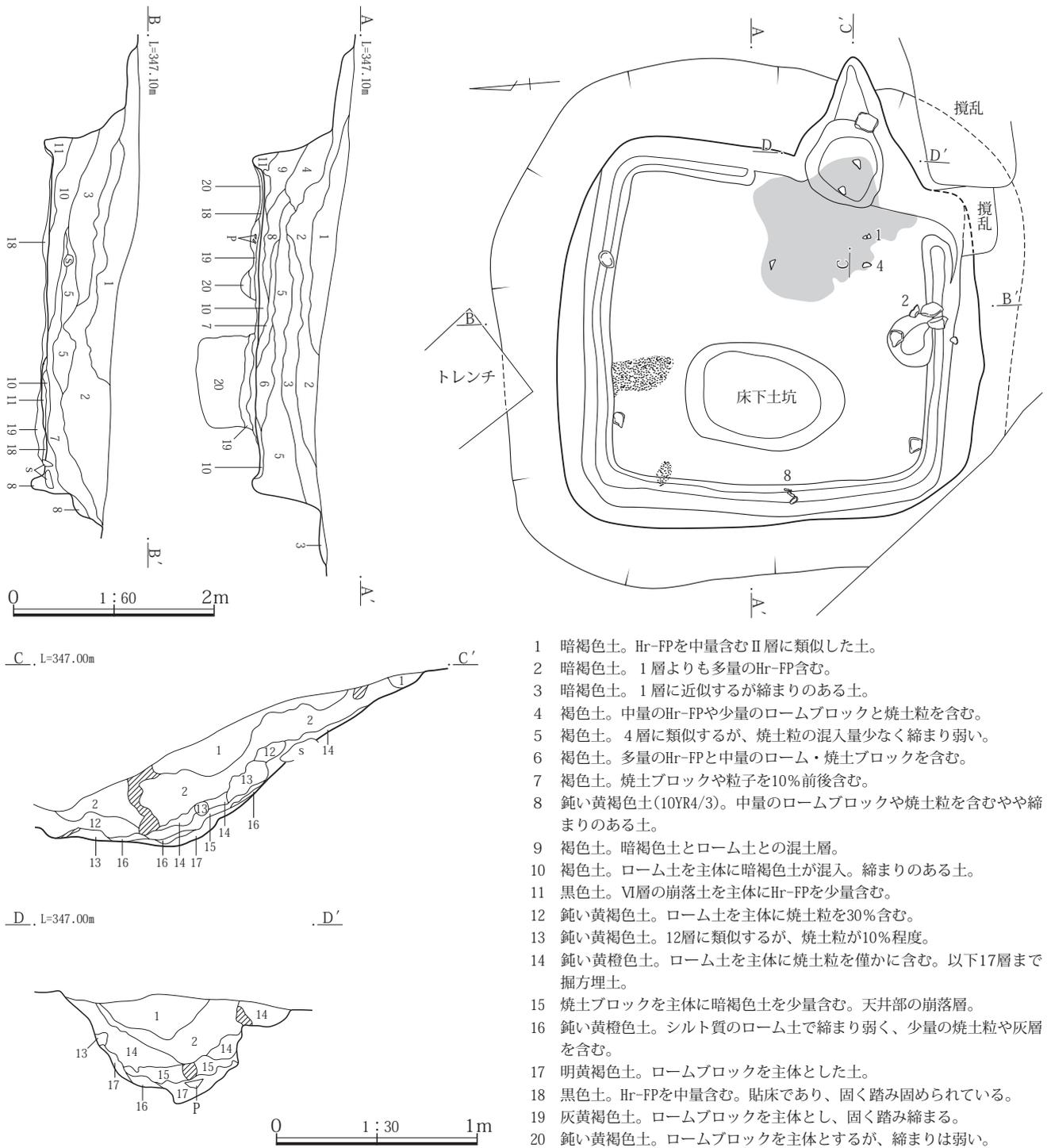
方位 N99度E **面積** 2.34㎡

重複 東壁および北西隅を近世以降の32号土坑と24号土坑により切られている。

形状 長軸を南北方向にもつ長方形を呈する。各辺はほぼ直線的に掘り込まれ、歪みの少ない形状を持つ。北東隅は上層からの攪乱により壊され、確認できなかった。

規模 長辺4.32m×短辺3.19m、深さ6～21cmを測る。

竈 東壁中央部のやや南寄りに位置し、壁面外側に造り出されている。燃烧部の規模は幅60cm×奥行53cmであり、煙道部は幅18cm×長さ43cm、勾配約40度で付設されている。燃烧部のほぼ中央に、支脚として利用されたと考えられる幅10cm×高さ15cmの安山岩が直立して出土している。竈内での灰層堆積は確認できない。



- 1 暗褐色土。Hr-PPを中量含むⅡ層に類似した土。
- 2 暗褐色土。1層よりも多量のHr-PP含む。
- 3 暗褐色土。1層に近似するが締まりのある土。
- 4 褐色土。中量のHr-PPや少量のロームブロックと焼土粒を含む。
- 5 褐色土。4層に類似するが、焼土粒の混入量少なく締まり弱い。
- 6 褐色土。多量のHr-PPと中量のローム・焼土ブロックを含む。
- 7 褐色土。焼土ブロックや粒子を10%前後含む。
- 8 鈍い黄褐色土(10YR4/3)。中量のロームブロックや焼土粒を含むやや締まりのある土。
- 9 褐色土。暗褐色土とローム土との混土層。
- 10 褐色土。ローム土を主体に暗褐色土が混入。締まりのある土。
- 11 黒色土。Ⅵ層の崩落土を主体にHr-PPを少量含む。
- 12 鈍い黄褐色土。ローム土を主体に焼土粒を30%含む。
- 13 鈍い黄褐色土。12層に類似するが、焼土粒が10%程度。
- 14 鈍い黄褐色土。ローム土を主体に焼土粒を僅かに含む。以下17層まで掘方埋土。
- 15 焼土ブロックを主体に暗褐色土を少量含む。天井部の崩落層。
- 16 鈍い黄褐色土。シルト質のローム土で締まり弱く、少量の焼土粒や灰層を含む。
- 17 明黄褐色土。ロームブロックを主体とした土。
- 18 黒色土。Hr-PPを中量含む。貼床であり、固く踏み固められている。
- 19 灰黄褐色土。ロームブロックを主体とし、固く踏み締まる。
- 20 鈍い黄褐色土。ロームブロックを主体とするが、締まりは弱い。

第21図 1号住居

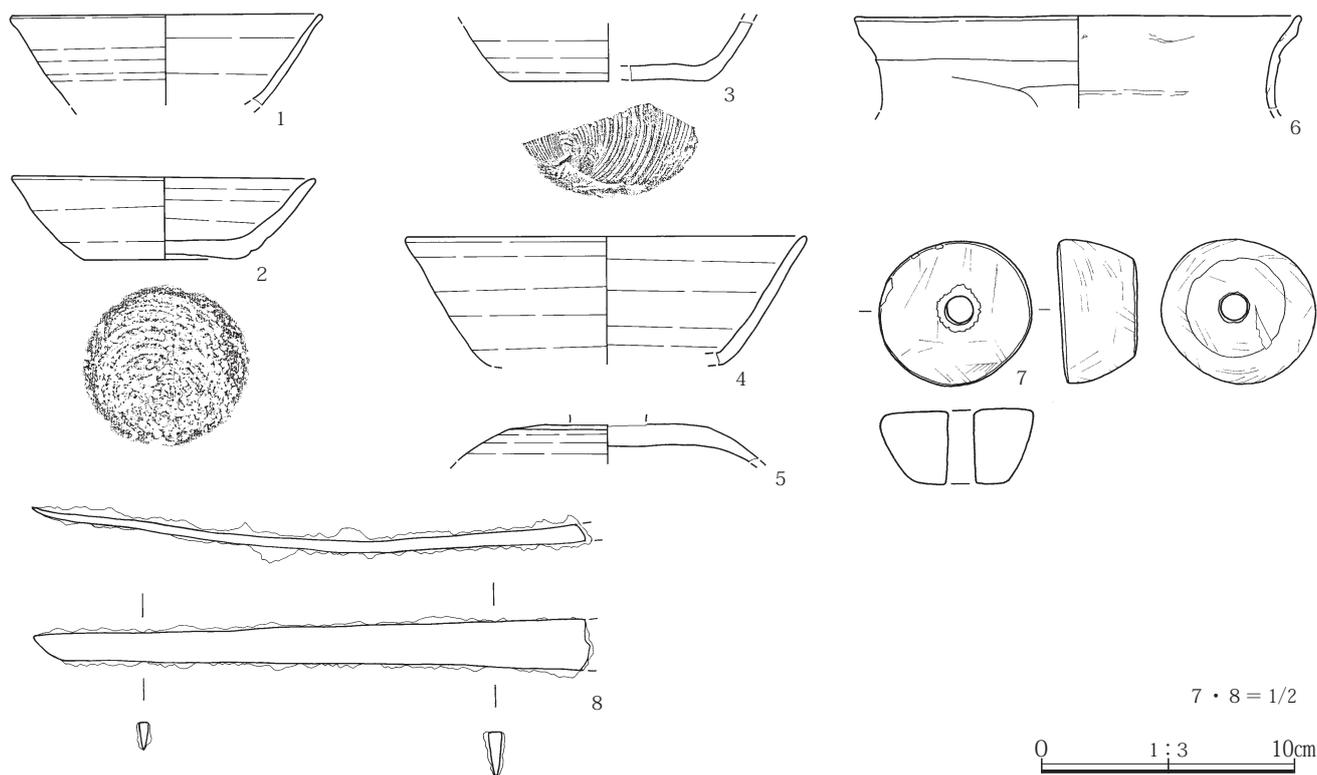
周溝 竈周辺部を除いて、幅17~30cm、深さ4~19cmの規模で全周している。

貯蔵穴 竈の南側に近接して設置され、上位面では長径87cm×短径72cmの楕円形状を呈するが、基本的には長軸を東西方向に持つ長径65cm×短径55cm×深さ48cmの隅丸形状と考えられる。開口部付近に長径40cm×短径20cm×厚さ6cmの粘土塊が出土しているが、他の出土遺物は

ない。

床面 北壁側から南壁側に向かって、比高差10cmの傾斜が認められるが、叩き床状の堅緻な面は認められないものの、ほぼ平坦に造作されている。掘り方は中央部を除いてかなりの凹凸面を持ち、床面とは最大20cm程度の深度差がある。

柱穴 1号住居と同様に確認できなかったことから、



第22図 1号住居出土遺物

掘立構造ではないと判断される。

埋没土 床面までの掘り込み深度が浅いため、埋没土の顕著な特徴は見出し難いが、Hr-FPを含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物 埋没土中を含め、土師器の甕類15点、器種不明1点、須恵器の坏類11点、甕1点などの大小破片が出土している。竈内を中心に多数の土器片が見られたが、完形に復元できるものはない。床面上に7cm離れて出土した4と埋没土中から出土した3以外は、全て竈内から出土した遺物である。

所見 出土土器に完形品は認められないが、その型式的特徴から9世紀第4四半期に比定でき、当該住居も同期の所産と考えられる。

●3号住居(第25・26図、PL.13・25)

位置 H～I-10グリッド

方位 N75度E **面積** 不明

重複 1号住居のテラス南側を切っている。また、竈の左脇に攪乱があるために明確ではないが、時期の異なる土師器や須恵器(1・3)が出土しており、より古段階の竪穴住居を切っている可能性もある。

形状 住居の大半が調査対象区域外にあるため判然としないが、基本的に方形を呈すると想定される。

規模 長辺と短辺の規模は不明だが、深さは56～69cmを測る。

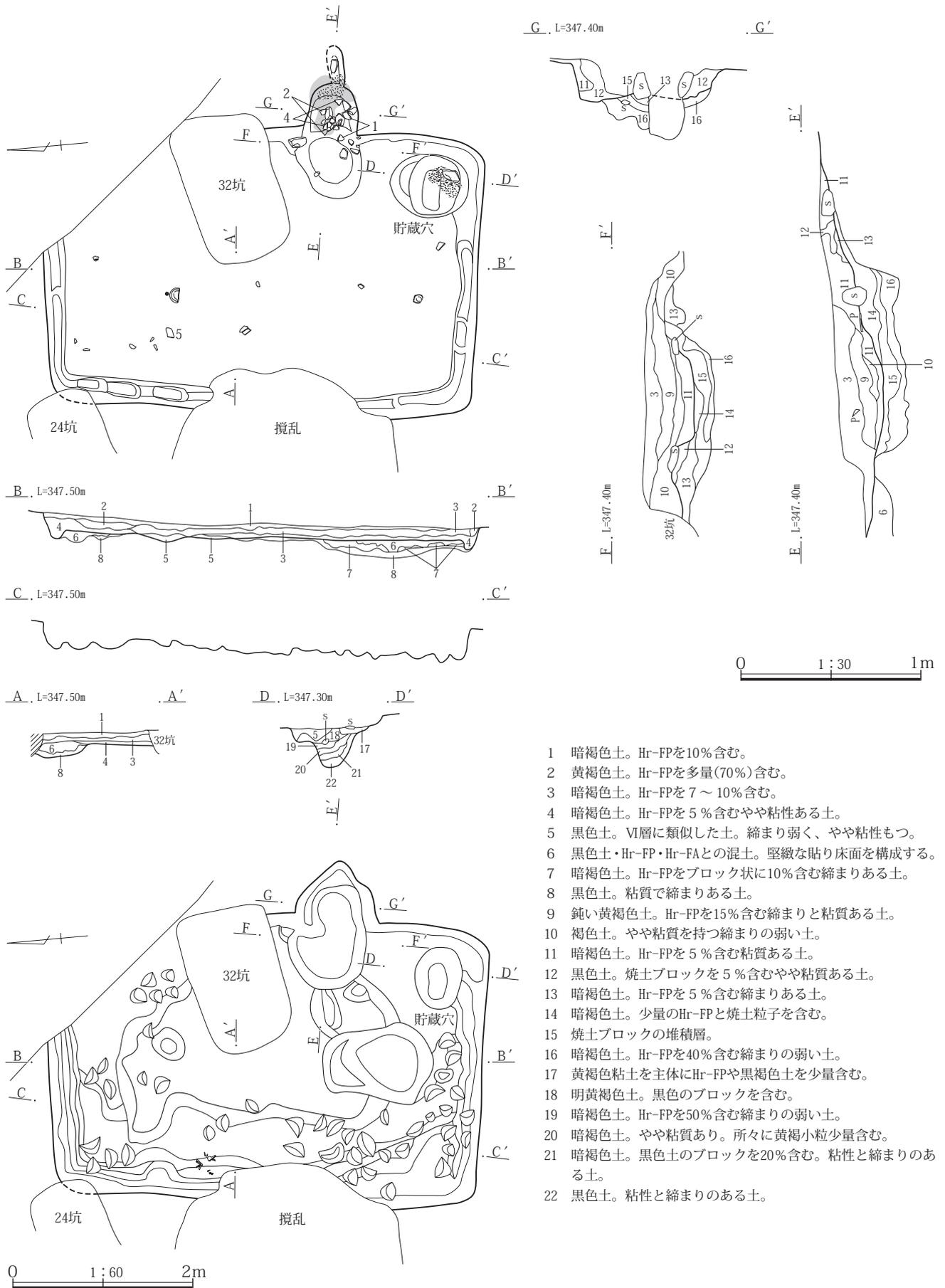
竈 東壁面の外側に造り出されている。部分的な確認にとどまったため、燃烧部の規模は不明。煙道部は幅30cm、長さ27cmで約40度の勾配で立ち上がる。燃烧奥部から煙道基部にかけて、灰層の堆積が認められる。袖部の有無は不明。

周溝 確認範囲の規模は、幅20～41cm、深さ1～5cmを測る。

床面 確認範囲では、叩き床状の堅緻な面や凹凸はなく、北側から南側へと僅かに傾斜している。

埋没土 Hr-FP混じりの暗褐色土が自然堆積している。

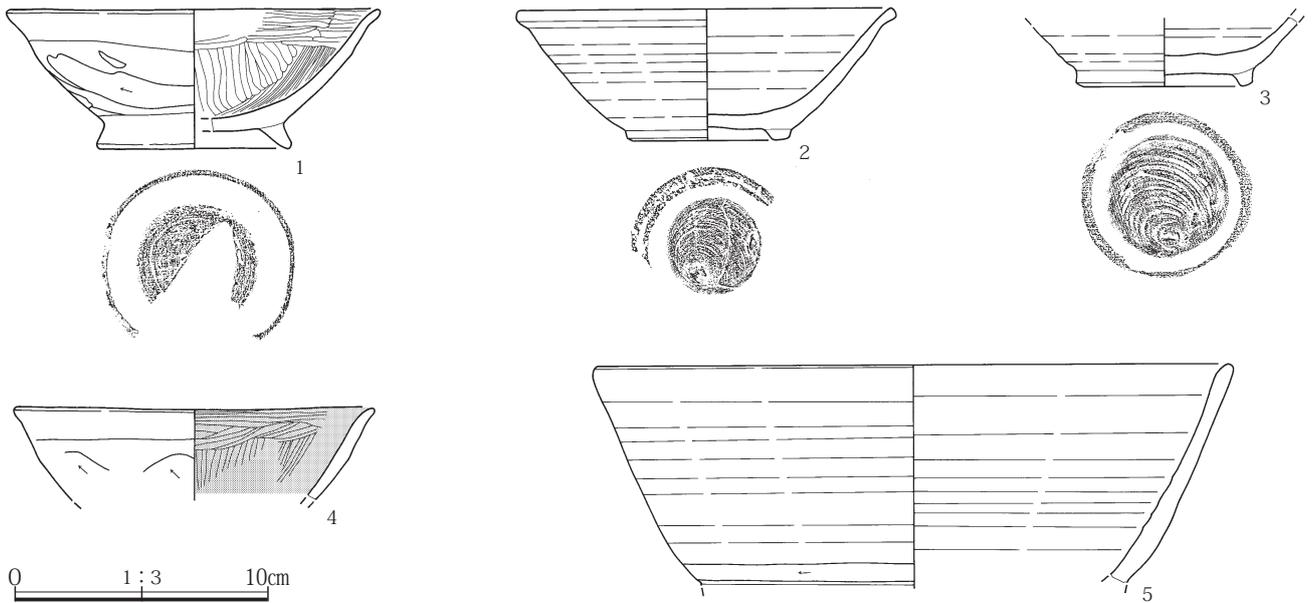
遺物 埋没土中を含め、土師器の甕類29点、器種不明5点、坏類2点、須恵器の坏類2点、甕類4点などの大小破片が出土している。調査可能範囲が狭いこともあり、竈内からの出土土器(5)が目立つが、住居外縁部の竈左側から3・4が、同右側から1が出土している。また、6の紡輪は東壁の北寄りに床面から52cm浮いて出土している。



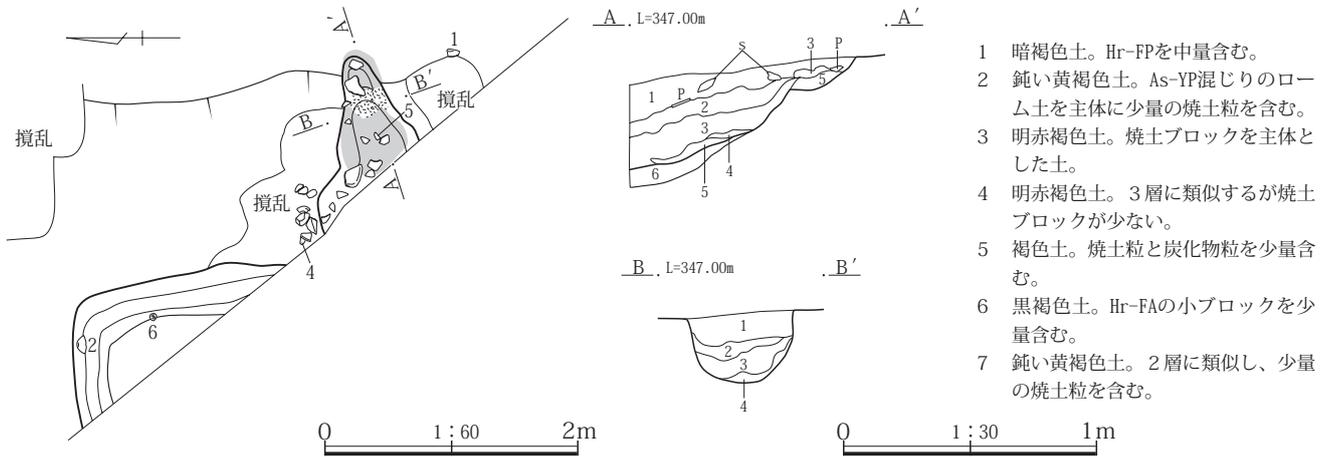
- 1 暗褐色土。Hr-FPを10%含む。
- 2 黄褐色土。Hr-FPを多量(70%)含む。
- 3 暗褐色土。Hr-FPを7~10%含む。
- 4 暗褐色土。Hr-FPを5%含むやや粘性ある土。
- 5 黒色土。VI層に類似した土。締まり弱く、やや粘性もつ。
- 6 黒色土・Hr-FP・Hr-FAとの混土。堅緻な貼り床面を構成する。
- 7 暗褐色土。Hr-FPをブロック状に10%含む締まりある土。
- 8 黒色土。粘質で締まりある土。
- 9 鈍い黄褐色土。Hr-FPを15%含む締まりと粘質ある土。
- 10 褐色土。やや粘質を持つ締まりの弱い土。
- 11 暗褐色土。Hr-FPを5%含む粘質ある土。
- 12 黒色土。焼土ブロックを5%含むやや粘質ある土。
- 13 暗褐色土。Hr-FPを5%含む締まりある土。
- 14 暗褐色土。少量のHr-FPと焼土粒子を含む。
- 15 焼土ブロックの堆積層。
- 16 暗褐色土。Hr-FPを40%含む締まりの弱い土。
- 17 黄褐色粘土を主体にHr-FPや黒褐色土を少量含む。
- 18 明黄褐色土。黒色のブロックを含む。
- 19 暗褐色土。Hr-FPを50%含む締まりの弱い土。
- 20 暗褐色土。やや粘質あり。所々に黄褐小粒少量含む。
- 21 暗褐色土。黒色土のブロックを20%含む。粘性と締まりのある土。
- 22 黒色土。粘性と締まりのある土。

第23図 2号住居

3. 平安時代の遺構と遺物



第24図 2号住居出土遺物



第25図 3号住居

所見 竈内から出土した2・5の須恵器は、その型式的特徴から10世紀第1四半期に比定でき、当該住居も同期の所産と考えられる。住居外縁部から出土した1・3・4は、いずれも9世紀前半から後半に比定される。尚、住居の部分的調査のため、貯蔵穴と柱穴の有無については不明である。

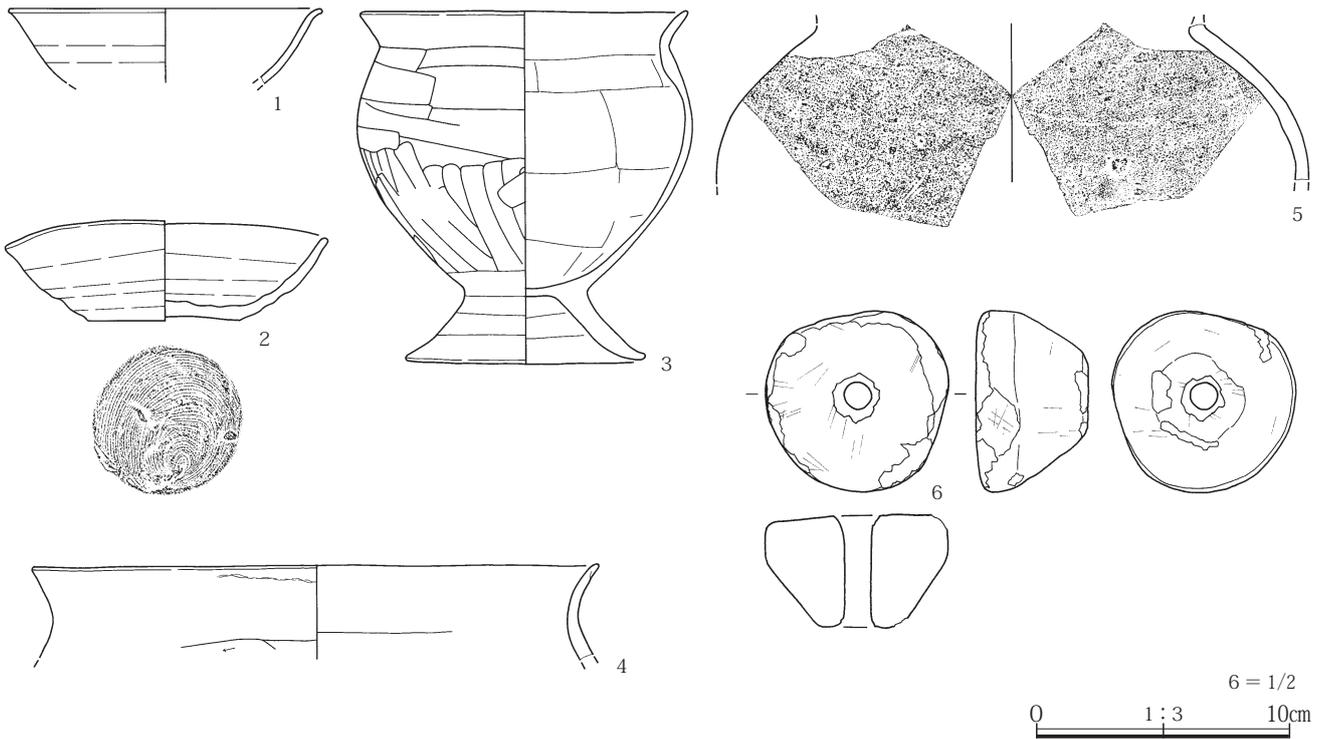
(2)ピット

1・2号住居の南東側に近接して1～3・5号の4基を確認した。各ピットの規模は、P1：長径52cm×短径50cm×深さ60cm、P2：長径58cm×短径54cm×深さ56cm、P3：直径44cm×深さ45cm、P5：長径50cm×短径40cm×深さ39cmを測る。各ピットは南北方向にほぼ直線的に並んでおり、その芯々間の距離はP1～P2：182cm、P2～P3：

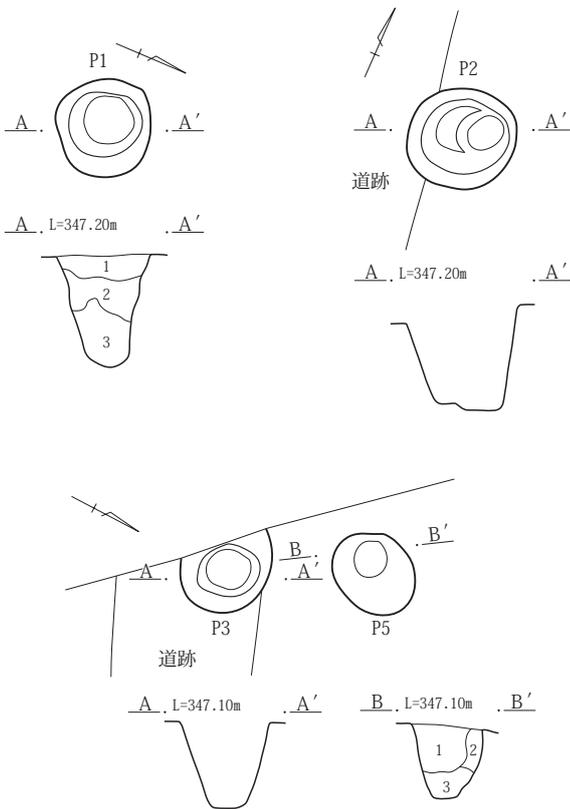
215cm、P3～P5：78cmである。各ピットの埋没土層断面中に柱痕を確認することはできなかったが、P1～P3の間隔がほぼ1間を基調としていることから、掘立柱建物の可能性もある。尚、出土遺物は2号の埋没土中から須恵器坏類の小破片4点が確認された他は皆無であり、帰属時期を判定するのは困難だが、埋没土の性状が前述の竈穴住居とも近似していることを考慮すれば、古代に比定できる可能性が高い。

第7表 ピットの規模一覧

番号	位置	時期	平面形	規模(cm)			備考
				長径	短径	深さ	
1	H-10	平安時代	円形	52	50	60	
2	H-9	平安時代	円形	58	54	56	
3	G-9	平安時代	円形	-	-	45	
5	G-9	平安時代	円形	50	40	39	



第26図 3号住居出土遺物



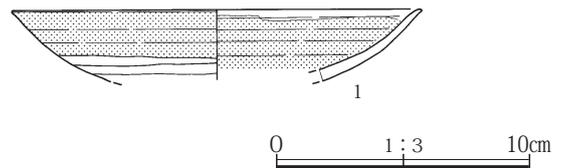
[各ピットの埋没土層]

- 1 黒色土。Hr-FPを中量含む締まりのある土。
- 2 暗褐色土。Hr-FPを多量に含む締まりの少ない土。
- 3 黒色土。Hr-FPやHr-FAを中量含むやや粘性のある土。

第27図 1～3・5号ピット

(3)遺構外の出土遺物

重機による表土掘削後、Ⅲ層の榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)上面において遺構確認作業中に、攪乱層内から灰釉陶器の皿破片1点を確認した。



第28図 遺構外の出土遺物

4. 古墳時代の遺構と遺物

層位的には、6世紀の第2四半期に噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)の純堆積層である層厚約20cm前後のⅢ層直下面と、同第1四半期に噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)の層厚5cm前後のⅤ層直下面とが、古墳時代の生活面として把握することができる。前者は文化層第2面に該当し、Ⅳ層上面にて放牧地と想定される道路遺構2条と馬蹄痕を確認したが、便宜的に文化層第3面と仮称した後者では、精査にもかかわらず何ら人為的な遺構・遺物を確認することはできなかった。このことは、火砕流を伴うHr-FAの火山噴火時には、当遺跡では集落形成や馬の放牧等を含めた文化的活動がなされていなかったことを示唆している。

(1) 馬蹄痕

調査区の南半部のF～H-7～12グリッドにて、95個の馬蹄痕を確認した。正確な計測値を採取していないが、幅10cm前後の蹄痕が主体的に認められる。また、F～G-8～9グリッドとG-11グリッドの2地点では、一対の円形状前蹄痕と楕円形状後蹄痕が相互に重複しつつ、約1.5m前後の等間隔で直線的に走行している状況が確認できる。これらは、基本的に単体馬の連続した走行により形成されたものと考えられる。一方、2号道路遺構の北側では馬蹄痕が確認されていないが、このことが同区域への馬の侵入がなかったことを意味しない。前項の道路遺構で述べたように、この道路自体が馬の歩行や走行により形成された可能性が高いことや、2号道路遺構の周縁部には馬の侵入を防止する柵などの痕跡が認められないからである。当然のことながら、Hr-FPの降下時よりも若干遡る馬蹄痕については、風化・消失して確認できない可能性が高く、また降下直前であっても裸地状態でなければ馬蹄が痕跡として残存しない。他の遺跡で確認されているように、ススキやネザサなどの草本類が地面を覆っていたことによる要因を考慮すべきだろう。いずれにしても、当遺跡が馬の放牧地として利用されていたことを示すものであり、赤城山麓においては初例となる。今後、周辺遺跡での調査によっても確認される可能性があり、古墳時代における馬飼育の規模や実態を解

明する上で重要な資料となる。

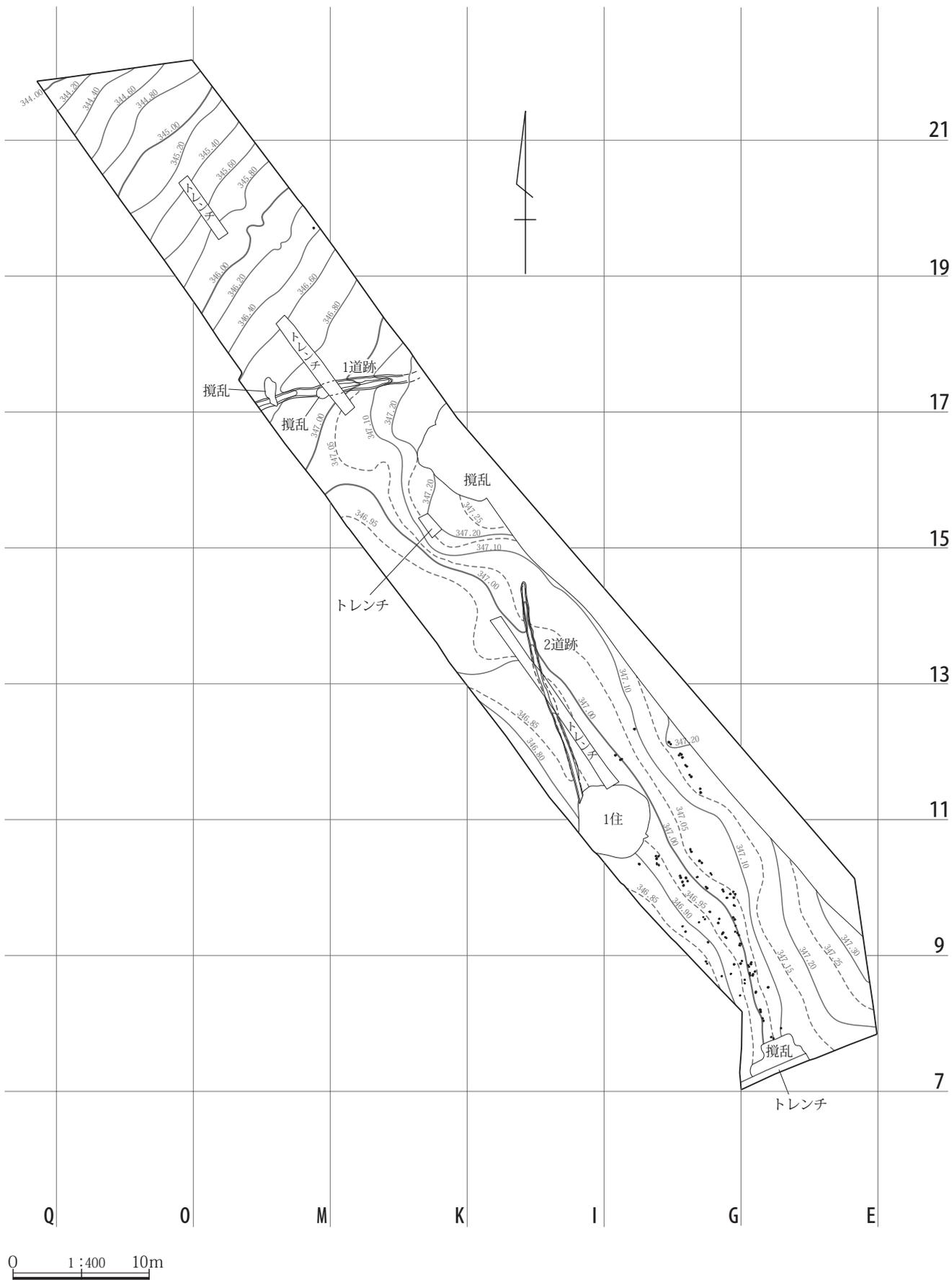
ところでこうした馬蹄痕については、前述の白井遺跡群や吹屋犬子塚遺跡で正確な計測値採取と統計処理がなされ、幅10.6～11.0cmの馬蹄痕が最多を占めている事実を基に、蹄と体高との相関性から体高125～135cmの中形馬が推定されている。当遺跡の馬蹄痕もこの範疇に入ることから、同様の中形馬が飼育されていた可能性が高いだろう。

尚、北半部の斜面部を中心に比高差5～10cmの円形や楕円形の小さな凹凸が無数に認められると共に、炭化物や焼土等の痕跡は不明瞭なもの煤ばけたような黒色面がほぼ全面にわたって観察できる。先の白井遺跡群や吹屋犬子塚遺跡でも同様の痕跡を確認しており、ここではススキ等の植物が卓越する草原的な植生が、Hr-FPにより埋没・腐食したり焼き払われたりしたことにより形成されたと考えられている。当遺跡においても、類似した状況が存在したことを示唆するものだろう。

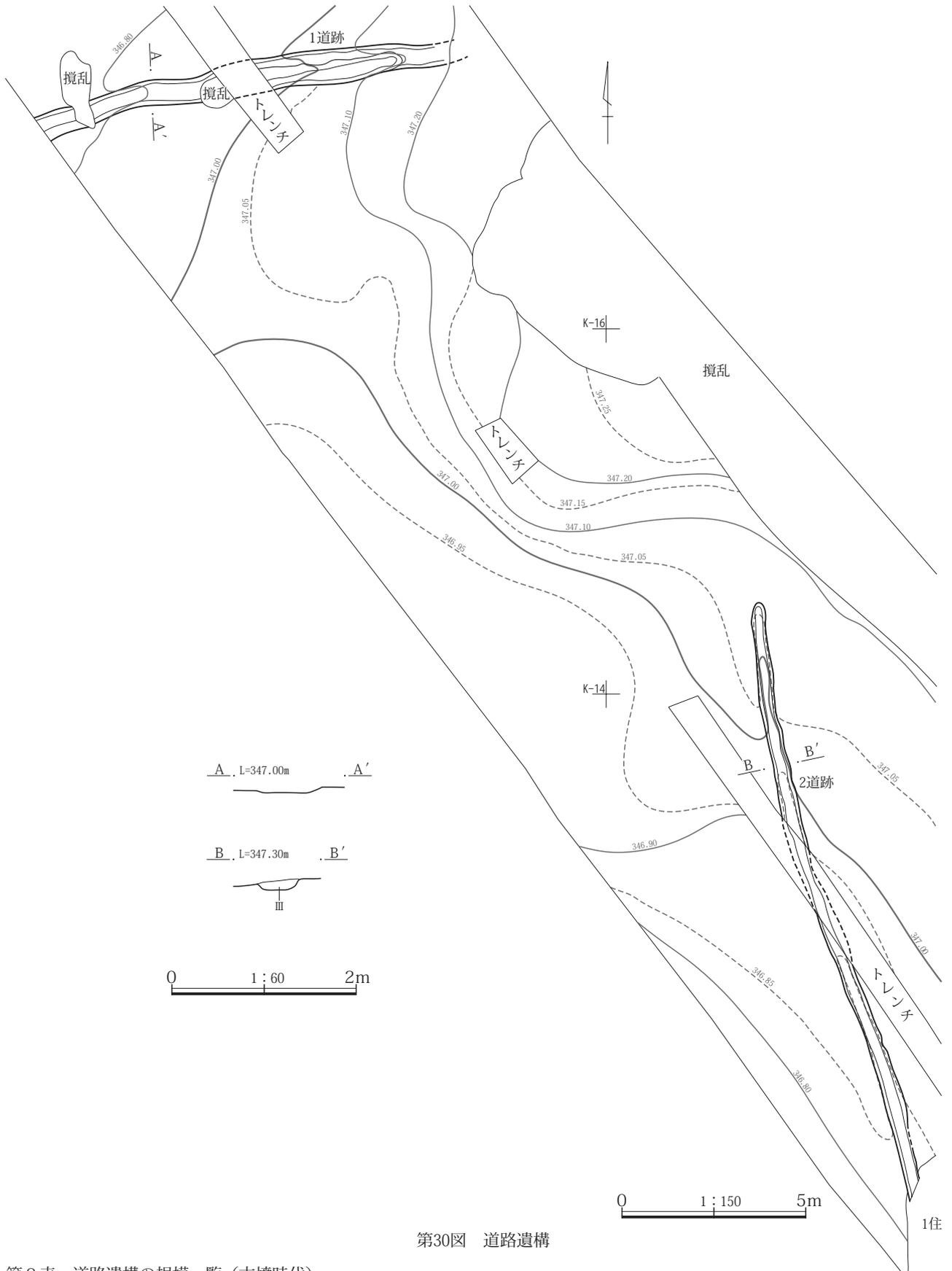
(2) 道路遺構

上位のⅢ層(Hr-FP)を掘削・除去したⅣ層の黒褐色土上面において、1号と2号の2条を確認した。後世の土壌攪乱によるⅢ層の残存不良地点では、その走行が途切れている箇所も認められるが、調査区のほぼ中央部において1号は東西方向に、2号は南北方向に各々直線的に走行し、相互にその走向が約90度ずれている。底面は極めて堅緻に踏み固められ、周辺部との比高差が2～8cmで浅く逆台形状に窪んでいる。また、その規模については1号が幅58cm～96cm、延長11m、2号が幅34～56cm、延長17mを測る。いずれからも出土遺物はなく、2号は南端部を平安時代の1号竪穴住居により切られている。

こうしたHr-FP直下の小規模道路遺構については、利根川対岸の旧子持村白井遺跡群や吹屋犬子塚遺跡などでも確認され、そこでは道路遺構の両側を中心にして馬蹄痕が多数確認されていることから、その主体的形成要因については畜舎と放牧地を往来する馬によって形成されたことが明らかにされている。当遺跡では、こうした馬蹄痕と道路遺構との関連性が明確には確認されていないが、その規模・形状等から見て、同様の成因を想定することが可能だろう。



第29図 古墳時代の遺構配置



第30図 道路遺構

第8表 道路遺構の規模一覧 (古墳時代)

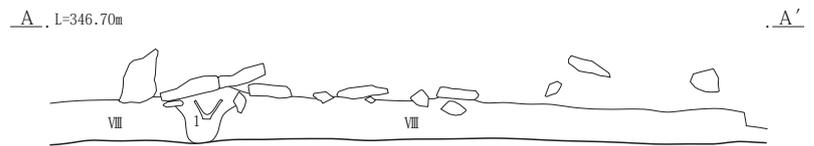
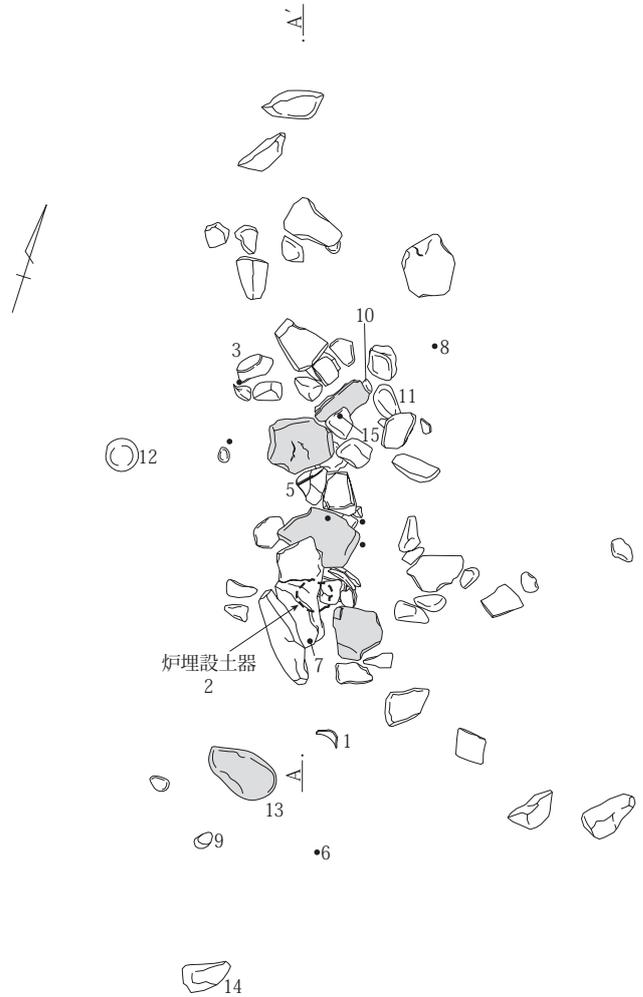
番号	位置	時期	規模		走向方位	備考
			幅(cm)	長(m)		
1	K-17	古墳時代	58 ~ 96	11.00	N80度E	
2	I-11	古墳時代	34 ~ 56	16.80	N12度W	

5. 縄文時代の遺構と遺物

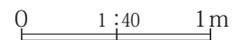
前述の古墳時代のように、層位的に同一文化面を確認できる訳ではなく、Ⅵ層下部からⅧ層にかけての堆積土中において確認された、遺構・遺物の総体を文化層第4面として把握した。縄文土器の大別時期で見れば、中期末葉の敷石住居1軒、前期～中期の土坑10基、集石・配石各1基などの遺構と、早期～後期にかけての土器破片1,606点と石器類294点などが確認された。これらの遺構分布は、敷石住居と土坑が調査区南半部のH～J-10～12グリッドに集中し、配石と集石が北端部にまとまっている。早期～後期の包含層出土土器は、中・後期が遺構の近縁に分布する傾向を持つが、量的に多数を占める前期は調査区の全域に散在している。前期を主体とした包含層遺物の出土状況から見て、調査区外に竪穴住居による同期集落の存在が想定されるが、後述するように38・42号土坑等はその一部を構成するものだろう。また、中期末葉の1号敷石住居と37・39・41・43号土坑とは同一時期であり、共に当該期に特徴的な小規模集落を構成する遺構として把握することができる。一方、これらとは形成地点が異なる1号集石と1号配石については、後述するように早期に比定される可能性が高い。

(1) 敷石住居

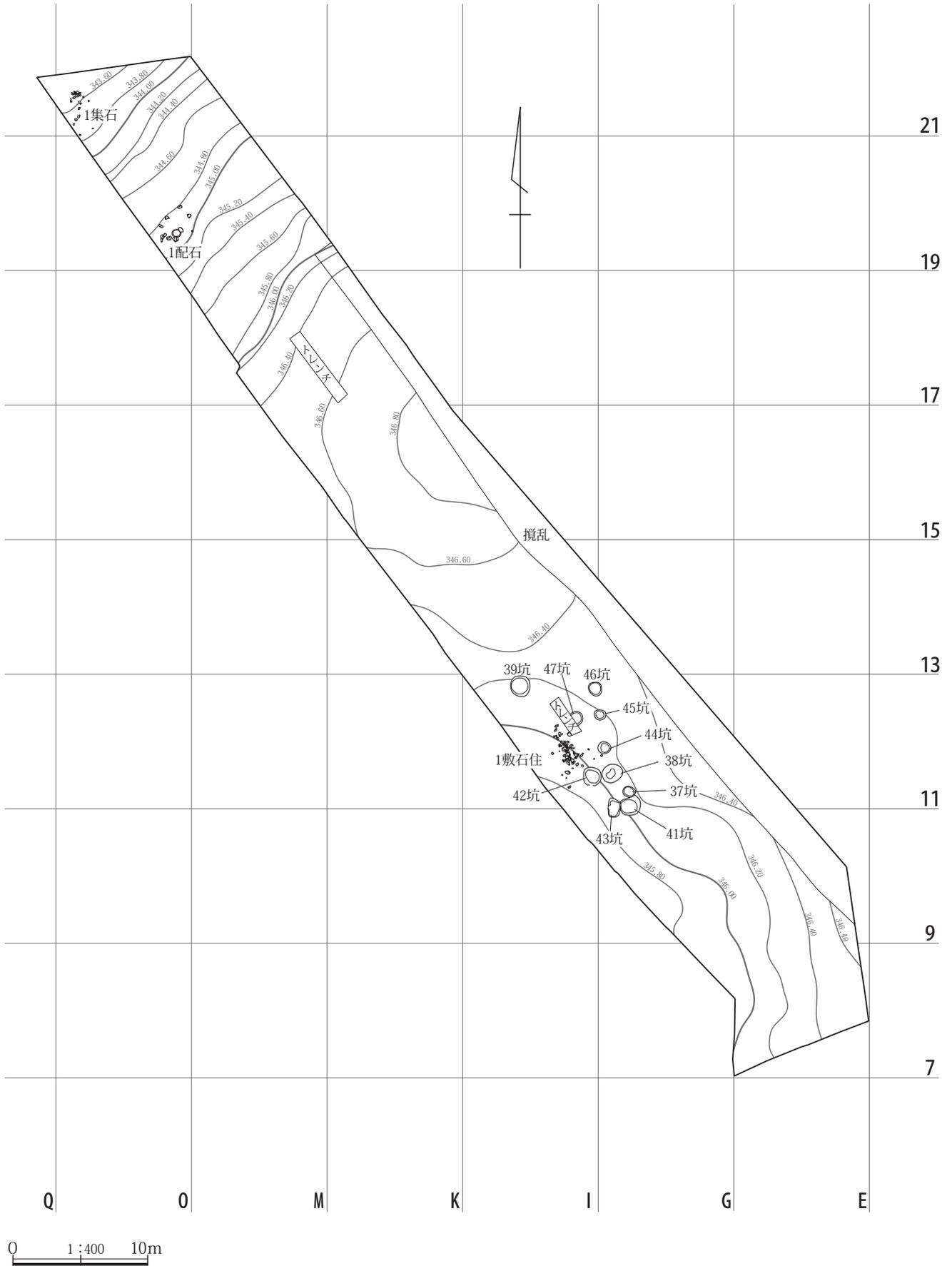
淡色黒ボク土のⅦ層上位において、最大径10～55cmの垂角礫を主体とする石材66点が、幅2.8m×長さ3.8mの範囲に集中して出土した。当地域の敷石住居に通有の柄鏡形を意識した石材配置が認められない点で認定要件を欠くが、石材間に土器埋設炉(第31図2)が存在することや、石鏃・磨り石・石皿などの実用的石器と丸石・多孔石などの呪術的石器が伴出していることを考慮し、柄鏡形敷石住居が後世の土壌攪乱を受けてその一部が残存したものと判断した。当該住居の名称としては、「柄鏡形敷石住居」とすることもできるが、実体としての形状を確認できなかったことから、便宜的に敷石住居と呼称しておきたい。



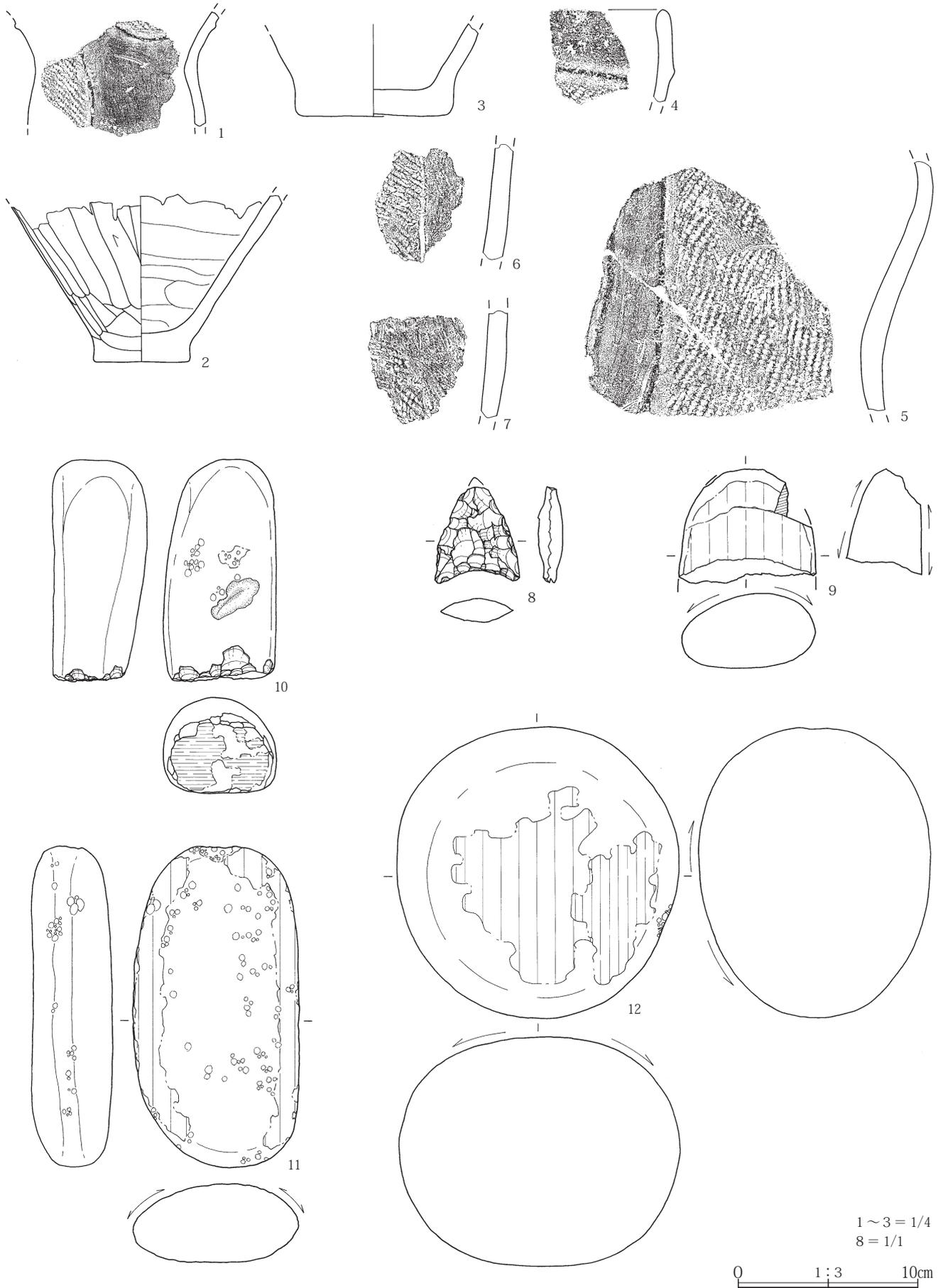
1 黒色土。黒ボク的な色調であり、微量の軽石粒(As-Sr?)を含むやや粘性のある土。



第31図 1号敷石住居



第32図 縄文時代の遺構配置



第33図 1号敷石住居出土遺物(1)

●1号敷石住居(第31・33・34図、PL.16・17・25・26)

位置 I-11グリッド

方位 不明 面積 不明

重複 無し

形状 柄鏡形敷石住居と想定される。板状節理を持つ石材や河床礫(4点)は少ないが、扁平な礫面を持つ石材が多い。

規模 不明

床面 前述したように、土壌攪乱により原位置を留め

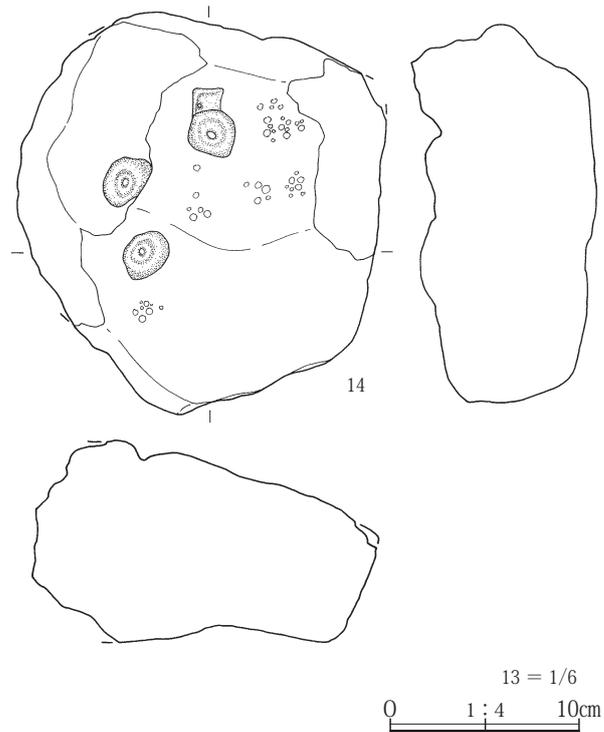
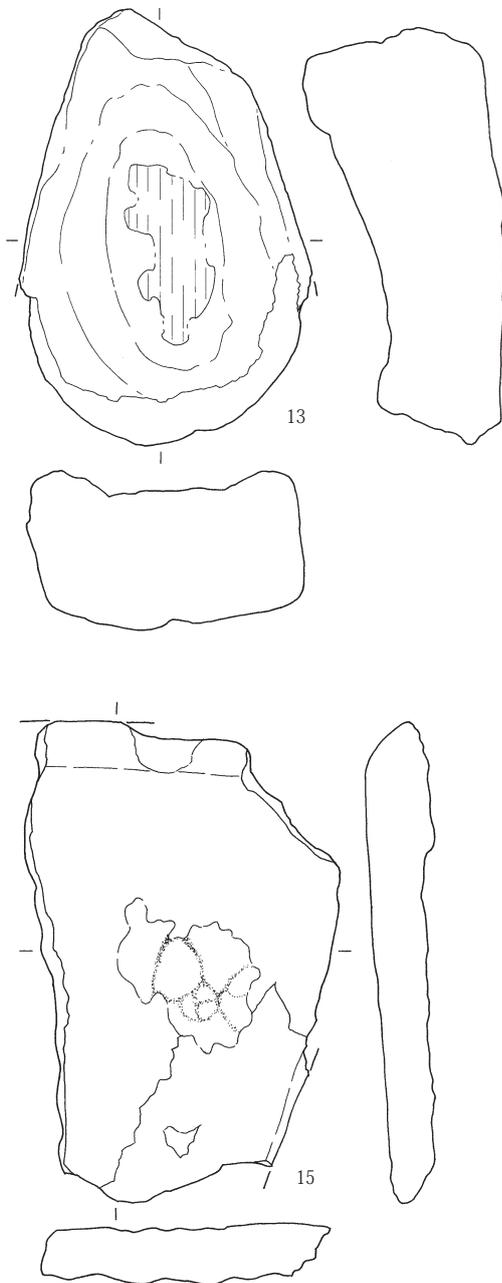
ている石材自体が少なく、床面の構築状況を確認することができない。ただし、断面図A-A'で見ると土器埋設炉の北側15cmに近接する長径40cm×短径28cm×厚さ6cmの扁平礫や、さらにその北側20~80cmに位置する長径30cm×短径20cm大の2個の扁平礫を連結したラインは、ほぼ水平面を形成しており、原位置を留めている可能性が高い。

柱穴 石材の分布域やその周辺部を精査したが、確認できなかった。掘り込み深度が浅いことによる識別の困難さも想定され、その有無については確定できない。

炉 上半部を欠失した深鉢形土器を埋設している。炉の周辺に長径20~40cm大の被熱礫5点が認められるが、これが炉を構成した石材なのか、あるいは不慮の火災や廃屋儀礼に伴う火入れ行為等により被熱したものか否かは不明である。直径25cm×深さ18cmの掘り方を持ち、軽石粒を少量含む暗褐色土により埋填されている。

埋没土 調査において、Ⅶ層中で竪穴状の掘り込みプランを確認することができず、個々の石材を確認することにより全体把握を優先したため、埋没土の状態を確認できなかった。

遺物 当住居に伴出すると判断された遺物は、破片を含む土器19点、石器類14点である。土器はいずれも加曾利E4式であり、石器では石鏃1点、磨石2点、スタン



第34図 1号敷石住居出土遺物(2)

ブ形石器・石皿・台石・多孔石・丸石が各1点、剥片6点などがある。第33・34図に主な遺物を掲載したが、土器埋設炉周辺の床面標高を基準に各遺物の出土状況を見れば、2～4・12を除いた他の全てが床面密着遺物として把握できる。ただし、10のスタンプ形石器については床面よりも下位から出土しており、混入の可能性もある。前述したように、2は炉内の埋設土器である。

所見 構築当初の原位置を留めた石材が僅少なため、その全形を想定することは困難だが、当地域における敷石住居は例外なく柄鏡形を呈することから、柄鏡形敷石住居と把握して問題ないだろう。帰属時期は炉内の埋設土器や床面直上出土の土器などから、中期末葉の加曽利E4式期に比定される。

(2)土坑

H～J-10～12グリッドにかけて10基を確認したが、その規模等については第9表に一括してある。各土坑の確認に当たっては、37・39号を除く38・41～47号について地山と埋没土との識別が可能なローム漸移層のⅧ層上面にて行ったため、結果的に土坑自体の掘削深度が20～61cmと浅いものが主体を占める。37・39号の場合は、Ⅶ層中位から掘り込んでいると想定されるケースだが、同坑をⅧ層上面で確認したと仮定した場合に比べて、開口部の直径および掘削深度で各々約30cmほど加算された規模となる。従って、これを基本として各土坑規模にも適用した場合、おのずとその掘削深度も50～80cm程度と見なすことが可能である。

各土坑の形態は、楕円形状の43号を除き、若干不整形の土坑もあるが全て円形を基本としている。埋没土の状況は、いずれも黒褐色土を主体としてレンズ状の自然埋没を示しており、人為的な埋め戻し行為を窺わせるケースは存在しない。

第9表 土坑の規模一覧（縄文時代）

番号	位置	時期	平面形	規模(cm)			備考
				長径	短径	深さ	
37	H-11	加曽利E4式期	円形	93	80	92	41坑を切る
38	H-11	二ツ木式期	円形	156	130	45	
39	J-12	加曽利E4式期	円形	152	140	88	
41	H-10	加曽利E4式期	円形	155	128	49	37・43坑に切られる
42	H-11	諸磯c式期	円形	(130)	128	61	
43	H-10	加曽利E4式期	楕円形	138	88	56	41坑を切る
44	H-11	不明	円形	93	88	22	
45	H-12	不明	円形	87	74	24	
46	H-12	不明	円形	104	96	22	
47	I-12	不明	円形	102	(70)	20	

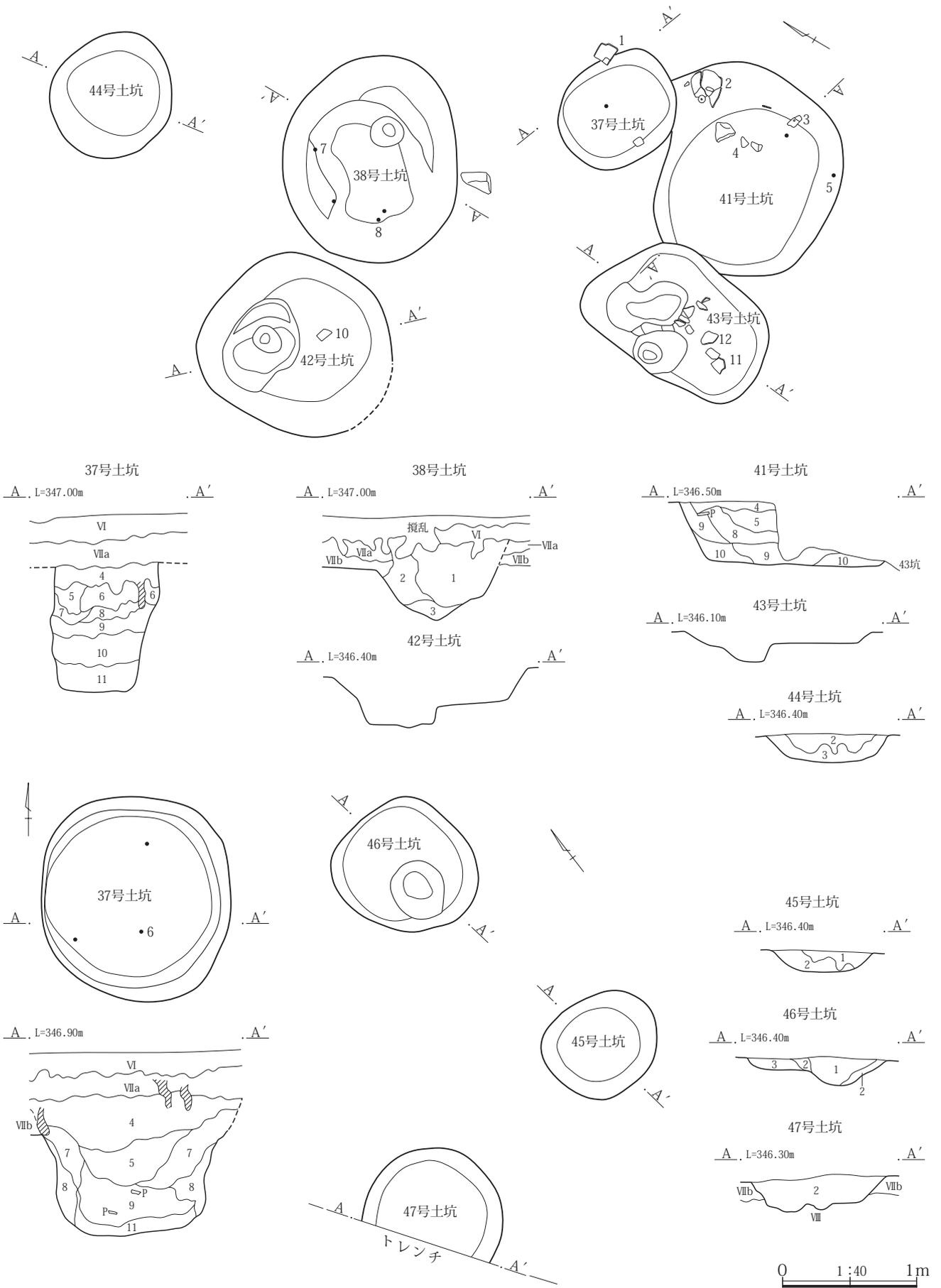
出土遺物については、第36図に示したように37～39・41～43号土坑から土器片を主体に少量確認されている。時期的には、前期の二ツ木式土器が38・41・43号土坑から、諸磯c式土器が42号土坑から、中期の加曽利E4式土器が37・39・41・43号土坑から確認されている。いずれも埋没土の上位から中位にかけて出土しており、各土坑の時期的帰属を確定させることはできないが、38号は二ツ木式期、42号は諸磯c式、37・39・41・43号は加曽利E4式期の可能性が高い。また、第36図1の土器は37号と1号敷石住居から出土した破片同士が接合し、しかも43号出土の12と同一個体である。同様に、2は41号と43号の出土破片が接合している。さらに、二ツ木式土器の41号4と38号8・9は同一個体であり、前述を含めて各遺構の併存関係を考える上で留意する必要があるだろう。

これらの土坑分布を1号敷石住居を中心に観察すると、その北側から東側の3～4mに近接して分布する状況が看取できる。前期の可能性のある38・42号を除いて、加曽利E4式土器を出土している37・39・41・43号は、1号敷石住居との併存関係を想定して良いだろう。また、各土坑が自然埋没していることから、住居の周縁に貯蔵穴が存在する状況を想定できる。

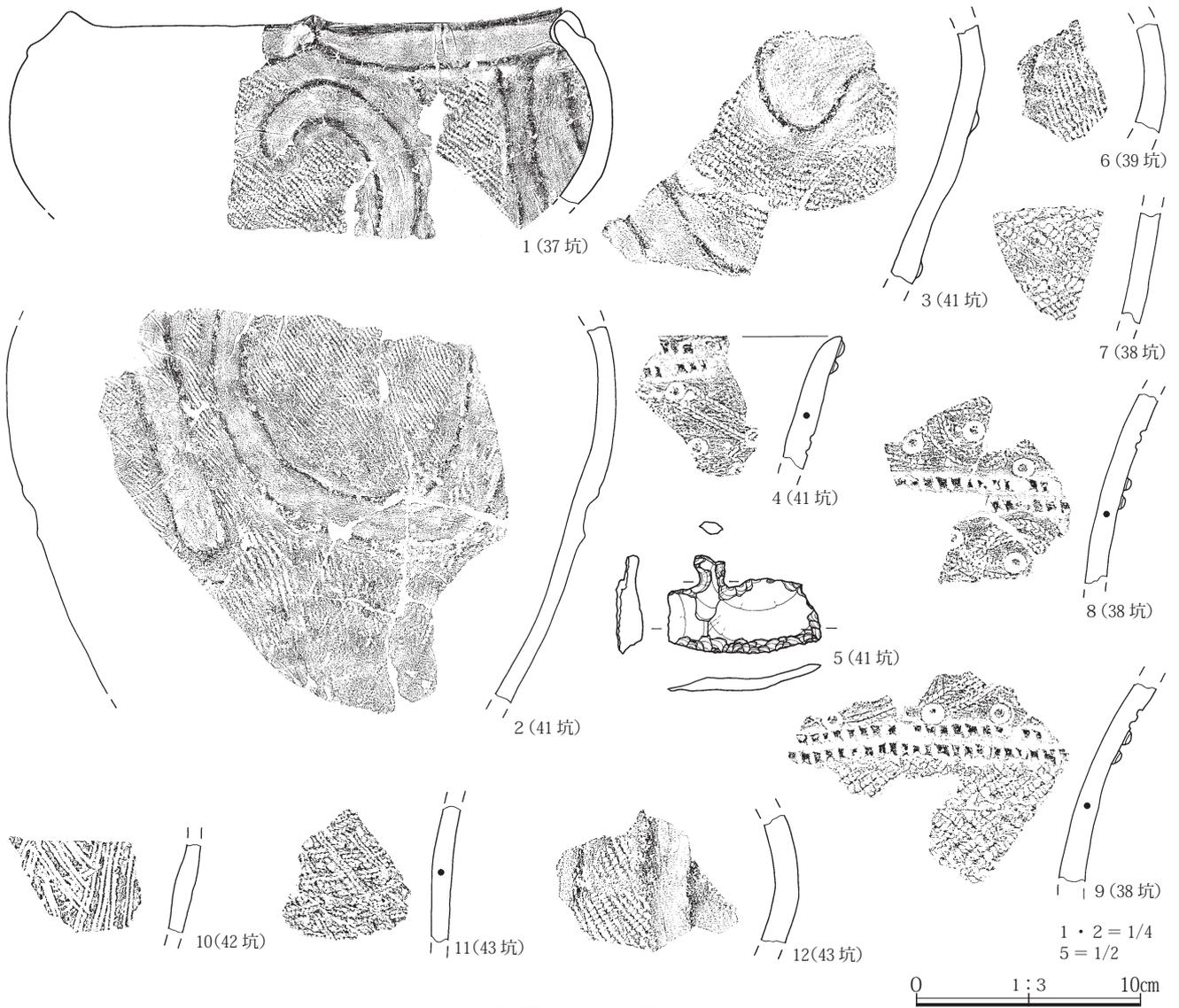
尚、各土坑内の埋没土については、相互に類似した様相が認められることから、その観察内容を下記の通り類型・統一化して記載した。

【縄文時代土坑の埋没土層】

- 1 黒色土。Ⅶa層に近似するがより色調が暗い。微量の軽石粒を含む。
- 2 黒褐色土。色調はⅦa層に類似。締まりの強い土。
- 3 鈍い黄褐色土。Ⅶb層に近似するが、締まりの強い土。
- 4 黒褐色土。浅間白糸軽石(As-Sr)やローム粒子を少量含むやや締まりのある土。
- 5 黒褐色土。As-Srを中量含むやや締まりのある土。
- 6 As-Srブロックを主体に黒褐色土を少量含む。
- 7 鈍い黄褐色土。As-Srを微量に含む。
- 8 黒褐色土と黄褐色土との混土層。As-Srとローム粒子を含む。
- 9 1層に類似した黒褐色土。As-Srやローム粒子を中量含む締まりのある土。
- 10 黒色土。As-Srやローム粒子を少量含むやや締まりのある土。
- 11 ロームブロックと黒褐色土との混土層。締まりの強い土。



第35図 土坑(縄文時代)



第36図 土坑出土遺物

(3)配石遺構

調査区北端部のO-19グリッドにおいて、1基を確認した。遺物包含層の調査過程で、VIIIb層の鈍い黄褐色土を掘り下げている最中に粗粒輝石安山岩の礫面を確認したが、これに関わる竪穴状の掘り込みプランは確認できなかった。従って、当遺構はVIIIb層内に構築された可能性が高い。遺構内容は、長径約40cm×短径30cm×厚さ10cm前後の板状節理を持つ大形垂角礫8個を用材にして、幅1.5m×長さ3mの範囲に弧状に配置している。石材個々の配置に規則性は認め難いが、その礫平坦面はほぼ水平に揃えられている。各礫表面には被熱等の痕跡は見られず、またこれに伴う土器や石器などの出土遺物が皆無であるため、当配石の機能・性格についても判然とし

ない。尚、直径70cm×深さ10cmの掘り鉢状の凹みが、中央部の礫底面下から確認されているが、これが配石遺構に伴うのか否かは不明である。

当配石遺構の構築時期については、出土遺物が皆無のために確定できないが、確認層位がVIIIb層内であることを重視すれば、縄文時代草創期～早期の可能性がある。遺物包含層の出土遺物を見ると、早期の沈線文系や条痕文系の土器が認められることから、当該期に比定される可能性もある。

(4)集石遺構

調査区最北端のP-21グリッドにおいて、1基を確認した。先の配石遺構と同様に、遺物包含層の調査過程において、VIIIb層の掘削最中に密集した粗粒輝石安山岩の

亜角礫を確認した。各礫面の確認作業が優先したため、土坑状の掘り込みプランの有無については不明である。この遺構内容は、長径80cm×短径60cmの範囲に長径10～30cm大の亜角礫10個が積み上げられるように密集し、各礫の表面には被熱による赤変と煤状炭化物の付着が認められる。またこの周縁には同程度の被熱した亜角礫11個が存在しており、当集石を構成していた用材が散乱したものと推定される。尚、当遺構の機能・性格については、従来から言われているように石蒸し調理施設と考えられる。

出土遺物は、礫集中部に近接して土器の小破片3点が確認されているが、型式判定が困難なため、帰属時期は確定できない。ただし、当集石の確認層位がⅧb層であることから、配石遺構と同様に早期に帰属する可能性が高い。

(5) 包含層の出土遺物

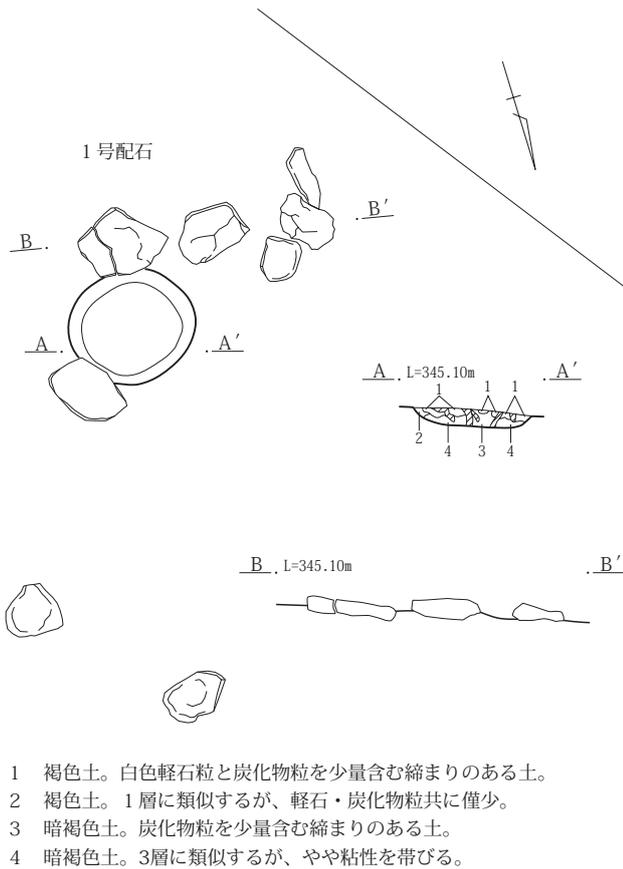
A. 出土状況

調査対象面積1,464㎡の範囲に、縄文時代早期後半～後期前半の遺物包含層が存在する。この包含層は、層厚15～25cmのⅦ層(淡色黒ボク土)と、層厚20～50cmのⅧ層(暗褐色土・ローム漸移層)の二層にわたるが、遺物と出土層位との有意な関係は認められず、各層ともに前期を中心とする遺物が混在している状況であった。また内容的に、土器はいずれも大小の破片であり、完形・準完形品は見当たらない。出土遺物の内容や数量については、51頁や59頁の一覧表に掲載してあるが、総点数で見ると土器1,606点(重量28.9kg)、剥片や礫核石器を含む石器294点(56.9kg)がある。これらの中で特徴的なものを抽出し、土器185点、石器類27点を第47・48図に掲載した。

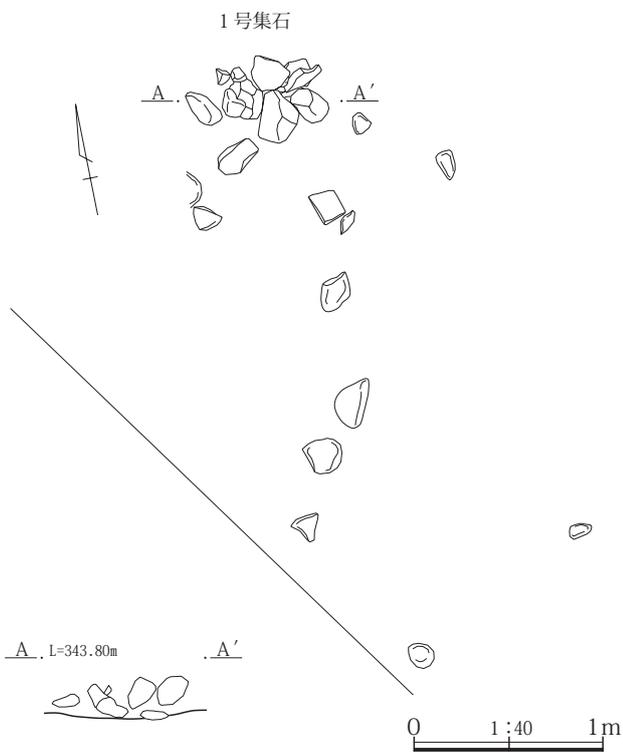
B. 土器

出土土器の大別時期毎の内訳は、早期74点(4%)、前期1,262点(79%)、中期81点(5%)、後期62点(4%)、時期不明127点(8%)である。時期不明を除いた総点数に占める比率は、前期が最多数を占めており、当地域における遺跡立地傾向と符合している点は注目される。各時期の内容を細別型式単位に、その分布状況も含めて概観してみよう。

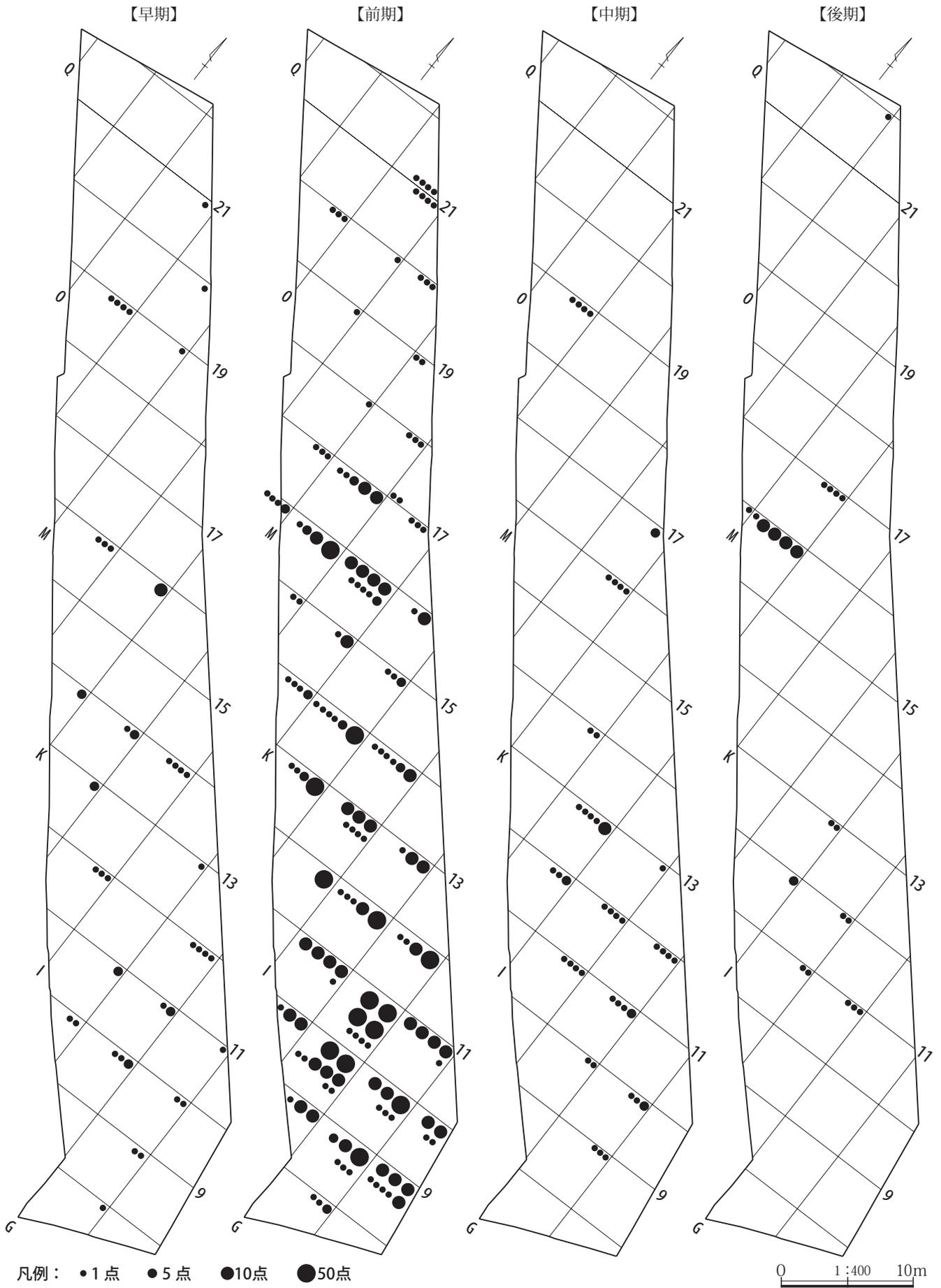
先ず早期は、沈線文系土器が22点、条痕文系土器が15点、撚糸文系が2点、無文が35点であるが、調査区南半



- 1 褐色土。白色軽石粒と炭化物粒を少量含む締まりのある土。
- 2 褐色土。1層に類似するが、軽石・炭化物粒共に僅少。
- 3 暗褐色土。炭化物粒を少量含む締まりのある土。
- 4 暗褐色土。3層に類似するが、やや粘性を帯びる。



第37図 配石・集石遺構



第38図 包含層出土土器の時期別分布

部のG～K-10～15グリッドにかけて比較的集中した分布が認められる。

前期では、二ツ木式800点、関山式11点、諸磯a式27点、諸磯b式85点、諸磯c式57点、浮島式8点、十三菩提式87点、同期末葉の縄文施文土器187点などがある。花積下層式や有尾式などが欠落するが、かなり連続的な型式組成から見ると、当地点を反復的に繰り返し利用する活動状況が窺える。最多数を占める二ツ木式は調査区全域に分布するが、その密度には濃淡があり、密集する地点としてはE～H-8～11グリッドがある。また、J-13やK-15グリッドなどは、スポット的に密度が高い。こうした密集地点には土坑が占地し、この北側または南側の未調査区域に竪穴住居の存在が想定されるが、これらの土器は基本的にその周縁に捨てられた生活廃棄物的な様相を示すものだろう。基本的には、各型式とも調査区南半部に分布の中心域があり、斜面地の北半部は希薄となる傾向にある。

中期では、五領ヶ台式7点、勝坂式1点、加曾利E3式11点、同E4式62点、不明15点などがある。加曾利E4式の分布状況は、敷石住居1軒と土坑8基が占地するH～J-10～12グリッド周辺にまとまる傾向にあるが、量的に乏しく、居住や活動期間の短さを窺わせる。

後期については前半段階に限定され、堀之内1式47点、同2式15点が存在するのみである。各期に帰属する明確な遺構がなく、量的にも極めて僅少であるが、堀之内1式はL-15グリッドに集中分布しており、他期とは異なる占地状況を示している。

以下、各細別型式ごとにその概要を記載する。

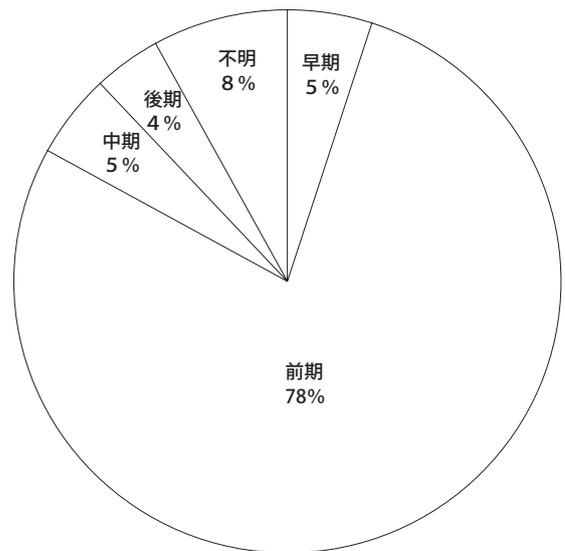
a. 早期の土器

沈線文系土器(第40図1～14、PL.26) 総数22点が存在するが、ここでは三戸式・田戸下層式の土器片を掲載した。半截竹管工具や篋状工具による鋸歯状や横位平行

状の沈線文が複数段に構成される。各土器の胎土は、石英・白色安山岩の礫・粗細砂を少量含むが、長石や輝石の有無によりA・Bタイプに分かれる。

条痕文系土器(第40図15～18、PL.26) 総数15点が確認されている。基本的に内外面に条痕文を施しているが、16～18は内面風化により不明瞭であるために図示していない。条痕文の施文原体は、多截竹管あるいは比較的細かい絡条体の可能性が高い。胎土は、15を除いていずれも中量の石英・輝石・白色安山岩の粗・細砂と少量の繊維を含有するCタイプである。

無文土器(第40図19、PL.26・27) 総数35点が確認されているが、いずれも小破片であるために全体的な文様構成が不明なものを含んでいる。19は胴下半部の無文破片であり、上半部を含めて無文か否か不明。全体的な研磨・整形の状態や胎土等から判断すると、時期的には沈線文系土器に併行すると考えられる。



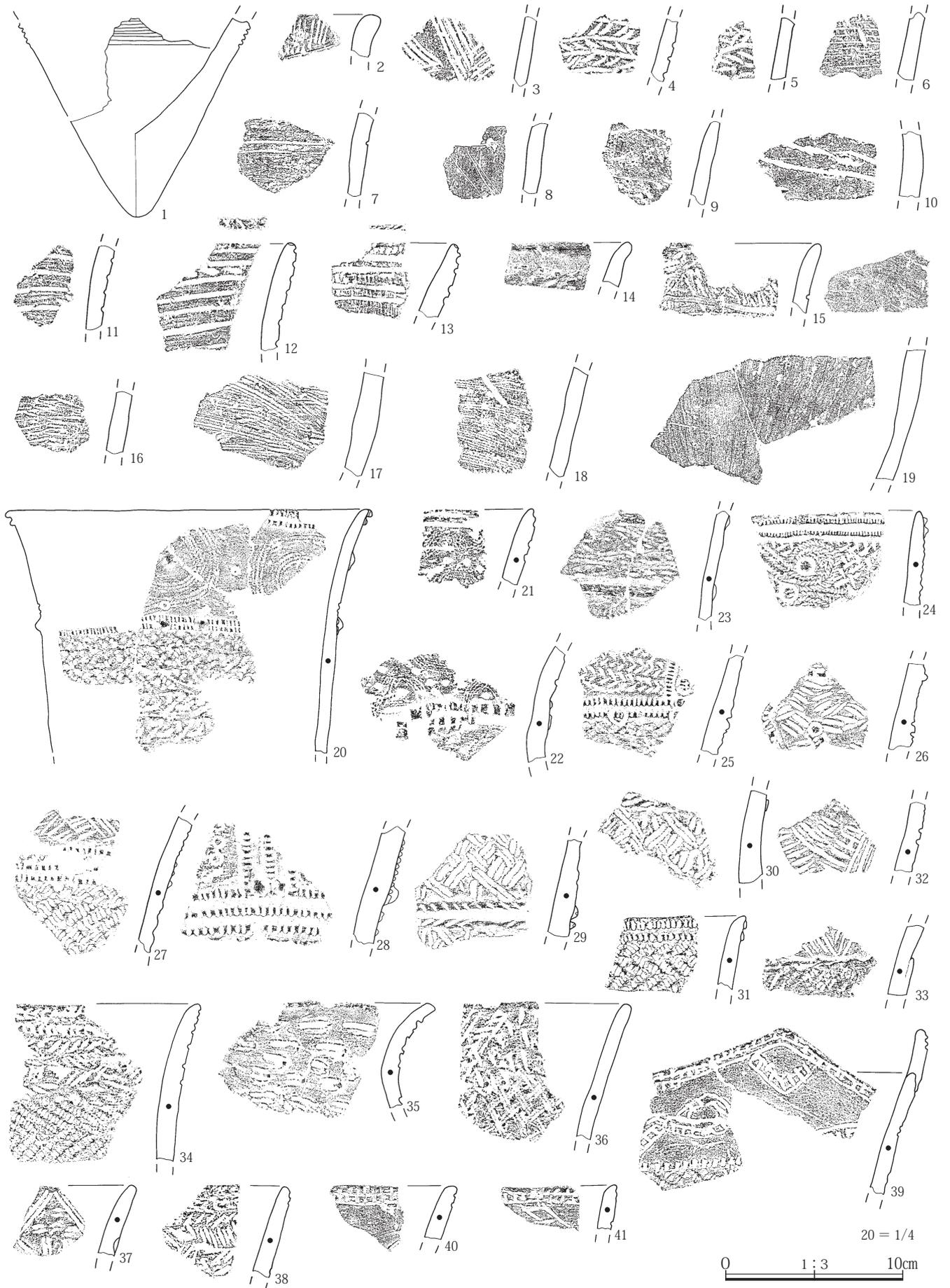
第39図 包含層出土土器の時期別数量

第10表 包含層出土土器の数量一覧

	早 期					前 期							
	稲荷台	三戸	沈線文	条痕文	無文	二ツ木	関山	諸磯a	諸磯b	諸磯c	十三菩提	前期末縄文	浮島
点数	2	9	13	15	35	800	11	27	85	57	87	187	8
重量g	20	385	155	275	485	13,955	125	515	1,475	745	2,555	2,470	210

	中 期				後 期		不明
	五領ヶ台	勝坂	加E3	加E4	堀之内1	堀之内2	
点数	7	1	11	62	47	15	127
重量g	165	95	345	2,220	1,640	195	870

	早期	前期	中期	後期	不明
点数	74	1,262	81	62	127



第40図 包含層出土土器(1)

b. 前期の土器

二ツ木式(第40・41図20～33・48～63、PL.27) 総数800点が確認されている。口唇下と胴括れ部に2～3本の横位刻目細隆帯を施すのを基本とし、その区画内にL・R縄一對の原体側面圧痕による渦巻状モチーフや円形竹管文・貼付文を施す一群(20～24)と、細竹管状工具による羽状構成の連続刺突文を多段に施すもの(25)や、同工具による刻み目状の連続刺突文を鋸歯状に施すもの(26・27・32・33)等がある。60を除いた48～63は胴下半部破片で、原体長15mm前後の0段多条RLとLRを交互に横位施文するものが多いが、閉端環付縄文や格子目状の絡状体を施す29・30・62・63のようなやや特異なものも少数認められる。胎土は、少量の石英・長石や中量の白色安山岩の礫・粗細砂および繊維を含むDタイプが主体を占める。

関山式(第40・41図34～47・65～75、PL.27・28) 総数11点が確認されている。口唇下に半截竹管による連続爪形文を2条巡らせ、その下に尖頭の棒状工具による羽状刻目文的な連続刺突文を施すもの(34・38)や、梯子状沈線によるV字状や蕨手状・平行状の文様を施すもの(39～41)、半截竹管による横位の連続爪形文を施すもの(42～44)等が主体を占めている。65～75は、胴部破片または縄文のみが施文されたものだが、71～74のように0段多条のRLとLR縄文を交互に横位施文するものが主体的で、菱形状の縄文構成も若干認められる。また、65・66のようにLR縄文を横位施文後に、L縄を2本1組にした原体側面圧痕を追施文するものもある。胎土は、二ツ木式と同様にDタイプが主体的である。

諸磯a式(第42図77～80、PL.28) 総数27点が確認されている。文様が判読できるのは76のみで、刻目を施した細隆帯により三角形のモチーフを描き、円形竹管文を施す。他は、比較的節の細かいRL縄文を横位に施文する。胎土は、石英・長石・白色安山岩の礫・粗細砂を少量含む比較的緻密なBタイプが主体を占める。

諸磯b式(第42図81～98、PL.28) 総数85点が確認されている。浮線文を横位に巡らせるもの(83～85)や、連続爪形文により変形木葉文を構成するもの(86・87)、複数本単位の半截竹管の平行沈線文により鋸歯状や横・斜位に文様構成するもの(89～98)等がある。地文の縄文は、沈線文の上書きにより不明瞭なケースも認められ

るが、RL縄文を横位施文するものが多い。胎土は、諸磯a式と同様にBタイプが主体的である。

諸磯c式(第42図99～111・159、PL.28) 総数57点が確認されている。複数本単位の半截竹管の平行沈線により、横・縦・斜位の集合沈線文を構成し、口縁部を中心に耳状やボタン状の貼付文を施す。胎土は、諸磯a・b式と同様にBタイプが主体を占める。

十三菩提式(第42～44図112～121・153～158・162、PL.28・29) 総数87点が確認されている。結節浮線文を縦・横位に貼付して文様構成する一群(112～113・115・117)と、半截竹管の平行沈線により重層的な鋸歯状文を複数段に施す一群(118～121)、細隆線により文様構成する一群(114・162)、それに器面全体に縄文を施し、大振りのボタン状貼付文や波状文を施す一群(152～158)がある。この縄文施文土器は、155・156のようにRLとLR縄文を横位多段に施文するものが目立つ。117の密集した結節浮線文を、併行沈線文により描出した116のような土器もある。胎土は、諸磯式と同様にBタイプが多数を占める。

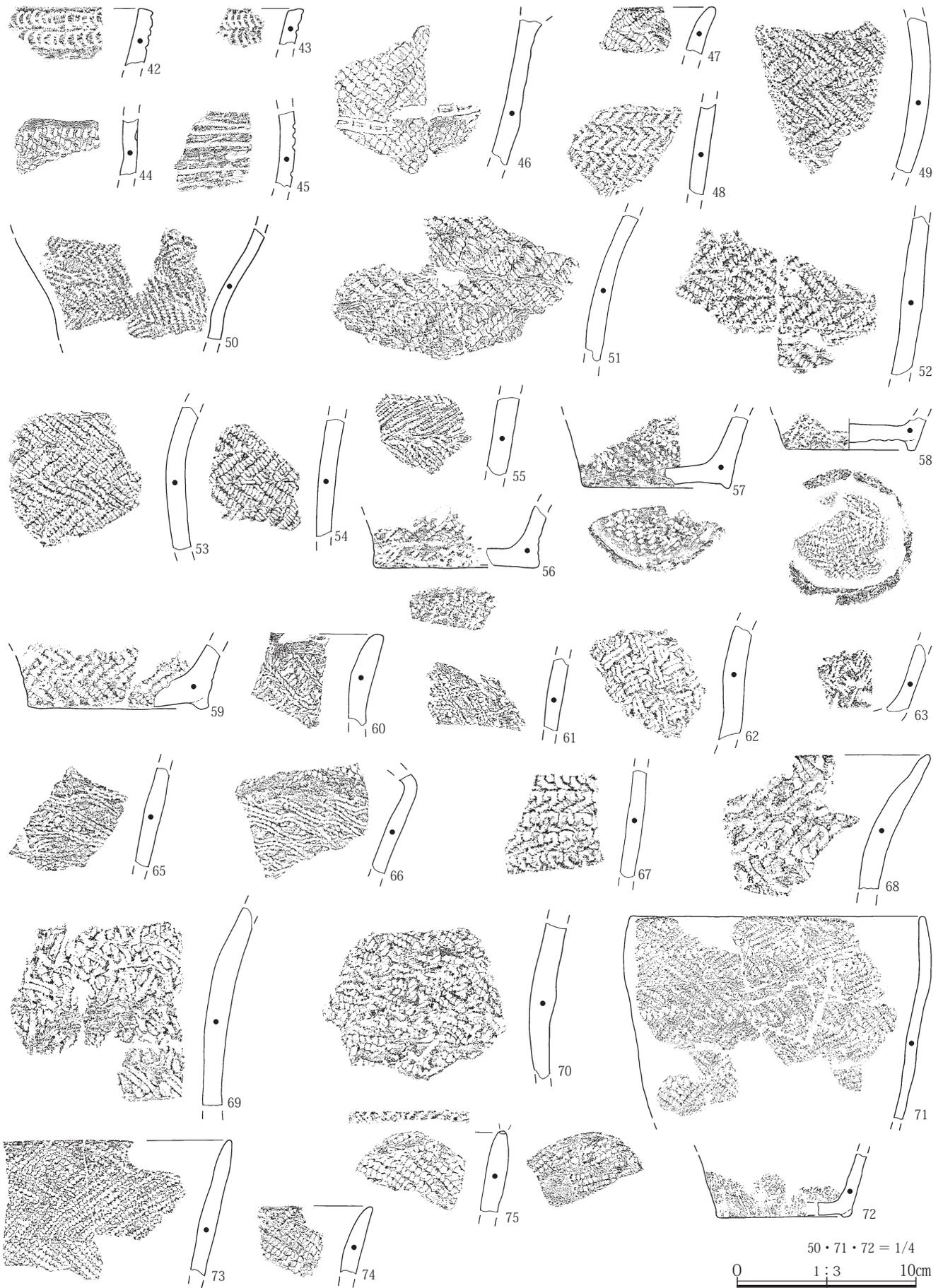
浮島式(第44図160～161、PL.29) 総数8点が確認されている。背面が緩い曲線を描く篋状工具を用いて、斜位方向からの連続的刺突により器面が捲れ上がるような文様を全面に施す。胎土は雲母を含む特徴的なGタイプであり、他の型式にはほとんど認められない点で、注目される。

前期末葉縄文施文土器(第43図122～152、PL.28・29)

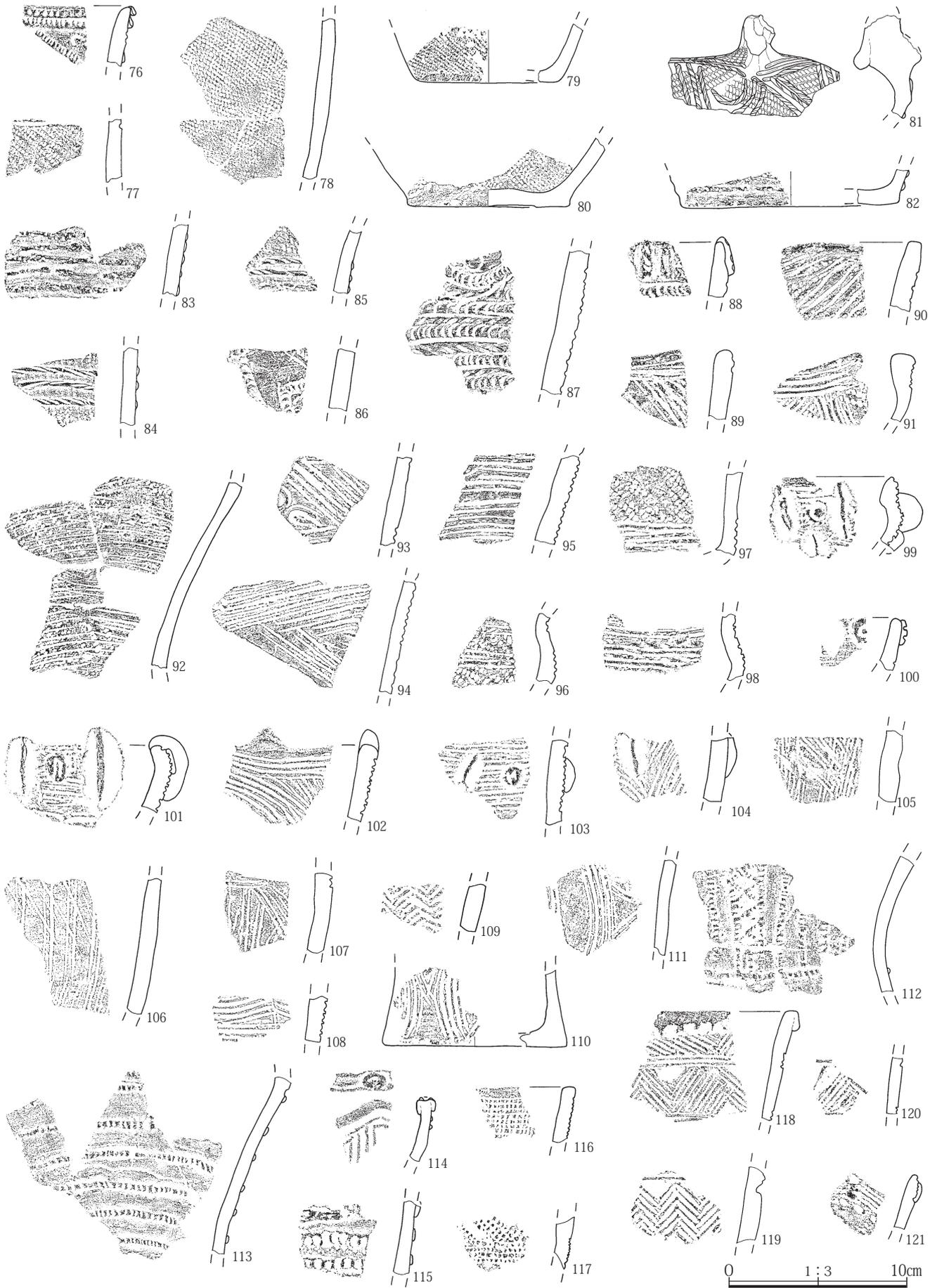
諸磯c式や十三菩提式に併行すると想定される縄文施文土器を一括したが、総数187点が確認されている。RLまたはLRの一種類の縄文を横位多段に施文する一群(122～135)と、RLとLR縄文を交互に横位多段に施文する一群(136～152)がある。後者の一群は、十三菩提式の縄文施文土器とも共通性を有しており、同式に比定される可能性がある。胎土は、諸磯式や十三菩提式と同様にBタイプが主体を占めるが、135のように雲母・石英・長石の粗・細砂を含むGタイプも僅かに認められる。

c. 中期の土器

五領ヶ台式(第44図163～165、PL.29) 総数7点が確認されている。163は外側に肥厚する口唇下に弧状の沈線文を施し、164は半截竹管による鋸歯状の集合沈線文



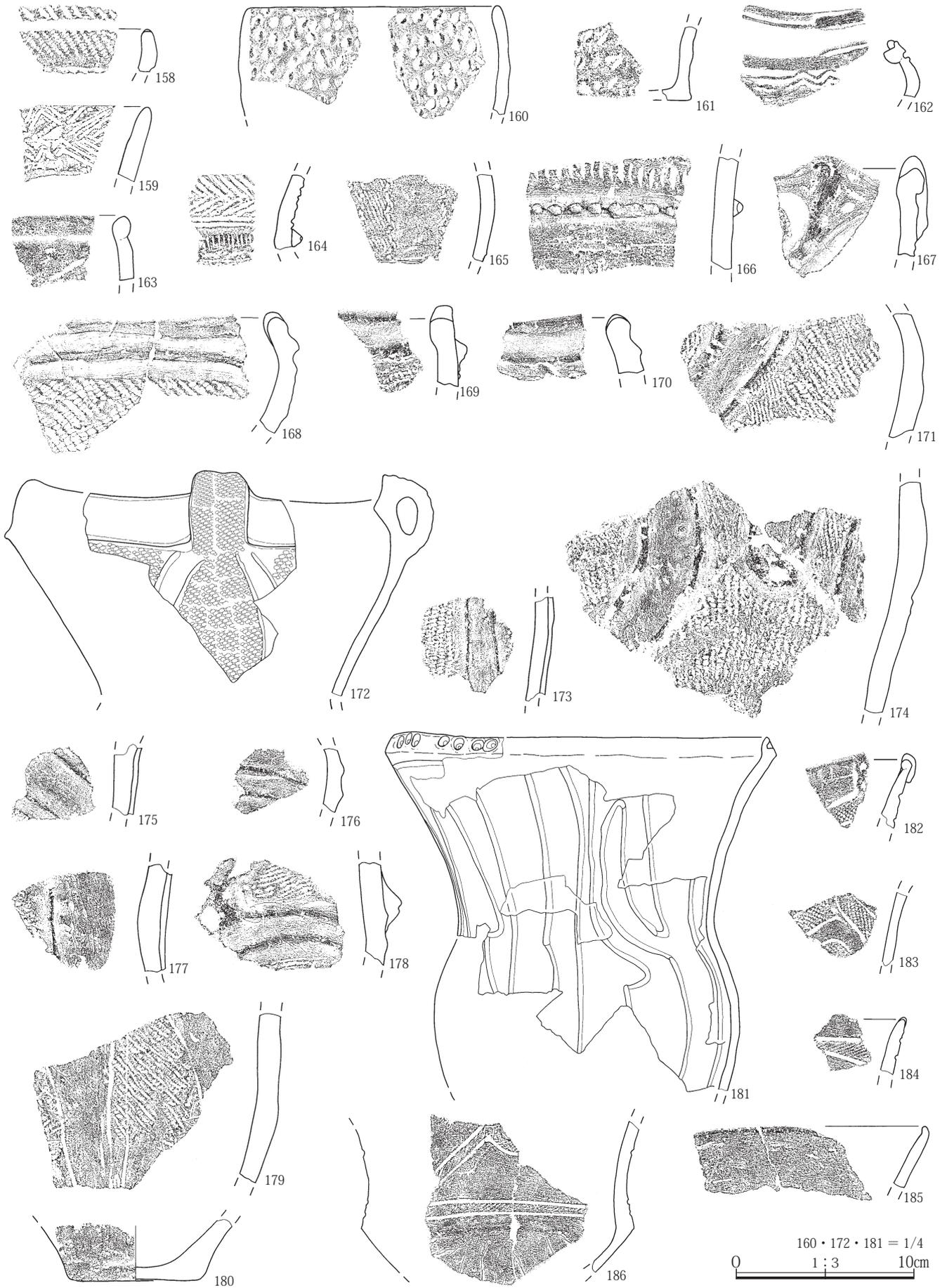
第41図 包含層出土土器(2)



第42図 包含層出土土器(3)



第43図 包含層出土土器(4)



第44図 包含層出土土器(5)

を施す。165は綾線状の結節縄文を縦位に施文する。胎土は雲母を含む特徴的なGタイプである。

勝坂式(第44図166、PL.29) 総数1点のみが確認されている。166は篋状工具による連続爪形文や刻目隆帯文を横位に施す。胎土は、少量の石英・長石・白色安山の粗細砂を含むHタイプで、他型式には全く見られない。

加曾利E3式(第44図167～168、PL.29) 総数11点が確認されている。キャリパー形の深鉢で、口縁部に幅広沈線や隆帯による区画文を施す。胎土は、少量の石英・長石と中量の白色安山岩の礫・粗細砂を含むIタイプである。

加曾利E4式(第44図169～180、PL.29) 総数62点が確認されている。キャリパー形の深鉢で、単沈線や微隆起帯により、V・U字状および渦巻状の区画文を施し、その内部に縄文を充填する。縄文はLRが主体を占め、RLは少ない。胎土は、加曾利E3式と同様にIタイプである。

d. 後期の土器

堀之内1式(第44図181、PL.29) 総数47点が確認されている。181は、丸棒状工具によりJ・Y字状の区画文を縦位に施し、外削ぎ状の口唇部外端には推定4単位に部分的な刺突文を施す。胎土は、加曾利E3・E4式と同様にIタイプである。

堀之内2式(第44図182～186、PL.29) 総数15点が確認されている。器形は、口縁がラッパ状に開く深鉢(182～185)と胴部中位でく字状に屈折する鉢(186)の2形態がみとめられる。文様は、単沈線により三角形や渦巻状の区画文を描出し、区画内に細かい縄文を充填する。胎土は、加曾利E3・E4式と同様のIタイプである。

C. 石器

出土した石器294点の剥片を除いた器種別内訳は、削器類が20点と最も多く、次いで磨石15点、石鏃・石匙が各4点、打製石斧3点、凹石・敲石・多孔石が各2点、楔形石器・三角錐形石器・磨製石斧・石皿が各1点の順となる。また、先の剥片類は171点で、他に石核5点があり、遺跡内に石材を持ち込んでの石器製作が行われたことを窺うことができる。

使用石材では、削器・石斧などの「打製系列」の石器には黒色頁岩が多用され、全体の83%を占めている。またそれらの石核や剥片に占める黒色頁岩の比率も94%と高

比率を有しており、「打製系列」における同石材の優位性が際立っている。また石鏃の場合、石材傾向を見るにはサンプル数が過少だが、ちなみに黒曜石が2点、黒色頁岩とチャートが各1点となる。

磨石・凹石・敲石・石皿等の「使用痕系列」の石器には、当遺跡近隣の河床に産出する粗粒輝石安山岩が60%と多用されており、「打製系列」の石材選択とは明確な差異を有している。

「複合技術系列」の中で、機能系列は磨製石斧が1点存在するのみだが、変玄武岩を用材とする点は当地域の縄文時代遺跡に認められる通有の傾向といえる。各器種の分布状況については、第46図のドットマップを参照されたいが、大半のものが前期・中期の遺構や土器の分布と重複しており、それらとの関係性が想定できる。特に、点数的に多い削器類・磨石類・剥片などは広範囲に分布するが、共にF～L-9～15グリッドなどの調査区南半部での密集状態が類似している。また、石核も類似した分布域を形成しており、前述のような石器製作が行われたことを示すものだろう。

以下、石器系列ごとに各器種の概要を既述する。

a. 打製系列

石鏃(第47図187～190、PL.30) 総数4点が確認されている。形態別では、基部が逆U字状に挟まれる所謂鍬形鏃(187)、逆V字状に挟まれる凹基無茎鏃(188)、僅かに挟まれる凹基無茎鏃(189)、平基有茎鏃(190)等がある。出土点数が少ないため、各形態ごとの傾向把握は困難だが、長さ18～30mm、基部幅16～21mm、重量0.6～1.7gと相互に若干の差異がある。石材は、黒曜石が2点、珪質頁岩と黒色頁岩が各1点である。各鏃の帰属時期については、1の鍬形鏃は早期の押型文土器段階に特徴的な形態であり、2の凹基無茎鏃は前期、4の有茎鏃は後期段階と推定される。

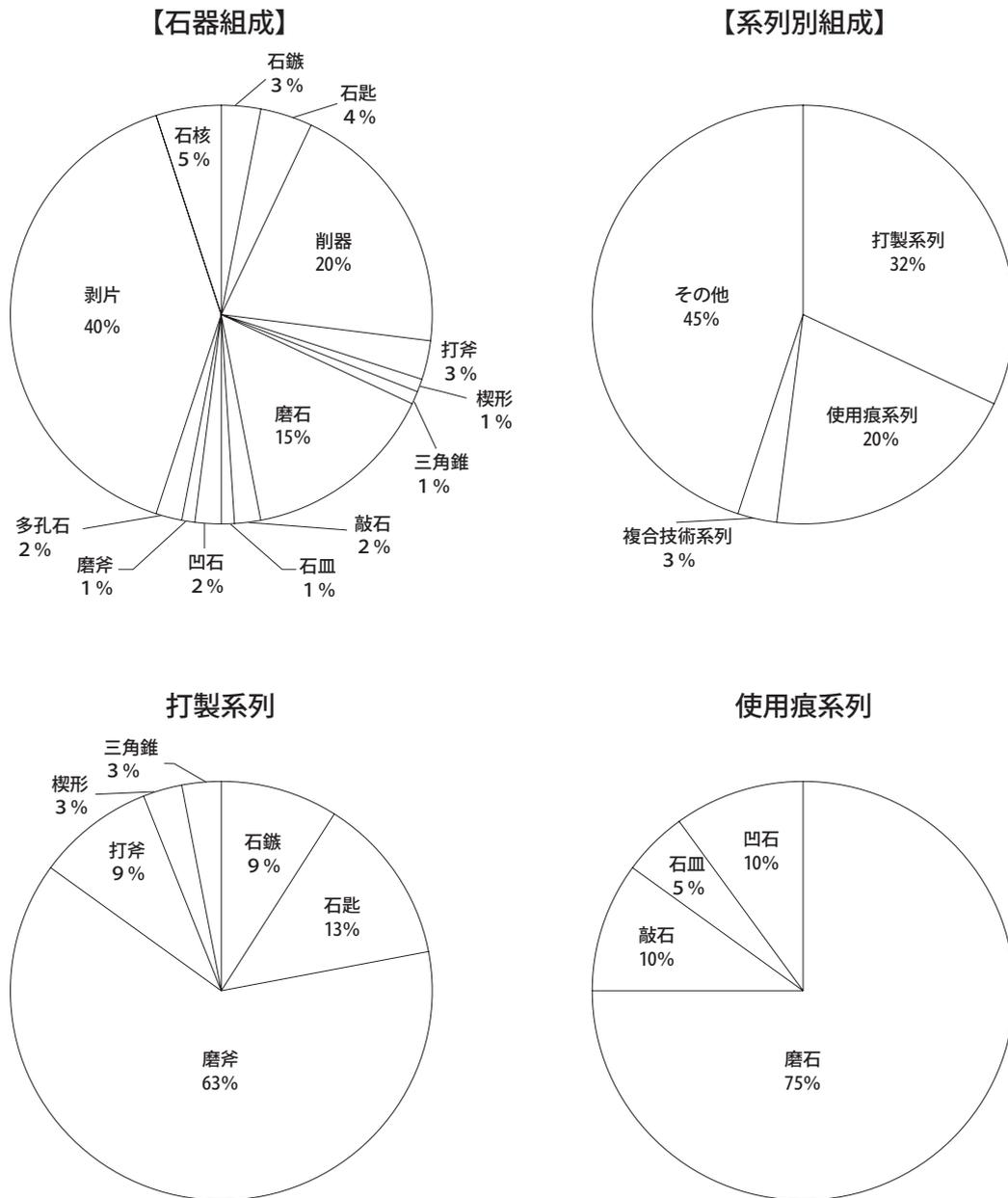
楔形石器(第47図191、PL.30) 1点のみが確認されている。対向する上下両端に、階段状の微小な剥離痕が認められる。石材はチャートだが、打製系列の他器種には使用されていない。石核や剥片類の中に同石材が存在しないことを重視すれば、他所から当遺跡内に搬入された可能性もある。

石匙(第47図192～194、PL.30) 総数4点が確認されている。全て横型であり、横長の楕円形状の剥片を素材

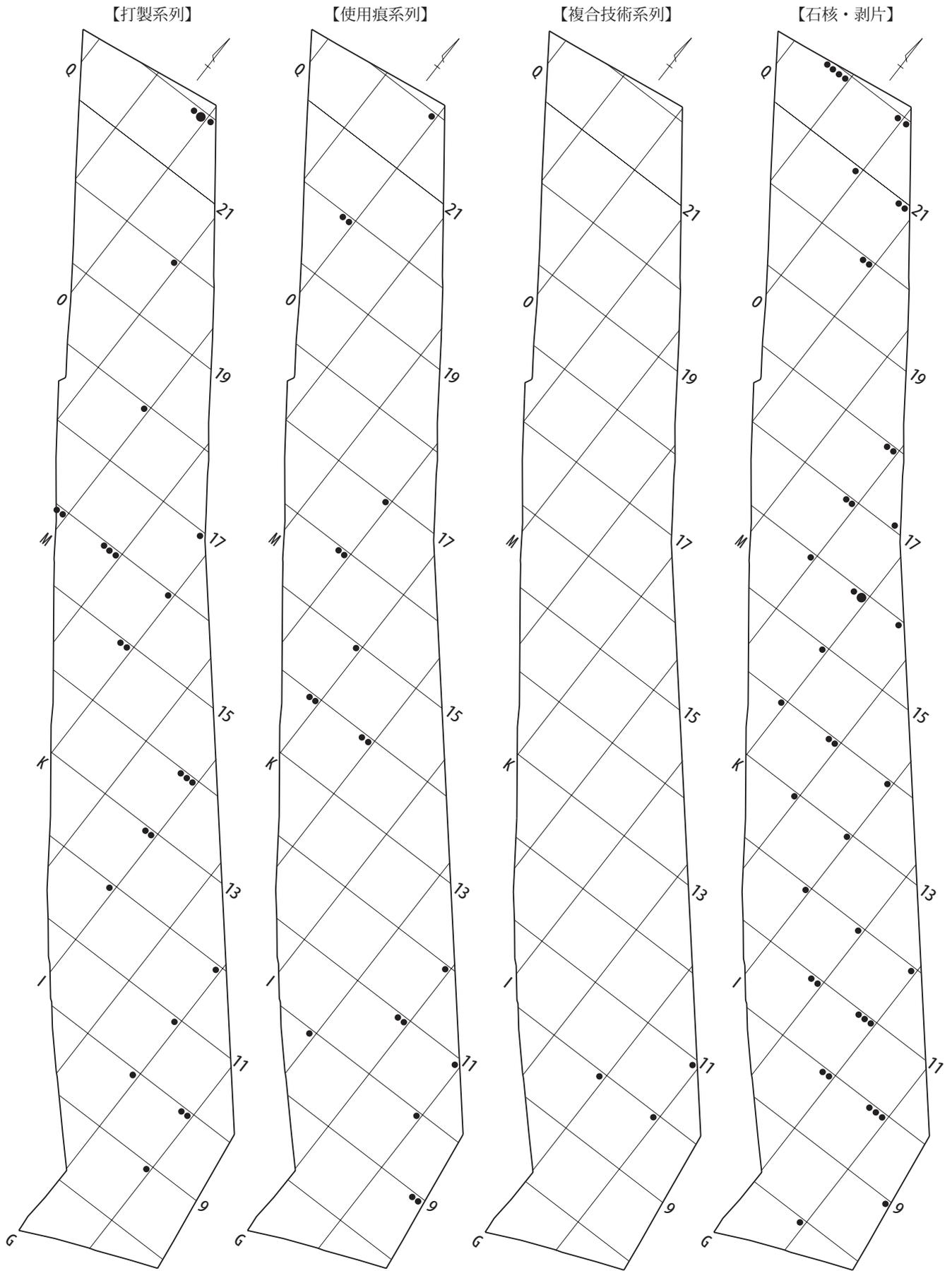
第 11 表 包含層出土石器の器種別数・重量一覧

	打製系列						使用痕系列				複合技術系列		その他	
	石鏃	石匙	削器	打斧	楔形	三角錐	磨石	敲石	石皿	凹石	磨斧	多孔石	剥片	石核
点数	3	4	20	3	1	1	15	2	1	2	1	2	41	5
重量 g	5.4	114.0	2,516	183	22.7	417	5,726	941	22,900	765	52	5,167	1,565	2,320

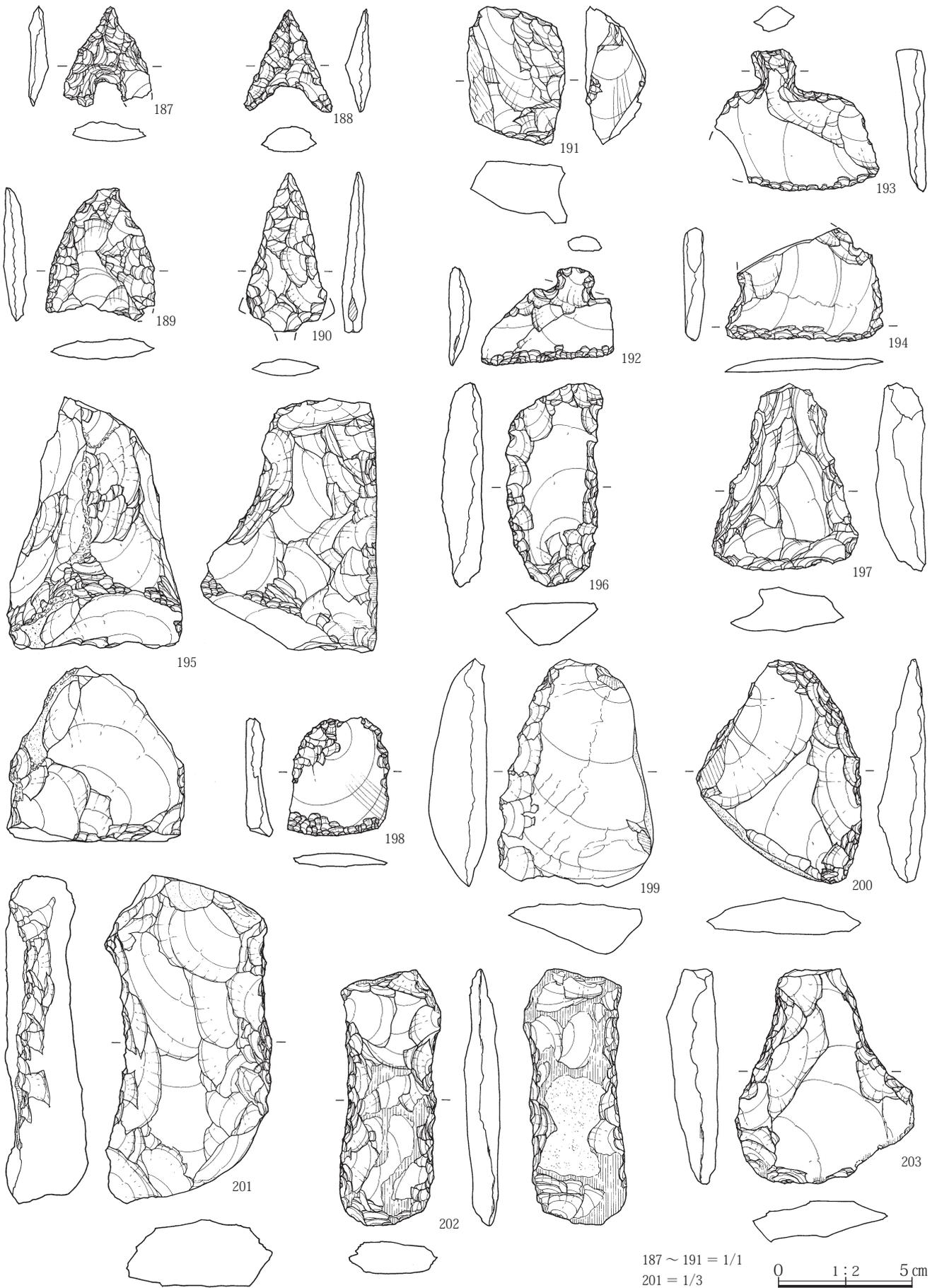
	打製系列	使用痕系列	複合技術系列	その他
数量合計	32	20	3	46



第45図 包含層出土石器の器種・系列別組成



第46図 包含層出土石器の系列別分布



第47図 包含層出土石器(1)

として、その形状をあまり改変することなく、やや粗い押圧剥離により刃部を作出する。摘み部は、体部中央からやや左右に偏在するのが特徴的である。石材はいずれも石核や剥片類でも最多数を占める黒色頁岩を使用しており、打製系列の同石材を主体とする剥片剥離工程や素材剥片作出工程とも密接な関連性を窺うことができる。

三角錐形石器(第47図195、PL.30) 1点のみが確認されている。底面は一辺約7cmの三角形状を呈し、体長は上端部を欠損するために10cm弱とやや短い。背面に原礫面を残し、底面の一部に顕著な磨耗痕が認められるが、その大半は機能部再生によると考えられる剥離により削除されている。これまでの研究(石坂・岩崎1988)によって、当該石器の機能部が底面にあることが判明しており、フラット面を利用した磨・敲くなどの機能と、背面との鋭角部を利用した搔くなどの機能が想定される。いわば、磨石と搔器的な機能を併せ持つと言えるが、後者の機能は背面と底面との角度が約60度前後のものに限定される。石材は、黒色頁岩を使用している。時期的には、早期の稲荷台式を中心とした燃糸文系土器群に伴うと考えられる。

削器(第47図196～201、PL.30) 総数20点が確認されている。不定形の横長剥片や縦長剥片を用材として、その縁辺部に粗雑な刃部加工を施すものと、刃こぼれ状の使用痕を有する二者があるが、ここでは前者の代表的な事例を掲載した。各器種を通じて最も点数が多く、縦長剥片を利用する頻度が高い。こうした剥片形状と機能部位の関係については、正確な分類・分析をしていないが、およそ横長剥片は下縁部を、また縦長剥片は両側縁部を利用するケースが目立つ。平均的な大きさは、長さ7cm×幅5cm×厚さ2cmで、重量は61gを測る。石材は、黒色頁岩が90%と最多数を占め、次いで黒曜石と硬質泥岩が各5%となる。

打製石斧(第47図202～203、PL.30) 総数3点が確認されている。形態的には、短冊形(202)と撥形(203)および不明が各1点である。出土点数が少なく、いずれも欠損品であることから計測値平均等は省略するが、202・203ともに使用による磨耗が著しく、石材は黒色頁岩を使用している。

b. 使用痕系列

磨石・凹石(第48図206・208～211、PL.30) 総数17点

が確認されている。ほぼ片手の中に収まるサイズの円形や楕円形状の扁平な河床礫を素材として、その表面に使用による凹穴・敲打痕・磨り面(磨耗痕)等が複合的に存在する。210・211などは、凹穴・磨面と共に周縁部に敲打痕を持つ事例である。凹穴と磨面・敲打痕の形成段階における時間的關係については、詳細な観察を行っていないために全体的傾向は不明だが、凹み穴の形成後に磨り面が重複する状況も多々認められる。平均的な大きさは、長径7cm×短径5cm×厚さ3cm×重さ356gである。石材は、粗粒輝石安山岩が12点(60%)と最多を占め、他に石英閃緑岩と変質安山岩が各2点、砂岩・変質玄武岩・文象斑岩・溶結凝灰岩などが各1点認められる。

敲石 総数2点が確認されているが、図示していない。欠損している1点を除き、長径17cm×短径7cm×厚さ5cm、重さ400gを測る。石材は砂岩と粗粒輝石安山岩であり、大きさも含めて先の磨石・凹石等と同様の様相を持つ。

石皿(第48図212、PL.30) 1点のみが確認されている。下半部を欠損するが、推定全長40cm×幅30cm×厚さ10cmを測る。石材には、赤城山麓に産出する使用痕系列特有の粗粒輝石安山岩を使用している。

c. 複合技術系列

磨製石斧(第48図205、PL.30) 1点のみが確認されている。表裏面や両側面を平滑に研磨した、定角的な形態を有する。刃部から体部中位にかけて欠損するが、残存長4cm×幅8cm×厚さ2cmを測る。石材は、変玄武岩を使用している。帰属時期については、その形態から中期後半～後期前半と想定される。

多孔石(第48図207・213、PL.30) 総数2点が確認されている。不定形な粗粒輝石安山岩の亜角礫を素材として、整形加工を施さずに用いている。各個体ともに、多数の凹み穴が付されているが、穴の形状は錐挟み状の回転運動による逆円錐形を呈しており、集合打痕状の凹み穴は少ないのが特徴的である。

d. その他

石核(第48図204、PL.30) 総数6点が確認されている。石材別の内訳は、黒色頁岩4点、黒曜石1点、ひん岩1点であり、黒色頁岩の占める割合が高い。黒曜石については、一側面に原礫面を残すことや長径4.3cm×短径1.7cm×重さ6gと小さいことから、石鏃用の石材と考えら



204・205・209 = 1/2, 212・213=1/6

0 1:3 10cm

第48図 包含層出土石器(2)

れる。また、ひん岩については打製系列の中で使用している石器は存在しないが、高頻度の剥片剥離が行われている。黒色頁岩は、重量190～550 gと大きさにばらつきがあるが、204を含め300 g未満については打製石斧の素材剥片を作出するには小振りであり、削器・石匙・石鏃などの比較的小形品用の石核と考えられる。また、黒色頁岩が主体的である点については、打製系列石器に占める同石材比率の高さや、後述する剥片類の中では79%を占めることと整合的である。こうしたことは、打製系列石器の中で大・中形品を構成する打製石斧を除き、石匙・削器等の小形品については当遺跡内において原石材を持ち込んでの石器制作が行われたことを示すものだろう。

剥片 図としては掲載していないが、素材・調整剥片を含めて総数43点(1,565 g)が確認されている。石材別の数・重量(数量比率・重量比率)については、黒色頁岩34点・1,438 g(79%・92%)、黒色安山岩5点・66g(12%・4%)、チャート3点・22g(7%・1%)、粗粒輝石安山岩1点・39g(2%・3%)である。前述したように、黒色頁岩が主体を占める状況は、打製系列石器の石材や石核石材の様態と軌を一にしており、そのほとんどが同系列石器の製作に付随して作出あるいは排出されたものと言えよう。逆に言えば、これらの剥片に認められない石材、例えば硬質泥岩・硬質頁岩・砂岩・デイサイト・変玄武岩などを使用する打製系列や複合技術系列の石器は、当遺跡外からの搬入品である可能性が高い。

礫塊 図としては掲載していないが、総数12点(1,300 g)が確認されている。全て粗粒輝石安山岩の亜角礫であり、長径2～16cm、重さ1～700 gを測る。遺跡内に人為的に搬入されたものか、あるいは斜面上方からの転石なのか否かは判然としないが、被熱によりその表面に赤化が認められる礫もあり、前述した1号集石などのアースオープン的なものに利用された石材の可能性もある。

参考文献

- 石坂茂・岩崎泰一 1988「燃糸紋土器文化における石器群の一樣相—スタンブ形石器と三角錐形石器を中心として—」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
大工原 豊 2008『縄文石器研究序論』六一書房

【近世以降】

1号建物出土金属製品

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測 cm・g (長・幅・厚・重)	製品の特徴	備考
1	銅製品 匙	布基礎西近縁柄 部残存	長9.4 幅0.8 厚0.2 重2.1	断面蒲鉾型で長さ8.6cmの柄の端部を薄く広げ匙状に形作られる、その先は破損し全 体形状は不明。	
2	銅製品 煙管	布基礎西近縁 吸い口部残存	長9.5 幅1.1 厚1.1 重8.8	キセルの吸い口部分で雁首側の端部に羅字の破片が残存する。錆化が著しく表面の大部分は劣化消失するが、部分的に銀色の表面が残存しておりメッキを施されていたとみられる。	
3	鉄製品 銭貨	布基礎西近縁 表面錆付着	長2.8 幅2.7 厚0.3 重4.2	錆化変形が著しく、外縁と四角形の孔が観察されるものの文字の判読は困難。鉄製の寛永通宝と見られる。	
4	鉄製品 不明	埋没土中	長4.5 幅2.9 厚0.8 重11.8	蒲鉾型の板状鉄製品で、両端部を爪状にし内側に折り返し、挟み込んで固定する様な形状を持つが、表面に布・皮等の痕跡は認められない。	

1号建物出土石製品

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値cm・g (長・短・厚・重)	石材	特徴	備考
5	砥石	埋没土中 1/2	長(6.7)幅2.9 厚1.7 重53.4	砥沢石	正面は平滑で大小の鋭利な線状痕が見られる。ほかの3面には櫛歯タガネ痕が認められあまり使用されていない。	
6	砥石	埋没土中 1/2	長(5.2)幅2.4 厚2.5 重55.6	砥沢石	4面とも使用。正面および左側面には刃慣らし傷と考えられる擦痕が認められる。下面には櫛歯タガネ痕が残る。	

7号土坑出土金属製品

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測 cm・g (長・幅・厚・重)	製品の特徴	備考
1	鉄製品 蹄鉄	埋没土中 完形	長12.2幅11.5 厚1.4 重214.9	左右に3個ずつの角孔を持つ蹄鉄で、裏面では各孔を連繋する溝を持つ。孔は3×5mm程の長方形で一部は錆化により閉塞されるが、いずれも鉋は残存しない。先端部は舌状に作りだし上方に折り曲げられている。蹄鉄は全体的にねじれる様に變形。平面形状からみると右足用の蹄鉄の可能性はある。	

7号土坑出土石製品

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値cm・g (長・短・厚・重)	石材	特徴	備考
2	砥石	埋没土中 1/2	長(6.5)幅2.9 厚2.2 重64.6	砥沢石	表裏面および左側面を使用。右側面は幅4～5mmの平ノミ状工具痕が認められ、使用頻度は低い。	
3	砥石	埋没土中 1/2	長(5.4)幅2.7 厚2.3 重41.9	デイサイト	正面および左側面、上下面は使用により非常に平滑であるが、右側面と裏面は凸部のみ平滑になっている。使用面のあり方が通常と異なり、破損した砥石を再利用した可能性がある。	
4	砥石	埋没土中 1/2	長(5.2)幅3.5 厚3.2 重84.2	砥沢石	正面は使用により非常に平滑であるが、ほかの3面は加工時の痕跡を残し使用度は低い。	

1号溝出土金属製品

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測 cm・g (長・幅・厚・重)	製品の特徴	備考
1	銅製品 煙管	埋没土中 吸い口部残存	長6.7 幅1.0 厚1.0 重11.4	キセルの吸い口部分で雁首側の端部に羅字の破片が残存する。表面の一部は劣化消失するが、現存する表面部分は平滑で装飾・メッキ等の痕跡は認められない。	

11号溝出土金属製品

2	鉄製品 不明	埋没土中	長4.7 幅3.7 厚0.9 重30.9	蒲鉾型の板状鉄製品で、両端部を爪状にし内側に折り返し、挟み込んで固定する様な形状を持つが片側は折り曲げ部で破損する。表面に布・皮等の痕跡は認められない。	
---	-----------	------	-------------------------	--	--

遺構外出土金属製品

1	鉄製品 蹄鉄	攪乱層中 完形	長12.2幅11.5 厚1.2 重207.5	左右に3個ずつの角孔を持つ蹄鉄で、裏面では各孔を連繋する溝を持つが一部は錆びに覆われ不明瞭。孔は3×5mm程の長方形で錆化により閉塞されるが鉋は残存しない。先端部は舌状に作りだし上方に折り曲げられているが端部は劣化破損する。平面形状から見ると左足用の蹄鉄の可能性はある。	
---	-----------	------------	---------------------------	---	--

【平安時代】

1号住居出土遺物

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値 cm (口・底・高・脚)	胎土/焼成/色調	成形・整形等の特徴	備考
1	須恵器 杯	埋没土中 口縁部1/4	口1.2	黒色鈹物粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。	
2	須恵器 杯	+4cm 口縁部1/4欠	口11.7 底6.4 高3.2	粗砂粒/酸化焰/暗オリーブ	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。内面全面と口縁部上位に炭素吸着。外面の器面摩滅。内面は摩耗顕著。	
3	須恵器 杯	埋没土中 口縁部下半～底部1/3	底7.8	粗砂粒少/還元焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。内面の磨耗顕著。	

第3章 遺跡の調査内容

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値 cm (口・底・高・脚)	胎土/焼成/色調	成形・整形等の特徴	備考
4	須恵器 椀	床面直上 口縁部1/3	口15.6	粗砂粒少・黒色鈹物粒少/ 還元焰/灰オリーブ	ロクロ整形(右回転)。	
5	須恵器 蓋	+4cm 天井部		白色鈹物粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。天井部は回転糸切り後、摘み部を貼付。周縁部に回転ヘラ削り。	内面磨耗。
6	土師器 甕	埋没土中 口縁部片	口17.3	細砂粒/酸化焰/にぶい褐	内外面とも横ナデ。一部に輪積み痕を残す。	

1号住居出土金属製品

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値cm・g (長・幅・厚・重)	製品の特徴	備考
8	鉄製品 刀子	周溝内 基部欠損	長14.7 幅1.5 厚0.7 重18.3	細身の刀子で、棟側から見ると中央付近で浅く「く」の字に折れ曲がる。茎側の端部は不定形で僅かに曲がり破損の可能性がある。関および茎は確認できない。	

1号住居出土石製品

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値cm・g (長・短・厚・重)	石材	特徴	備考
7	石製品 紡輪	掘り方内 完形	長4.0 短3.8 厚2.1 重37.2	砥沢石	上面の稜線に弱い摩滅が見られる。穿孔方向は不明。	棒軸孔径0.8

2号住居出土遺物

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値 cm (口・底・高・脚)	胎土/焼成/色調	成形・整形等の特徴	備考
1	土師器 椀	竈内 1/4	口14.4 底7.4 高5.4	粗砂粒少・白色鈹物粒/酸化焰/にぶい褐	外面の口縁緑部先端は横ナデ。以下はナデ後、斜位のヘラ削り。内面はヘラ磨き。	内面は黒色処理後、二次加熱か。
2	須恵器 椀	竈内 1/2	口14.5 高5.2 脚5.9	粗砂粒少/酸化焰/にぶい褐	口縁部の先端は弱く屈曲、外方を向く。ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。内外面ともやや摩滅。黒色の付着物。	
3	須恵器 椀	埋没土中 口縁部下半～高台部	脚6.9	粗砂粒少/酸化焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。内面の高台部端部は摩耗顕著。器面は炭素吸着。	
4	黒色土器 椀	竈内 口縁部片	口13.9	粗砂粒少・白色鈹物粒/酸化焰/にぶい橙	外面の口縁緑部先端は横ナデ。以下はナデ後、斜位のヘラ削り。内面はヘラ磨き。内面は黒色処理。	
5	須恵器 椀	+7cm 口縁部片	口24.6	粗砂粒少/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。	

3号住居出土遺物

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値 cm (口・底・高・脚)	胎土/焼成/色調	成形・整形等の特徴	備考
1	須恵器 杯	竈右外 口縁部1/4	口12.2	粗砂粒・白色鈹物粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。	
2	須恵器 杯	周溝内+5 完形	底5.9 高3.9	粗砂粒少/酸化焰/にぶい黄褐	器形は大きく歪んでいる。現状で長径12.5cm、短径で11.0cmを測る。ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内外面に煤付着。
3	土師器 小型台付 甕	竈左外 2/3	口12.5 底9.0 高13.9	細砂粒/酸化焰/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面上位は横位の、中位・下位は縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。基部から台部外面は横ナデ、内面は横ナデ。	外面に煤付着。内面は黒色に変色。
4	土師器 甕	竈左外 口縁～頸部片	口22.0	細砂粒/酸化焰/橙	口縁部は横ナデ。外面に輪積み痕を残す。胴部外面は横位のヘラ削り。	
5	須恵器 壺	竈内 肩部片		白色鈹物粒/還元焰/灰	紐づくり後、ロクロ整形。内外面ともナデ調整。	

3号住居出土石製品

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値cm・g (長・短・厚・重)	石材	特徴	備考
6	石製品 紡輪	+52cm 完形	長4.9短4.7 厚3.0重77.5	砥沢石	上面(広面)と側面の平坦部分の表面が非常に平滑である。上面の縁辺は破損と摩滅が著しくほとんど元の稜線を残さない。煤の付着が全体的に黒色に変色している。	棒軸孔径0.7

遺構外出土遺物

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値 cm (口・底・高・脚)	胎土/焼成/色調	成形・整形等の特徴	備考
1	灰釉陶器 皿	口縁部片		精選/還元焰/にぶい黄褐	ロクロ整形(右回転)。外面下位に回転ヘラ削り。内外面施釉。刷毛塗り。内面先端は釉をぬぐい取っている。	大原2号窯式期併行。

【縄文時代】

1号敷石住居出土土器

遺物番号	種類器種	出土位置 残存状態	計測値 cm (口径・底径・高)	胎土	器形・文様等の特徴	備考
1	深鉢	床面直上 胴部1/3		I	微隆起帯により楕円状や懸垂状に施文し、区画内にRL縄文を充填する。外面の一部に煤状炭化物付着。	加曾利E4式
2	深鉢	埋設土器 胴下部～底部完 存	底7.1	I	無文。外面は縦位の削りに近い鏡撫で、内面は横位の撫で。内外面共に被熱によりやや風化。	加曾利E4式
3	深鉢	+5 底部完存	底(10.6)	I	無文。成・整形は内外面共にやや粗く、粗製土器的な風合い。	加曾利E4式
4	深鉢	埋設土中 口縁部片		I	口縁部に横位の微隆起帯を巡らせ、以下にRL縄文を縦位施文する。	加曾利E4式
5	深鉢	床面直上 胴部片		I	微隆起帯によりV字状の区画文を施し、RL縄文を充填する。外面の一部に煤状炭化物付着。	加曾利E4式
6	深鉢	床面直上 胴部片		I	単沈線の懸垂文を施し、LR縄文を充填する。	加曾利E4式
7	深鉢	床面直上 胴部片		I	LR縄文を散在的に施文する。	加曾利E4式

1号敷石住居出土石器

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値 cm・g (長・短・厚・重)	石材	特徴	備考
8	石鏃	床面直上 ほぼ完形	長(1.8)幅1.6 厚0.5 重0.9	デイサイト	全面押圧剥離によって丁寧仕上げられている。	凹基無茎鏃
9	磨石	床面直上 下半部欠損	長(6.4)幅(7.6) 厚(4.2)	粗粒輝石安山岩	下半部欠損。正面の摩耗が著しく、摩耗部分がやや灰色に変色している。	重239.1
10	スタンプ 形石器	床面下 完形	長12.3 幅6.2 厚5.2 重693.8	粗粒輝石安山岩	下面および下面縁辺が摩滅している。左側面もやや摩滅し、面を形成しているように見える。	
11	磨石	床面直上 完形	長17.9 幅9.1 厚4.5	粗粒輝石安山岩	礫の中央部よりも周囲約1.5cm幅で平滑面が認められる。左側面もやや摩滅し、平坦面を形成している。	重1106.3
12	丸石	+12 完形	長16.2 幅15.6 厚12.7	かこう岩	球形に近い円礫を素材とする。全体的に平滑であるが、表裏面中央部がより滑らかである。用途不明。	重4677.5
13	石皿	床面直上 1/4欠損	長(34.5)幅 厚 重	粗粒輝石安山岩	断面形状は一般的ではないものの、凹み部中央部が周囲よりも平滑であるため石皿とした。	
14	多孔石	床面直上 1/4欠損	長21.2 幅19.2 厚10.6	粗粒輝石安山岩	断面漏斗状の小孔が正面に3か所、裏面に1か所認められる。	重5568.4
15	台石	床面直上 ほぼ完形	長(25.6)幅(16.5) 厚(3.9) 重2127.4	粗粒輝石安山岩	板状素材の中央部に浅い凹みが集中していたため台石とした。正面は全体的に平滑であるが、人為か自然かの区別は困難である。	

37号土坑出土土器

遺物番号	種類器種	出土位置 残存状態	計測値 cm (口径・底径・高)	胎土	器形・文様等の特徴	備考
1	深鉢	+90、1号敷石 住 口縁部1/4	口(30.4)	I	僅かに摘み上げた小突起が、波状的な口縁を形成する。微隆起帯により大柄な渦巻状の文様を施し、その周縁にLR縄文を充填する。43坑12と同一個体。	加曾利E4式

38号土坑出土土器

7	深鉢	+16 胴部片		F	RLとLRの結束縄文を横位に施文する。	前期末葉
8	深鉢	胴部片		D	9および41坑4と同一個体。	二ツ木式
9	深鉢	1住 胴部片		D	8および41坑4と同一個体。	二ツ木式

39号土坑出土土器

6	深鉢	+31 胴部片		I	微隆起帯により文様構成。LR縄文を施文する。外面の一部に煤状炭化物付着。	加曾利E4式
---	----	------------	--	---	--------------------------------------	--------

41号土坑出土土器

2	深鉢	+39、43坑 1・2 胴部1/6		I	微隆起帯により楕円状の区画文を構成し、その内部にLR縄文を充填する。内外面共に被熱風化が認められ、外面全体に煤状炭化物付着。	加曾利E4式
3	深鉢	+36 胴部片		I	微隆起帯により大柄な渦巻文を構成し、その縁辺にLR縄文を充填する。	加曾利E4式
4	深鉢	+36 口縁部片		D	口唇直下と胴括れ部の横位刻み目細隆帯やL・Rの原体側面圧痕による蕨手状モチーフ、円形竹管文により2段に文様構成される。胴部下半は原体長10～15mmの0段多糸RLとLR縄文により羽状・菱形に施文される。38坑8・9と同一個体。	二ツ木式

第3章 遺跡の調査内容

41号土坑出土石器

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値cm・g (長・短・厚・重)	石材	特徴	備考
5	石匙	埋没土中 1/4欠損	長2.9 幅4.5 厚0.8 重5.8	黒色頁岩	薄手の剥片の周縁に二次加工を施し整形している。摘み部は基軸中央よりも左に作り出されている。裏面に素材剥片の打面部を残す。	

42号土坑出土石器

遺物番号	種類器種	出土位置 残存状態	計測値 cm (口径・底径・高)	胎土	器形・文様等の特徴	備考
10	深鉢	+21 胴部片		I	半截竹管により縦位沈線文や綾杉状沈線文が施文される。	諸磯c式

43号土坑出土石器

11	深鉢	+9 胴部片		D	RとLの原体を1組とした格子目状絡条体を施文する。内面は被熱風化。	二ツ木式
12	深鉢	+2 胴部片		I	37坑-1と同一個体。	加曾利E4式

包含層等出土石器

1	深鉢	F-8 底部1/2		A	乳房状の尖底部に約11cm幅の無文部を置き、半截竹管による横位の集合沈線文を施す。無文部は縦位に研磨される。	三戸式
2	深鉢	K-15 口縁部片		B	内削ぎ状の口唇部を持ち、以下に半截竹管による斜位の集合平行沈線文を施す。	三戸式
3	深鉢	L-15 胴部片		A	複数本1単位の半截竹管により鋸歯状の集合平行沈線文を施文する。内面に少量の煤状炭化物付着。	三戸式
4	深鉢	1住 胴部片		A	篋状工具による爪形状の横位連続爪形文を多段に施す。5と同一個体。	三戸式?
5	深鉢	G-10 胴部片		A	4と同一個体。	三戸式?
6	深鉢	I-13 胴部片		B	半截竹管による繊細で深度の浅い平行沈線文を横位に施す。	三戸式?
7	深鉢	J-12 胴部片		B	半截竹管による深度の浅い平行沈線文を横位に施す。	三戸式?
8	深鉢	I-13 胴部片		B	篋状工具による繊細で深度の浅い沈線文を横・斜位に施す。	三戸式?
9	深鉢	I-13 胴部片		B	多截竹管状工具の腹面による深度の浅い沈線文を横・斜位に施す。	三戸式?
10	深鉢	1号敷石住 胴部片		A	先端がやや尖った棒状工具による単沈線文が斜位に施文される。	田戸下層式
11	深鉢	H-12 胴部片		A	単沈線を約1cm間隔で横位に施文する。	田戸下層式
12	深鉢	J-13 口縁部片		A	7~10mm間隔で単沈線を横位に施し、口唇に近接した沈線間に先端丸頭状の工具により斜位の刺突文を施す。口唇部正面に斜位の刻み目を加える。	田戸下層式
13	深鉢	J-13 口縁部片		B	外面に浅い条痕文を地文として縦位施文し、2本1単位の単沈線を平行沈線文的に横位施文する。口唇上面とその直下に刻み目文や刺突文を施す。また剥落しているが縦位の貼付文が存在する。	田戸上層式
14	深鉢	K-15 口縁部片		A	口縁部が外反する器形を持つが、体部の文様は不明。	三戸式?
15	深鉢	J-13 口縁部片		B	条痕文を内外面に施文し、外反する口縁部に多截竹管の腹面により鋸歯状の単沈線文を施す。	田戸上層式
16	深鉢	J-12 胴部片		C	内外面に条痕文を横・斜位に施す。内面は被熱風化により、条痕文の残存不良。	早期条痕文
17	深鉢	L-15 胴部片		C	内外面に条痕文を横・斜位に施す。内面は被熱風化により条痕文の残存不良だが、煤状炭化物がかなり多量に付着。	早期条痕文
18	深鉢	K-15 胴部片		C	内外面に条痕文を横・斜位に施す。内面は被熱風化により条痕文の残存不良。	早期条痕文
19	深鉢	G-11 胴部片		A	内外面共に研磨に近い縦位の篋撫でを施す無文土器。内外面に僅かな煤状炭化物付着。	三戸式?
20	深鉢	G-11 口縁~胴部1/6	口(27.0)	D	口唇下と胴括れ部に2本の横位刻目細隆帯を施し、その区画内にL・R縄1対の原体側面圧痕による渦巻状モチーフや、円形竹管文・貼付文を施す。胴部下半は原体長15mm前後のR及びLの環付き縄文を横位に施文。	二ツ木式
21	深鉢	L-15 口縁部片		D	口唇下に半截竹管による平行沈線文を、胴括れ部に刻目細隆帯文を2条施し、その区画内にR及びL縄の2本1組を2組用いた都合4本の原体側面圧痕文や円形竹管文を施す。22と同一個体。	二ツ木式
22	深鉢	L-15 胴部片		D	21と同一個体。	二ツ木式

遺物番号	種類器種	出土位置 残存状態	計測値 cm (口径・底径・高)	胎土	器形・文様等の特徴	備考
23	深鉢	G-9 胴部片		D	外面の被熱風化が著しいが、上下2条の隆帯間にL・R縄を1対とした原体側面圧痕を充填する。	二ツ木式
24	深鉢	H-10 口縁部片		E	口唇下に刻目細隆帯文を2条巡らせ、以下にL・R縄1対の原体側面圧痕による渦巻状文や細竹管状工具による羽状構成の連続刺突文、円形竹管文等を施す。	二ツ木式
25	深鉢	G-9 胴部片		D	2条の刻目細隆帯文を口縁部に縦位、胴括れ部に横位に施し、その交点を中心に円形竹管文を付す。口縁部の区画内には細竹管状工具による羽状構成の連続刺突文を多段に施し、胴部に0段多条のRLとLR縄文を横位施文する。外面全体に煤状炭化物付着。	二ツ木式
26	深鉢	K-1 胴部片		D	刻目細隆帯により曲線的なモチーフを描き、その区画内に棒状工具による短沈線が鋸歯状に充填される。内面は被熱風化。	二ツ木式
27	深鉢	E-8, F-8 胴部片		D	口縁部に細竹管状工具による刻目状の連続刺突文が鋸歯状に構成される。胴括れ部に3条の刻目細隆帯文が巡り、以下に0段多条のRLとLR縄文を横位に交互多段施文する。	二ツ木式
28	深鉢	F-10 胴部片		D	3条の刻目細隆帯文を口縁部に縦位、胴括れ部に横位に施し、その交点に円形貼付文を付す。口縁部の区画内には円形貼付文も認められる。	二ツ木式
29	深鉢	E-8 胴部片		D	R・L縄を1単位とした組紐状原体を横位に回転施文し、2条の刻目最隆帯文を巡らせる。	二ツ木式
30	深鉢	2住 胴部片		D	29と同一個体。	二ツ木式
31	深鉢	H-9 口縁部片		D	口唇下に刻目細隆帯文を2条巡らせ、以下にRLとLR縄文を交互に横位多段施文する。内面の一部に煤状炭化物付着。	二ツ木式
32	深鉢	K-15 胴部片		D	平行状の沈線区画内に棒状工具による短沈線が鋸歯状に充填される。	二ツ木式
33	深鉢	G-8 胴部片		D	沈線により鋸歯状の文様を施し、以下に0段多条のLR縄文を横位施文する。	二ツ木式
34	深鉢	K-14 口縁部片		D	口唇下に半截竹管による連続爪形文を2条巡らせ、その下位に尖頭の棒状工具による羽状構成の刻みに近似した連続刺突文を2段に施す。胴部は0段多条のRLとLR縄文を交互に横位施文。	関山I式
35	深鉢	H-11 口縁部片		D	半截竹管状工具を用いて、横方向からの連続した刺突により文様を施す。	関山I式
36	深鉢	F-8 口縁部片		D	口縁部に尖頭棒状工具による刻みに近似した連続刺突文を多段に施す。胴部は0段多条のRLとLR縄文を交互に横位施文。胴部はL・R2本組の格子目状絡条体を横位施文する。	関山I式
37	深鉢	G-9 口縁部片		D	半截竹管により沈線文や刺突文を施す。	関山I式
38	深鉢	J-12 口縁部片		D	口唇下に半截竹管による爪形文に近似した連続刺突文を2条巡らせ、その下位に不整然ながら刻みに近似した羽状構成の連続刺突文を2段に施す。	関山I式
39	深鉢	G-9 口縁部片		D	口唇部が内削ぎ状で、推定4単位の波状口縁。口縁部に梯子状沈線によるV字状や蕨手状の文様を施す。外面の一部に煤状炭化物付着。	関山I式
40	深鉢	F-9 口縁部片		D	口唇下に梯子状沈線文を2条巡らせる。	関山I式
41	深鉢	G-9 口縁部片		D	半截竹管により横位の連続爪形文を2列施文する。	関山I式
42	深鉢	G-8 口縁部片		D	口唇部を角頭状に整形。半截竹管により横位の連続爪形文を2列に施文する。	関山I式
43	深鉢	F-9 口縁部片		D	内削ぎ状の口唇部を持つ。半截竹管により横位の連続爪形文を少なくとも2列に施す。	関山I式
44	深鉢	F-10 胴部片		D	胴括れ部に多截竹管による横位の連続爪形文を施し、以下に0段多条のRL縄文を横位施文する。	関山I式
45	深鉢	G-10 胴部片		D	幅広の半截竹管により横位の平行沈線文を複数列に施す。	関山I式
46	深鉢	K-15 胴部片		D	RLとLR縄文を横位施文して菱形モチーフを構成し、半截竹管により結節沈線文に近似した連続爪形文を施す。内面は若干の被熱風化。	関山I式?
47	深鉢	J-12 口縁部片		D	内削ぎ状の口唇部を持つ。RLとLR縄文を交互に横位多段施文する。	関山I式
48	深鉢	G-9 胴部片		D	原体長5～10mmの0段多条のRLとLR縄文を、極めて整然と横位に交互多段施文する。	二ツ木式
49	深鉢	G-10 胴部片		D	1段多条のRLとLR縄文を横位に交互多段施文する。外面の一部に煤状炭化物付着。53と同一個体。	二ツ木式
50	深鉢	G-9 胴部1/4		D	0段多条のRLとLR縄文を横位に多段施文する。内面全体に煤状炭化物付着。	二ツ木式
51	深鉢	G-10 胴部片		D	0段多条のRLとLR縄文を横位に交互多段施文する。内面は被熱風化。	二ツ木式

第3章 遺跡の調査内容

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値cm・g (長・短・厚・重)	石材	特徴	備考
52	深鉢	H-12 胴部片		D	複節RLRとLRL縄文を横位に交互多段施文する。外面はやや被熱風化。	二ツ木式
53	深鉢	H-10 胴部片		D	49と同一個体。	二ツ木式
54	深鉢	K-14 胴部片		D	0段多条のRLとLR縄文を横位に交互多段施文する。内面は被熱風化。	二ツ木式
55	深鉢	F-9 胴部片		D	1段多条のRLとLR縄文を横位に交互多段施文する。	二ツ木式
56	深鉢	G-9 底部1/8	底(9.5)	D	LR縄文を横位に施し、底外面にも施文する。内外面共に著しい被熱風化。	二ツ木式
57	深鉢	G-8 底部1/4	底(8.0)	D	0段多条のRL縄文を横位に施すが、上げ底状の外面にも施文する。内外面共に被熱風化し、底外面に煤状炭化物付着。	二ツ木式
58	深鉢	E-9, F-8 底部2/3	底(7.1)	D	0段多条のRLとLR縄文を上げ底状の外面部を含めて施文する。内外面共にかんりの被熱風化。	二ツ木式
59	深鉢	H-11 底部1/2	底(10.0)	D	0段多条のRLとLR縄文が横位に交互施文される。僅かに上げ底状の底外面は無施文。	二ツ木式
60	深鉢	E-8 口縁部片		D	R・L縄を1組にした粗大な結節縄文を横位に施文する。内面は被熱風化。	二ツ木式
61	深鉢	G-9 胴部片		D	L・R縄の各1本を1組にした原体側面圧痕を格子目状に施文する。	二ツ木式
62	深鉢	H-10 胴部片		D	R・L縄を1単位とした組紐状原体を横位に回転施文する。内面は被熱風化。	二ツ木式
63	深鉢	J-14 底部片		D	R・L縄を1単位とした組紐状原体を横位に回転施文する。	二ツ木式
65	深鉢	H-10 胴部片		D	LR縄文を横位施文後に、L縄を2本1組にした原体側面圧痕を斜位に施す。	関山I式?
66	深鉢	I-13 胴部片		D	RLとLR縄文を横位施文後に、L縄を2本1組にした原体側面圧痕を斜位に施す。	関山I式?
67	深鉢	F-10 胴部片		D	整然とした閉端環付きのRL・LR縄文を横位に交互多段施文する。外面の一部に煤状炭化物付着。	関山I式?
68	深鉢	表採 口縁部片		D	R及びLの環付き縄文を交互に横位多段に施文。内外面はかなりの被熱風化。	関山I式
69	深鉢	E-8 胴部片		D	R・L縄を1組にした粗大な、結節縄文を横位多段に回転施文する。内面は被熱風化。	関山I式
70	深鉢	F-8 胴部片		D	撚りの粗雑な閉端環付きRL縄文を横位に交互多段施文する。内外面共に被熱風化。	関山I式
71	深鉢	J-13 口縁部1/2	口(21.7)	D	0段多条のRLとLRの結束縄文を横位に施文して、菱形状のモチーフを構成する。内外面の一部に煤状炭化物付着。72と同一個体。	関山I式
72	深鉢	J-13 底部1/2	底(10.0)	D	71と同一個体。上げ底状の底面にも縄文施文。	関山I式
73	深鉢	G-10, K-15 口縁部片		D	RLとLR縄文を交互に横位施文して菱形モチーフを構成する。外面の一部に煤状炭化物付着。	関山I式
74	深鉢	F-8 口縁部片		D	0段多条のRLとLR縄文を横位に交互多段施文する。内面は良好に研磨。	関山式
75	深鉢?	G-8 口縁部片		D	半円状の波頂部破片か。内外面共にRL縄文を施文する。	関山式
76	深鉢	H-12 口縁部片		F	刻目を施した細隆帯により三角形のモチーフを描き、円形竹管文を施す。内外面共に風化。	諸磯a式
77	深鉢	K-15 胴部片		B	胴括れ部に半截竹管による横位の平行沈線文を施し、以下にRL縄文を横位施文する。内外面共に風化。	諸磯a式
78	深鉢	G-11 胴部片		B	RL縄文を横位に施文する。外面の一部に煤状炭化物付着。	諸磯a式
79	深鉢	J-15 底部1/6	底(8.0)	B	RL縄文を横位に施文する。内面は僅かに被熱風化。	諸磯a式
80	深鉢	G-10 底部1/4	底(9.0)	B	RL縄文を横位に施文する。内面は僅かに被熱風化。	諸磯a式
81	深鉢	E-8 口縁部片		B	地文にRL縄文を施し、浮線文により巖手状または渦巻状のモチーフを描出する。口縁波頂部下に付された推定イノシンの顔面突起が欠落する。	諸磯b式
82	深鉢	H-11 底部1/6	底(12.0)	B	横位の浮線文を貼付するが、地文の縄文の有無は不明。	諸磯b式
83	深鉢	I-12, L-15 胴部片		B	ややダレた横位の浮線文が少なくとも5条巡る。内外面共に被熱風化。	諸磯b式
84	深鉢	F-9 胴部片		B	地文にRL縄文を斜位に施し、浮線文を貼付する。	諸磯b式
85	深鉢	H-12 胴部片		B	地文にRL縄文を横位に施し、浮線文を貼付する。	諸磯b式

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値cm・g (長・短・厚・重)	石材	特徴	備考
86	深鉢	H-12 胴部片		B	大ぶりの半截竹管により連続爪形文を施す。	諸磯b式
87	深鉢	1住 胴部片		B	大ぶりの半截竹管により連続爪形文を施し、それに隣接して小ぶりの半截竹管による平易化した浮線文的モチーフを描出する。内外面のほぼ全面に煤状炭化物付着。	諸磯b式
88	深鉢	K-15 口縁部片		B	口縁部に縦位の刻み隆帯を貼付し、幅広の連続爪形文を横位に施文する。	諸磯b式
89	深鉢	I-12 口縁部片		B	複数本単位の半截竹管の平行沈線文により文様構成。外面全体に煤状炭化物付着。	諸磯b式
90	深鉢	H-11 口縁部片		B	地文にLR縄文を横位施文し、斜行沈線文を施す。	諸磯b式
91	深鉢	F-10 口縁部片		B	地文にRL縄文を横位施文し、複数本単位の半截竹管による平行沈線文で文様構成する。外面の一部に煤状炭化物付着。	諸磯b式
92	深鉢	G-11, F-10 胴部片		B	地文にRL縄文を横位施文し、半截竹管の横位平行沈線文により文様構成。内外面共に被熱風化し、外面の一部に煤状炭化物付着。	諸磯b式
93	深鉢	H-9 胴部片		B	半截竹管の平行沈線文により、菱形のモチーフを描く。内外面の一部に煤状炭化物付着。94と同一個体。	諸磯b式
94	深鉢	H-9 胴部片		B	93と同一個体。	諸磯b式
95	深鉢	H-11 胴部片		B	半截竹管の横位平行沈線文により文様構成。内面は被熱風化。	諸磯b式
96	深鉢	L-15 胴部片		B	地文にRL縄文を横位施文し、胴括れ部付近と底部に半截竹管の横位平行沈線文を複数列施す。97・98と同一個体。	諸磯b式
97	深鉢	H-11 底部片		B	96・98と同一個体。内面の一部に煤状炭化物付着。	諸磯b式
98	深鉢	G-11 胴部片		B	96・97と同一個体。	諸磯b式
99	深鉢	G-9 口縁部片		B	半截竹管の横位平行沈線文を施文し、やや小ぶりの耳状貼付文や円形竹管の刺突を附加した円形貼付文を施す。	諸磯c式
100	深鉢	1住 口縁部片		B	半截竹管の横位平行沈線文を施文し、円形竹管の刺突を附加した円形貼付文を施す。	諸磯c式
101	深鉢	F-10 口縁部片		B	半截竹管の横位平行沈線文を施文し、大ぶりの耳状貼付文や半截竹管の刻みを附加した円形貼付文を施す。	諸磯c式
102	深鉢	1号敷石住 口縁部片		B	複数本単位の半截竹管の平行沈線文により文様構成。	諸磯c式
103	深鉢	G-10 胴部片		B	半截竹管の横位平行沈線文を施文し、小ぶりの耳状貼付文や刺突を附加した円形貼付文を施す。	諸磯c式
104	深鉢	G-11 胴部片		B	半截竹管の平行沈線文により綾杉状のモチーフを描出し、耳状貼付文を施す。	諸磯c式
105	深鉢	I-11 胴部片		B	半截竹管の平行沈線文により縦位や斜位に文様を施す。内面は被熱風化。	諸磯c式
106	深鉢	H-12 胴部片		B	半截竹管の平行沈線文により格子目状のモチーフを描出する。内外面共に被熱風化。	諸磯c式
107	深鉢	F-9 胴部片		B	胴部下半に半截竹管の平行沈線文により縦・斜位の文様を施す。内面はやや被熱風化。	諸磯c式
108	深鉢	H-11 胴部片		B	半截竹管の平行沈線文により弧状のモチーフを描出する。	諸磯c式
109	深鉢	I-13 胴部片		B	半截竹管の平行沈線文により鋸歯状のモチーフを描出する。内面は被熱風化。	諸磯c式
110	深鉢	K-14 底部1/8	底(10.2)	B	半截竹管の平行沈線文により弧状のモチーフを描出する。内面全体に煤状炭化物付着。111と同一個体。	諸磯c式
111	深鉢	K-15 胴部片		B	110と同一個体。内面全体に煤状炭化物付着。	諸磯c式
112	深鉢	H-9・11 胴部片		B	結節浮線文を縦・横位に貼付し、一部に格子目状のモチーフを描出する。内外面共にかんりの被熱風化。	十三菩提式
113	深鉢	F-9, G-10 胴部片		B	横位の結節浮線文を15～20mmの間隔で多段に施す。内外面共にかんりの被熱風化。	十三菩提式
114	深鉢	G-10 口縁部片		B	口唇部の内外面に粘土帯を貼付し、波頂部の口唇上面には細隆帯でドーナツ状の貼付文を施す。口縁部も同様の細隆帯により文様構成。162と同一個体と推定される。	十三菩提式
115	深鉢	G-10 胴部片		G	地文にRL縄文を横位施文。複数の隆帯文を横位に貼付し、半截竹管による粗い爪形状の連続刺突文を附加する。158と同一個体と推定される。	十三菩提式
116	深鉢	2住 口縁部片		B	複数本単位の半截竹管により横位の平行沈線文を施し、それに直交する縦位沈線文を施して格子目状のモチーフを描出する。	十三菩提式
117	深鉢	H-9 胴部片		B	4本1単位の結節浮線文により横位や鋸歯状に文様構成され、各単位の隣接部には幅4mmの直線的な陰刻が施される。	十三菩提式

第3章 遺跡の調査内容

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値cm・g (長・短・厚・重)	石材	特徴	備考
118	深鉢	L-15 口縁部片		B	半截竹管の平行沈線により重層的な鋸歯状文を複数段に施す。横位平行沈線文との三角形の区画部分は、挟り取るような陰刻文が施される。折返し状の複合口縁部下端は、半截竹管の先端部で掻き取るような刺突により鋸歯状陰刻文が描出される。外面全体に煤状炭化物付着。	十三菩提式
119	深鉢	1住 胴部片		B	半截竹管の平行沈線により重層的な鋸歯状文を施す。横位平行沈線文との三角形の区画部分は、挟り取るような鋸歯状陰刻文が施される。	十三菩提式
120	深鉢	K-14 胴部片		B	半截竹管の平行沈線により重層的な鋸歯状文を施す。横位平行沈線文との三角形の区画部分や各単位の隣接部分には、陰刻文が施される。	十三菩提式
121	深鉢	H-11 口縁部片		B	口縁波頂下に瘤状の小突起を縦位貼付し、半截竹管2本単位の横位平行沈線文と同工具の刺突文を施す。内面は被熱風化。	十三菩提式
122	深鉢	F-10 口縁部片		B	RL縄文を横位に施文する。	前期末葉
123	深鉢	1住 口縁部片		B	LR縄文を横位する。開端部の自縄自縛と推定される横位のR結節縄文も認められる。	前期末葉
124	深鉢	F-9, G-10 口縁部片		B	RL縄文を横位に施文する。内外面共にやや被熱風化。	前期末葉
125	深鉢	H-9 胴部片		B	RL縄文を横位に施文するが、開端部の自縄自縛と推定される結節縄文Lも認められる。	前期末葉
126	深鉢	L-17 胴部片		B	RL縄文を横位施文する。内面はやや被熱風化。	前期末葉
127	深鉢	G-10 口縁部片		B	RL縄文を横位に施文し、口唇下を約10mmの幅で横位に磨り消している。内面は被熱風化。	前期末葉
128	深鉢	H-10 胴部片		B	RL縄文を横位に多段施文する。	前期末葉
129	深鉢	G-11 胴部片		B	0段多条のLR縄文を横位に多段施文する。	前期末葉
130	深鉢	H-10 胴部片		B	LR縄文を横位に多段施文する。外面の一部に煤状炭化物付着。	前期末葉
131	深鉢	G-10 胴部片		B	RL縄文を横位に多段施文する。内面は被熱風化。132と同一個体。	前期末葉
132	深鉢	G-10 胴部片		B	131と同一個体。	前期末葉
133	深鉢	H-11 胴部片		B	RL縄文を横位に施文し、幅10～20mmの縦・横位帯状の磨り消し部分を持つ。内面は磨き状の横位箆撫で。144と同一個体。	前期末葉
134	深鉢	表採 胴部片		B	RL縄文を横位に施文。内面は磨き状の横位箆撫で。	前期末葉
135	深鉢	J-15 胴部片		G	0段多条のLR縄文を横位に施文する。	前期末葉
136	深鉢	L-15, I-16 口縁部片		B	RLとLRの結束縄文を横位に施文する。	前期末葉
137	深鉢	I-12 胴部片		B	RLとLRの結束縄文を横位に多段施文する。	前期末葉
138	深鉢	L-16 底部片		B	RLとLR縄文を横位に交互多段施文する。	前期末葉
139	深鉢	M-15・16, L-16 胴部片		B	RLとLR縄文を横位に交互多段施文する。内面は若干被熱風化。	前期末葉
140	深鉢	F-8 胴部片		B	RLとLRの結束縄文を横位に施文する。内面の一部に煤状炭化物付着。	前期末葉
141	深鉢	G-10 胴部片		B	RLとLRの結束縄文を横位に施文する。	前期末葉
142	深鉢	J-12 胴部片		B	RLとLR縄文を横位施文する。内面は磨き状の箆撫で。	前期末葉
143	深鉢	I-12 胴部片		B	RLとLR縄文を横位に交互施文し、Lの結節縄文も認められる。内面は被熱風化。	前期末葉
144	深鉢	G-11 胴部片		B	133と同一個体。	前期末葉
145	深鉢	L-15 胴部片		B	RL縄文を横位に施文する。内面は被熱風化。	前期末葉
146	深鉢	K-15 胴部片		B	RLとLR縄文を横位に施文する。内面の一部に煤状炭化物付着。	前期末葉
147	深鉢	G-9 胴部片		B	RLとLRの結束縄文を横位に施文し、綾縲り状の結節縄文Rも認められる。内面はやや被熱風化。	前期末葉
148	深鉢	J-13 胴部片		B	RLとLRの結束縄文を横位に施文するが、開端部の自縄自縛と推定される結節縄文Lも認められる。	前期末葉
149	深鉢	G-10 胴部片		B	RLとLRの結束縄文を横位に施文し、綾縲り状の結節縄文LとRも認められる。内面は被熱風化し、全体に煤状炭化物付着。	前期末葉

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値cm・g (長・短・厚・重)	石材	特徴	備考
150	深鉢	L-15 底部1/3	底(21.0)	B	RLとLR縄文を横位に交互多段施文する。	前期末葉
151	深鉢	H-10 底部1/6	底(15.4)	B	RLとLRの結束縄文を横位に施文する。内面全体に煤状炭化物付着。	前期末葉
152	深鉢	I-12・13 底部1/6	底(11.2)	B	RLとLR縄文を横位に施文して菱形のモチーフを構成するが、開端部の自縄自縛と推定される結節縄文LとRも認められる。	前期末葉
153	深鉢	L-15 口縁部片		B	口唇部は幅広の粘土帯を貼付して複合口縁化し、口縁波頂下に刺突を附加したやや粗大な円形貼付文を施す。	十三菩提式
154	深鉢	M-15 口縁部片		B	胴括れ部に指頭圧痕を附加した大ぶりの円形貼付文を施し、それに接続して隆帯を巡らせる。以下にRL縄文を横位施文。内面は被熱風化。	十三菩提式
155	深鉢	L-15 胴部片		B	RLとLR縄文を横位に交互多段施文し、中央に刺突を附加した粗大な円形貼付文を施す。内外面に被熱風化。	十三菩提式
156	深鉢	L-15 胴部片		B	RLとLRの結束縄文を横位に施文し、部分的に蛇行状の貼付文を横位に施す。内外面の一部に煤状炭化物付着。	十三菩提式
157	深鉢	L-15 胴部片		B	RL縄文を横位多段に施文し、粗雑な結節浮線文を縦位に貼付する。内外面共に被熱風化。	十三菩提式
158	深鉢	G-10 口縁部片		G	口唇部上面に棒状工具による刻み目を施し、以下に0段多条のRL縄文を横位施文する。115と同一個体と推定される。	十三菩提式
159	深鉢	F-8 口縁部片		H	LR縄文を横位施文後に、半截竹管の平行沈線により鋸歯状や菱形状に文様構成する。内面は丁寧な研磨。	諸磯c式
160	深鉢	L-15 口縁部1/4	口(18.8)	G	背面が緩い曲線を描く籠状工具を用いて、斜位方向からの連続的刺突により器面が捲り上がるような文様を前面に施す。外面に少量の煤状炭化物付着。161と同一個体。	浮島式
161	深鉢	L-16 底部片		G	160と同一個体。	浮島式
162	深鉢	G-11 口縁部片		G	口縁部に複数本の細沈線による波状文を施し、口唇部上面には沈線文や棒状の隆帯文を施す。114と同一個体と推定される。	十三菩提式
163	深鉢	K-14 口縁部片		G	外側に肥厚する口唇下に弧状の沈線文を施す。	五領ヶ台式
164	深鉢	表採 胴部片		G	複数本1単位の半截竹管による矢羽根状集合沈線文や刻み目隆帯文を横位に施文する。	五領ヶ台式
165	深鉢	K-15 胴部片		G	幅2.5cmの無文部を挟んで単節や結節のLR縄文を縦位に交互施文する。	五領ヶ台式
166	深鉢	J-12 胴部片		H	籠状工具による連続爪形文や刻み目隆帯文を横位に施す。外面に少量の煤状炭化物付着。	勝坂式
167	深鉢	K-16 口縁部片		I	波状口縁のキャリパー形深鉢。口縁部に幅広沈線による区画文を施す。	加曾利E3式
168	深鉢	G-24 口縁部片		I	隆帯の両脇に幅広の沈線を施す。区画内にLR縄文を施文。	加曾利E3式
169	深鉢	J-12 口縁部片		I	波状口縁のキャリパー形深鉢。口縁部に幅広沈線による区画文を施す。	加曾利E4式
170	深鉢	表採 口縁部片		I	波状口縁のキャリパー形深鉢。微隆起帯により文様構成。	加曾利E4式
171	深鉢	H-10 胴部片		I	174と同一個体。	加曾利E4式
172	深鉢	G-10, J-12 口縁部1/5	口(28)	I	口縁波頂部に橋状把手を持つキャリパー形態を呈する。単沈線によりV・U字状の区画文を施し、その内部にLR縄文を充填する。	加曾利E4式
173	深鉢	J-13 胴部片		I	微隆起帯により区画文を施し、RL縄文を充填する。	加曾利E4式
174	深鉢	H-10・11 胴部片		I	微隆起帯により渦巻状の文様を施し、LR縄文を充填する。内面に被熱によるハゼが僅かに認められる。171と同一個体。	加曾利E4式
175	深鉢	F-9 胴部片		I	平行する微隆起帯により区画文を構成する。	加曾利E4式
176	深鉢	F-8 胴部片		I	平行する微隆起帯により区画文を構成する。	加曾利E4式
177	深鉢	1住 胴部片		I	微隆起帯により区画文を施し、RL縄文を充填する。	加曾利E4式
178	深鉢	1住 胴部片		I	平行する微隆起帯により渦巻文を構成する。区画内にLR縄文を充填。	加曾利E4式
179	深鉢	H-10 胴部片		I	縦位の細沈線懸垂文を施し、LR縄文を充填する。	加曾利E4式
180	深鉢	F-9 底部1/4	底(7.2)	I	深鉢の底部破片。	加曾利E4式
181	深鉢	G・L・M-15, K-16 口縁～胴部1/2	口(28.0)	I	丸棒状工具によりJ・Y字状の区画文を縦位に施し、外削ぎ状の口唇部外端には推定4単位に部分的な刺突文を施す。	堀之内1式

第3章 遺跡の調査内容

遺物番号	種類	出土位置 残存率	計測値cm・g (長・短・厚・重)	石材	特徴	備考
182	深鉢	I-11 口縁部片		I	波状口縁を持ち、その下位に8字状の貼付文を施す。細沈線により区画文様を施し、RL縄文を充填する。内面は丁寧な研磨。	堀之内2式
183	深鉢	I-11 胴部片		I	細沈線により三角形状や渦巻状の幾何学的文様を施す。区画内にRL縄文を充填する。内面は丁寧な研磨。	堀之内2式
184	深鉢	G-10 口縁部片		I	細沈線により区画文様を施し、繊細なLR縄文を充填する。内・外面ともに丁寧な研磨。	堀之内2式
185	深鉢	G-10 口縁部片		I	口縁がラッパ状に外傾し、無文部を構成する。外面に中量の煤炭炭化物付着、内面は僅かに被熱風化。	堀之内2式
186	鉢	H-10・11 胴部1/5		I	胴部下半でく字状に屈曲する鉢形土器。上半部に細沈線による三角形状や渦巻状の幾何学的文様を施す。区画内に繊細なLR縄文を充填する。	堀之内2式

包含層等出土石器

遺物番号	種類	出土位置 残存率	計測値cm・g (長・短・厚・重)	石材	特徴	備考
187	石鏃	O-21 右脚部欠損	長1.8 幅1.6 厚0.4 重0.6	黒曜石	背面側は全面に二次加工を施しているが、腹面は周縁部のみである。背面右側縁の一部は折り取りによって整形されている。	凹基無茎鏃
188	石鏃	L-15 完形	長1.9 幅1.7 厚0.5 重0.6	珪質頁岩	丁寧な押圧剥離で左右対象に整形している。	凹基無茎鏃
189	石鏃	表採 右脚端部欠損	長(2.5)幅(2.1) 厚0.4	黒曜石	平面形が大きく、左右対称ではないものの丁寧に二次加工を施し整形している。右返し部は節理による折れ。	凹基無茎鏃 重1.7
190	石鏃	G-11 茎部欠損	長(3.0)幅(1.5) 厚(0.5)	黒色頁岩	全体的に稜線が摩滅し明瞭ではない。右側の返し部は節理面に沿って欠損している。	平基有茎鏃? 重1.6
191	楔形石器	I号溝 完形	長2.6 幅1.8 厚1.1 重22.7	チャート	上下両端に階段状の微小な剥離痕が認められたため、楔形石器とした。	
192	石匙	F-9 完形	長3.6 幅4.9 厚0.8 重10.3	黒色頁岩	背腹両面の周縁に二次加工を加え整形している。右側辺には微小な剥離痕が見られ、折れた後、二次加工を施したか、使用によるものと考えられる。	
193	石匙	I-13 左1/4欠損	長5.3 幅(6.1) 厚1.1 重19.3	黒色頁岩	薄手の剥片を素材とし周縁に二次加工を施し整形している。左下端は折れによる欠損。	
194	石匙	N-21 摘み部欠損	長(4.2)幅5.8 厚(0.8)重22.7	黒色頁岩	挟りが相対して入っているため石匙とした。上部は折れ。底辺二次加工部の一部で経年変化が弱く、二重パティナが認められる。刃部再生の可能性はある。	
195	三角錐形 石器	I-12 完形	長9.6 幅6.5 厚6.5 重417.4	黒色頁岩	下面の一部で顕著な摩滅が認められる。三角錐をなす稜線は一方からの多数の打撃により潰れ、部分的に摩滅が認められる。裏面は全面自然面である。	基部欠損後再生
196	削器	M-7 完形	長7.6 幅3.6 厚1.5 重43.6	黒色頁岩	縦長剥片を素材に腹面周縁に二次加工を施し、刃部を作り出している。	
197	削器	G-10 完形	長7.0 幅5.4 厚1.7 重60.8	黒色頁岩	表裏面の周縁に二次加工を施し、撥形に整形している。	
198	削器	F-8 完形	長4.4 幅3.8 厚1.0 重13.8	黒曜石	背腹面周縁の一部に二次加工を施す。下端部では腹面側に押圧剥離を入れ、刃部を作り出している。	
199	削器	L-15 完形	長8.5 幅5.8 厚2.2 重110.1	黒色頁岩	縦長剥片を素材とし、左側縁に二次加工を施し鋸歯状の刃部を作り出している。裏面は自然面である。	
200	削器	I-11 完形	長8.4 幅6.0 厚1.7 重76.1	黒色頁岩	表裏面の周縁に二次加工を施し、刃部を作り出している。裏面には素材剥片の打点およびバルブを残す。	
201	削器	O-21 完形	長18.3幅9.2 厚4.5 重936.8	砂岩	大型剥片の両側縁に二次加工を施し、刃部を作り出している。	
202	打製石斧	O-21 完形	長9.6 幅3.8 厚1.3 重57.0	黒色頁岩	左右側縁中央部を除く周縁および両面の稜線の摩滅が著しい。左右側縁中央部で摩滅が弱いのは着柄時の巻縛によるものと推定される。	短冊形
203	打製石斧	表採 基部欠損	長8.0 幅6.5 厚1.9 重80.3	黒色頁岩	周縁に二次加工を施し、刃部に向かって広がる形状を作り出す。刃部の摩耗が著しく肉眼でも観察可能。正面二次加工部分は周囲の剥離面より経年変化が弱く、2重パティナが認められる。	撥形
204	石核	G-11	長(8.4)幅(8.2) 厚3.7	黒色頁岩	長さ15cm程度の扁平な礫を原石とし、自然面を打面に一方向から剥片剥離を行っている。	重275.2
205	磨製石斧	F-10 下半部欠損	長(4.4)幅(4.1) 厚(2.0)	変玄武岩	磨製石斧の頭部破片。4面とも丁寧な研磨で仕上げている。	重52.2
206	磨石	E-8 半部欠損	長(9.9)幅(7.7) 厚(4.8)重508.8	変質安山岩	左側面が周囲よりも平滑で面を形成していることから、ここを機能部と推定し磨石とした。下面および下面周辺の稜線に摩滅は認められない。	
207	多孔石	G-9 1/4欠損	長10.2幅(7.3) 厚(4.9)	粗粒輝石安山岩	断面形が漏斗状の小孔が正面で2か所、右側面で3か所認められる。	重363.7
208	凹石	J-13 完形	長11.0幅9.3 厚3.9 重393.7	粗粒輝石安山岩	表裏面中央部で複数の凹みが続く連続し楕円形になった落ち込みが見られる。上端部は摩耗により面を形成している。	

遺物番号	種類器種	出土位置 残存率	計測値cm・g (長・短・厚・重)	石材	特徴	備考
209	磨石	L-15 完形	長6.2 幅5.0 厚3.9 重157.6	粗粒輝石安山岩	小型の磨石で、中央部を中心に表面全体の摩滅が著しい。	
210	磨石	J-13 完形	長9.9 幅8.4 厚4.8 重598.2	石英閃緑岩	表裏面中央部に広く摩耗痕が見られ、側面には敲打痕の集中が4か所認められる。磨石としたが、複数の機能をもつと推定される。	
211	磨石	K-13 完形	長11.6幅7.6 厚5.3 重704.1	粗粒輝石安山岩	表裏面中央部で周囲よりも平滑な部分が認められ磨石とした。中央部では敲打痕も見られる。	
212	石皿	O-19 下半部欠損	長(22.5)幅(29.7) 厚(9.5) 重8400.0	粗粒輝石安山岩	大型楕円礫の中央部に断面皿状の浅い凹みを有する。表裏面とも整形され全体的に平滑である。凹み部と周囲の平滑さは同程度で、使用度は低い。	
213	多孔石	F-9 完形	長(30.6) 幅(25.5)厚6.3	粗粒輝石安山岩	板状礫を素材とし、正面平坦部に断面漏斗状の小孔を集中して穿つ。	重4803.5

縄文土器の胎土分類

分類	特徴	備考
A	石英・輝石・白色安山岩の粗・細砂を中量含む緻密な胎土。	早期～前期
B	石英・長石・白色安山岩の礫・粗細砂を少量含む比較的緻密な胎土。	前期後半
C	中量の石英・輝石・白色安山岩の粗・細砂と少量の繊維を含有する緻密な胎土。	早期後葉
D	少量の石英・長石や中量の白色安山岩の礫・粗細砂および繊維を含む比較的緻密な胎土。	前期前半
E	中量の石英・長石を主体とした礫・粗細砂や繊維を含む緻密な胎土。	前期前半
F	石英・長石・白色安山岩の細砂を中量含む緻密な胎土。	前期後半
G	雲母・石英・長石の粗・細砂を中量含む緻密な胎土。	前期後半～前期前葉
H	少量の石英・長石・白色安山の粗細砂を含む緻密な胎土。	中期前半
I	少量の石英・長石と中量の白色安山岩の礫・粗細砂を含む比較的緻密な胎土。	中期後半後期前半

第4章 調査の成果と課題

(1) 近世以降

滝沢御所遺跡では、近世以降の土坑が38基確認され、その内の25基が長方形形状を呈している。この長方形土坑は、平均的な規模が長径150cm×短径80cm×深さ40cmであるが、その長軸方向はN80度E前後のグループと、それらとは約90度ずれたN10度Wのグループとに大別される。また、これらの土坑は開削後に自然埋没したことが、その堆積土層から看取できる。こうした土坑の機能・用途については、出土遺物が皆無に近いこともあり、特定することが困難な状況にある。しかし、これと類似した土坑は、利根川を挟んだB地区の吹屋犬子塚遺跡(第49図121)で多数確認されており、ここではその発掘成果を基にその機能・用途について考えてみたい。

吹屋犬子塚遺跡では、Hr-FPの上面にて近世以降の土坑145基を確認しているが、その埋没状況によりA～D型の4つに分類されている。注目されるのは、各型の土坑が同一区域内においてその長軸方向を同一または90度ずれた状態で密集かつ列状配置されていることである。各型の相違は、掘削の時期や用途差を反映した結果とされ、長軸方向の規則性は現代の圃場整備以前の地割り方向に規制されたものと想定されている。この密集した列状配置を重視するならば、各地割り区画の境界に設置されていた状況も窺える。また、断定することは困難であるが、今日的にも畝地の一角に見受けられる、収穫後の作物を屋外保管するための「室」的な施設としての可能性も想定できる。滝沢御所遺跡の長方形土坑には、吹屋犬子塚遺跡例ほどのタイプ差は認められないが、長軸方向の規則性や密集した状態、それに火山軽石のHr-FP堆積層を掘り抜いて設置されている点などは、ほぼ同様と言えよう。こうした土坑は旧子持村内をはじめHr-FPが多量に降下・堆積した地域の各遺跡で多見されることから、地域的に限定された遺構の可能性もある。いずれにしても確定できるだけの根拠に乏しく、今後の調査・研究の中で見定めていく必要がある。

(2) 古墳時代

当遺跡では、1,400㎡の狭小な範囲ではあるが、Hr-FPで埋没した馬の放牧地が確認されている。周辺域におけるこうした古墳時代の放牧地については、第2章の「2. 歴史的環境」にて若干触れてあるが、第49図に当遺跡をはじめとして放牧地が確認された21遺跡をあらためてプロットした。吾妻川と利根川に挟まれた子持山麓の河岸段丘上(B地区)に集中しているが、これについては道路建設等に伴う発掘調査件数が多いことや、1mを超える火山軽石(Hr-FP)の堆積による遺構面保護が発見を容易にしていることもその一因であろう。特に前者の発掘調査では、国道17号や353号のバイパス建設に伴い、この河岸段丘面を南北および東西方向に縦・横断してトレンチ状に行われ、放牧地の範囲が約400haの広大な面積に及ぶことが想定されている。また同時に、Hr-FPの半世紀前に噴出したHr-FA段階の火砕流が、当域のクマザサ地帯をネザサ地帯に植生変化させたことも、放牧地利用の条件整備となったことが指摘されている。

B地区の各遺跡で確認された放牧地の状況は必ずしも一様ではないが、①多数の馬蹄痕、②主に畜舎とを往復する馬の歩行により形成された幅1m前後の踏み分け道、③水田の「畦畔」と類似した盛土遺構(以下、畦状遺構)による区画、④狭小な範囲に存在する畝立てされた畝、⑤ススキなどが散在する裸地に近い草原、⑥複数回に及ぶ焼き払いの痕跡、等がほぼ共通して認められる。④の畝立てされた畝が、放牧地内の狭小な範囲に併存していることの理解については、現段階でも定まってははいない。その理由の一つには、③の畦状遺構やそれに圍繞された区画が放牧地のほぼ全域に存在し、畝立てはされていないものの、その区画内で畝耕作が行われていた可能性を排除できないことが上げられる。仮に放牧地全域が畝地としても利用されたとすれば、その栽培作物と共に耕作方法が問題となるであろうし、ヨーロッパにおける二圃制や三圃制などの休耕地と放牧地とを交互に使い分ける農法も、検討すべき課題だろう。しかし、その前提としては、畦状遺構の機能・性格が何なのかを先ず解明しなければならない。なぜなら、この畦状遺構は必ずし



第49図 古墳時代の放牧地が確認された遺跡(国土地理院発行 2万5千分の1地形図「金井・伊香保・鯉沢・渋川」使用)

も水田区画のように一定の範囲を圍繞するとは限らず、閉端せず開放された状態のものも多見されるからである。こうした未解決の問題を内包しつつも、B地区において広大な面積にわたる放牧地や馬匹飼育が確認できる点は、当時における軍事利用あるいは運搬手段に関わる優位性と共に経済的優位性を保持していたと見なすことも可能だろう。しかし、前方後円墳の不在に象徴されるように、当域の支配・領有がそうした狭い範囲を単位としたものではなく、利根川や吾妻川による自然的区域を超越したより広域レベルから論じる必要があることを物語っている。

前述の諸項目の中で、滝沢御所遺跡で確認できるのは①②と⑤⑥であり、畠との関連性については少なくとも調査区域内では確認するに至っていない。しかし、当遺跡で確認された放牧地は、C地区の赤城山麓において初例であり、同時に古墳時代の馬匹飼育がさらに広域において行われていたことを明示すると共に、その実体・構造や上記の支配領域等を考える上で重要である。

(3) 縄文時代

第4文化面のⅦ層上位にて、加曽利E 4式期の敷石住居1軒を確認したが、調査区域が狭小であるために集落の内容や構造を知るところまでには至っていない。当該住居の形態については、主に群馬県の西部～北部にかけた丘陵・山地部域に分布する柄鏡形敷石住居であることは、ほぼ確実であろう。こうした住居は平地部での存在が希薄であるが、上記の地域を中心として中期の加曽利E 3式期から後期の加曽利B 2式期まで存続する、多分に呪術的性格を具備した「地域・時期限定型一般住居」であり、これまでに350軒を越える事例が確認されている。

柄鏡形敷石住居が確立・普遍化する時期は、三原田遺跡(7頁・第3図43)や中郷遺跡(同102)のような大規模な環状集落が解体する時期と軌を一にしており、地域集団の集住や統合拠点が消滅する中で、分散居住と新たな統合拠点の出現がもたらされている。当遺跡例はそうした分散居住地の一つと考えられるが、新たな拠点的集落は三原田遺跡のようなかつての環状集落跡地に形成されることはなく、現在のところ近隣や赤城山麓には見出すことができない。本県西部域の山間部では、加曽利E 4式期に長径40m×短径30mの環状列石を伴い、一時期5

軒前後の柄鏡形敷石住居により構成される特異な集落が出現する。巨大な呪術的・宗教的施設の存在や集落の規模・継続性などの諸点で、前段階の環状集落とは内容・構造を異にするが、こうした集落は分散化した地域集団を再統合するために新たな原理の基に構築された拠点的集落と考えられる。当域から北西に約30km離れた中之条町久森遺跡や南東に25km離れた安中市野村遺跡が、この代表的な事例である。しかし、こうした環状列石を随伴する拠点的集落もほぼ中期末葉で解体し、次の後期前葉段階では特定の柄鏡形敷石住居＝「核家屋」を中心とした拠点的集落とその周辺に散在する小規模集落という構造に大きな変容を遂げてゆく。

後期の「核家屋」形成については6頁の「歴史的環境」で概述したが、C地区の前中後遺跡(第3図62)で堀之内2式期に、B地区の浅田遺跡(同189)で堀之内2式期～加曽利B 1式期に、それぞれ確認することができる。この「核家屋」の特徴には、①柄鏡形敷石住居の張出部左右に延長10数mの弧状列石が配置される、②同一地点での建て替えが繰り返し行われる、③列石の下部に配石墓群などの集団墓を随伴する、④1集落内および半径5km圏内に1軒のみ存在する、等を上げることができる。また、③の列石下部の集団墓については、前中後遺跡では確認できるものの浅田遺跡では存在せず、「核家屋」には少なくとも二つのタイプがあると考えられる。このような両住居の差異は、それらが担った死者に対する葬送儀礼や祖先祭祀・儀礼に関わる観念・価値観の質的差異を反映したものとされているが、時間的変遷の中で前中後遺跡例→浅田遺跡例へと変容した可能性もある。いずれにしても、こうした事例は、群馬県内をはじめ関東・中部地方を含めても30数例を数えるのみであり、各地域内においてもかなり限定的な存在であることが理解される。

中期末葉の環状集落解体にほぼ時期を一にして出現する柄鏡形敷石住居は、石棒・丸石などの呪術具や出入口部埋設土器を含む住居内祭祀を高度に昇華・集約化しつつ、後期前半には「核家屋」という特定の柄鏡形敷石住居に変容を遂げる。そして、地域集団統合はこの「核家屋」を中心に展開すると想定されるが、そこには「核家屋」の居住者とそれを擁する集落構成員や他集落の同一地域集団との間に、葬祭儀礼を媒介とする階層的構造が存在したであろう。

写真図版



1. 発掘調査開始前の遺跡状況(東より)



2. 重機による表土層の掘削・搬出状況(東より)



1. 調査区南壁面の土層堆積状況(北より)



2. 同上(部分拡大)

近世以降 (第1文化面)



1. 1号建物遺構の全景(東より)



2. 同上・建物基礎上部部の南東隅確認状況(北東より)



3. 同左(西より)



4. 同上・中央部の確認状況(東より)



5. 同左・西側列の確認状況(北より)



1. 1号建物基礎上部部の南側列確認状況(北より)



2. 同左・調査風景



3. 同上・上下段基礎の重層状況



4. 同左



5. 基礎下段部の確認状況(東より)



6. 同左(北より)



7. 同上・南側列の確認状況(東より)



8. 同左・北側列の確認状況(東より)

近世以降（第1文化面）



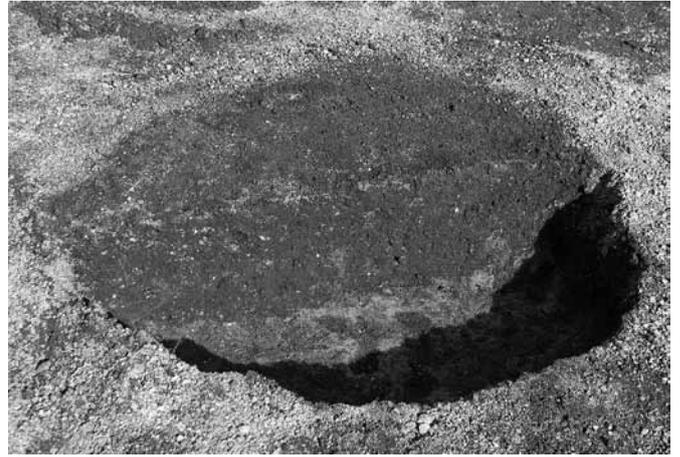
1. 調査区南半部の土坑確認状況(北西より)



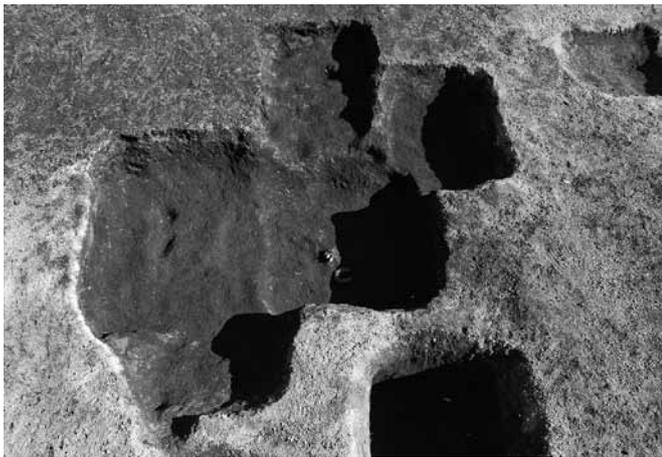
2. 土坑群の確認状況(東より)



1. 4号土坑



2. 同左・埋没土堆積状況



3. 7・20・31号土坑



4. 調査区南半部の遺構確認状況(南より)



5. 13・14号土坑



6. 同左・埋没土堆積状況



7. 17・26号土坑

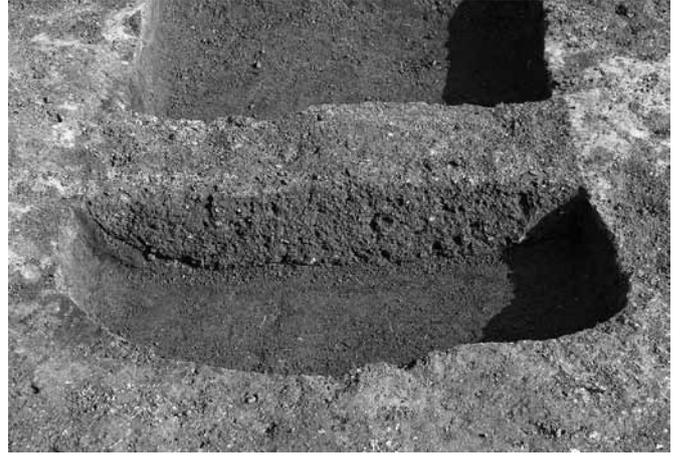


8. 同左・埋没土堆積状況

近世以降（第1文化面）



1. 24号土坑



2. 同左・埋没土堆積状況



3. 27～30号土坑



4. 同左・埋没土堆積状況



5. 第1文化面の調査風景



6. 1号溝



7. 2号溝



8. 4号溝



1. 5号溝



2. 12号溝



3. 島状遺構の確認状況



4. 同左



5. 1号島



6. 2号島



7. 2号島



8. 3号島



1. 1号住居



2. 同上・埋没土堆積状況(セクションA→)



3. 同左・(セクション←A')



4. 同上・遺物出土状況



5. 同左・遺物出土状況(No.8)



1. 1号住居の竈確認状況



2. 同左・埋没土堆積状況(セクションD-D')



3. 同上・埋没土堆積状況(セクションC-C')



4. 同上・掘り方状況



5. 床面の掘り方状況



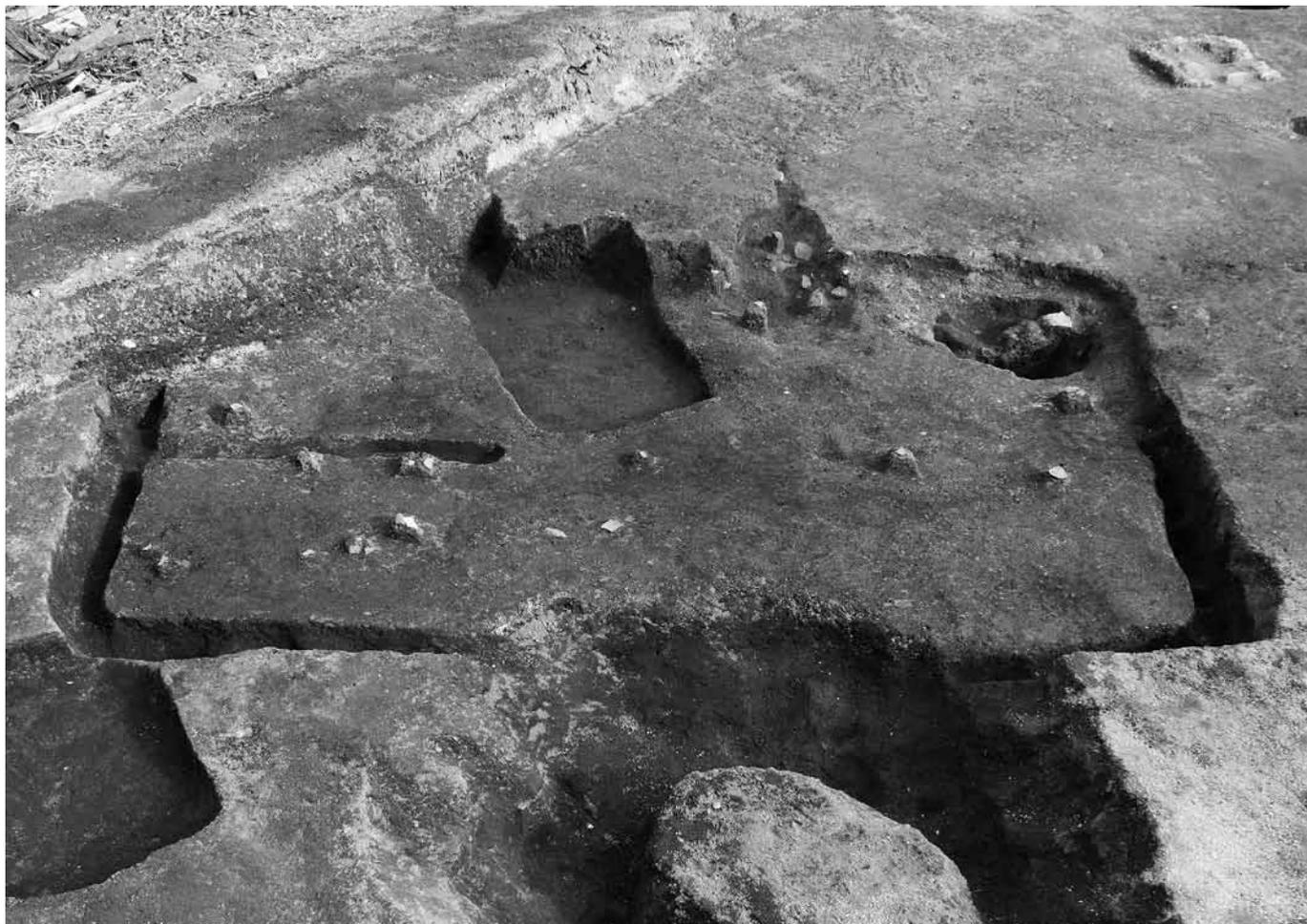
6. 同左・床下土坑の埋没土堆積状況



7. 住居内の遺物出土状況



8. 同左



1. 2号住居



2. 同上・埋没土堆積状況



3. 同上・遺物出土状況



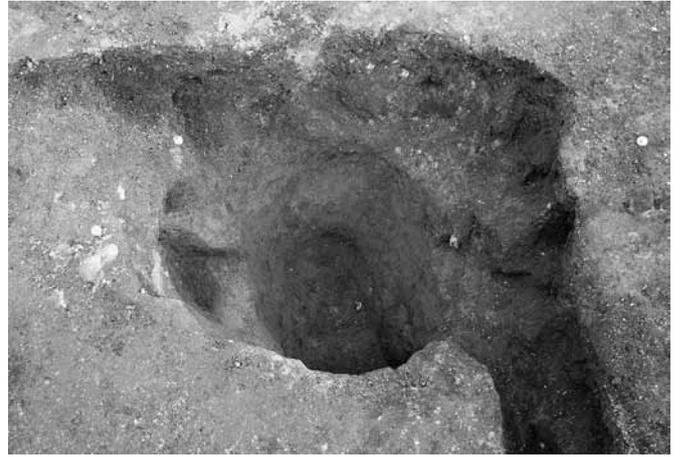
4. 同上・竈確認状況



5. 同左・竈内遺物出土状況



1. 2号住居・竈埋没状況(セクションF-F')



2. 同左・貯蔵穴確認状況



3. 同上・貯蔵穴埋没状況(セクションD-D')



4. 同上・床面掘り方状況



5. 同上・床面掘り方の埋没状況



6. 同上・竈断ち割り調査状況



7. 同上・竈掘り方状況(セクションG-G')



8. 同左・(セクションE-E')

平安時代（第1文化面）



1. 3号住居の竈付設状況



2. 同左・北側隅の検出状況



3. 同上・埋没土堆積状況



4. 同上・遺物出土状況(No.3)



5. 同上・遺物出土状況(No.6)



6. 同上・遺物出土状況(No.2)



7. 同上・竈埋没状況(セクションA-A')



8. 同左(セクションB-B')



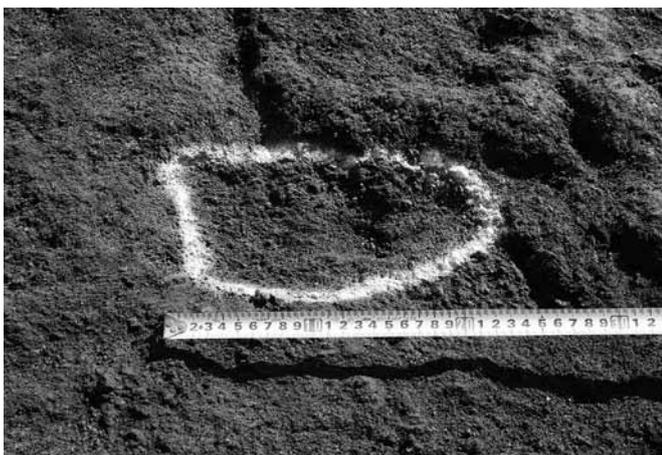
1. 榛名山ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)直下の馬蹄痕確認状況(南東より)



2. 同上・部分



3. 同左・前脚馬蹄痕の形状と大きさ



4. 同上・後脚馬蹄痕の形状と大きさ



5. Hr-FP直下の遺構確認風景



1. 榛名山ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)直下の2号道路遺構確認状況(南より)



2. 同上・Hr-FPの堆積状況



3. 同左



4. 1号道路遺構の確認状況(東より)



5. 同左・拡大



1. 縄文時代遺構の確認状況(南より)

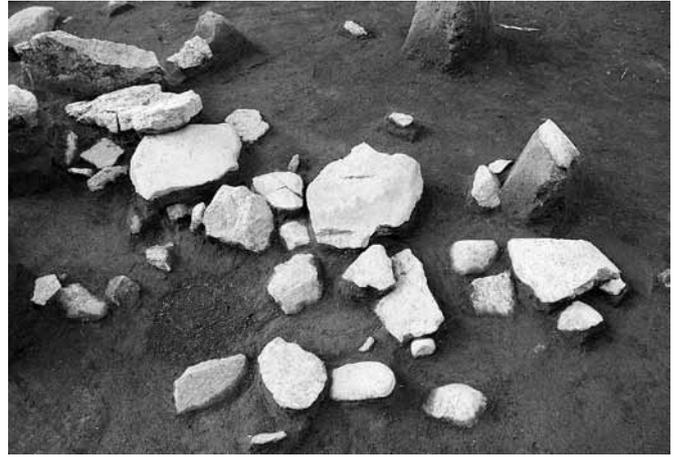


2. 1号敷石住居

縄文時代（第4文化面）



1. 1号敷石住居の石敷き確認状況



2. 同左・部分拡大



3. 同上・土器埋設炉の確認状況



4. 同左



5. 同上・断ち割り状況



6. 遺物出土状況(No.12)



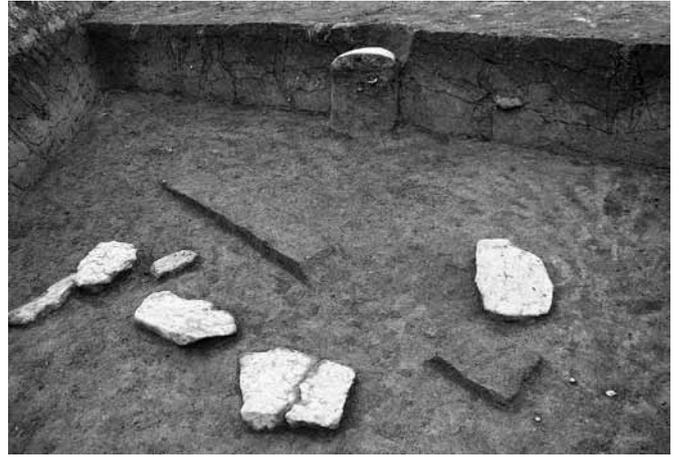
7. 遺物出土状況(No.10・11)



8. 遺物出土状況(No.8)



1. 1号配石



2. 同左・拡大



3. 同上



4. 同左・土坑状の落ち込み断面



5. 同上・土坑状の落ち込み断面(拡大)



6. 1号配石の調査風景



7. 1号集石



8. 同左



1. 土坑調査の全景(北西より)



2. 37号土坑



3. 同左・埋没土堆積状況



4. 38号土坑



5. 同左・埋没土堆積状況



1. 39号土坑



2. 同左・埋没土堆積状況



3. 41号土坑



4. 同左・遺物出土状況



5. 同上・埋没土堆積状況



6. 42号土坑



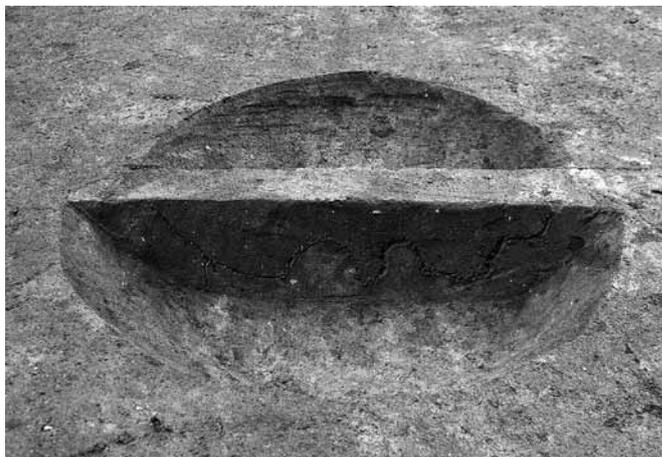
7. 43号土坑



8. 同左・遺物出土状況



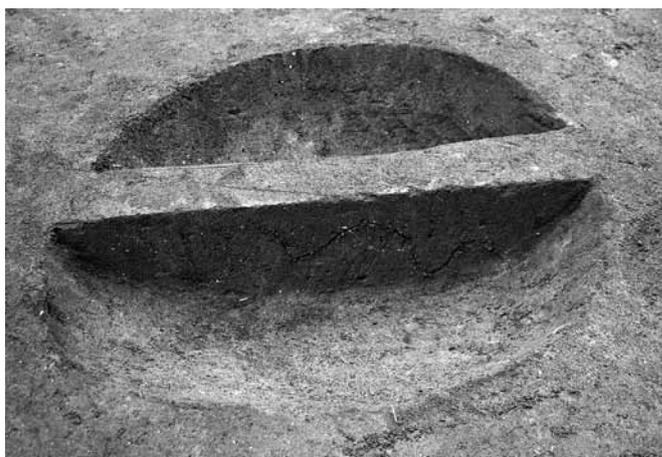
1. 44～47号土坑の確認状況(西より)



2. 44号土坑の埋没土堆積状況



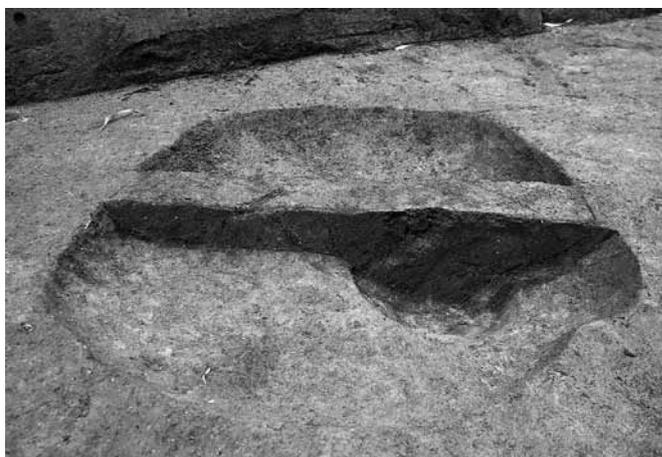
3. 45号土坑



4. 同左・埋没土堆積状況



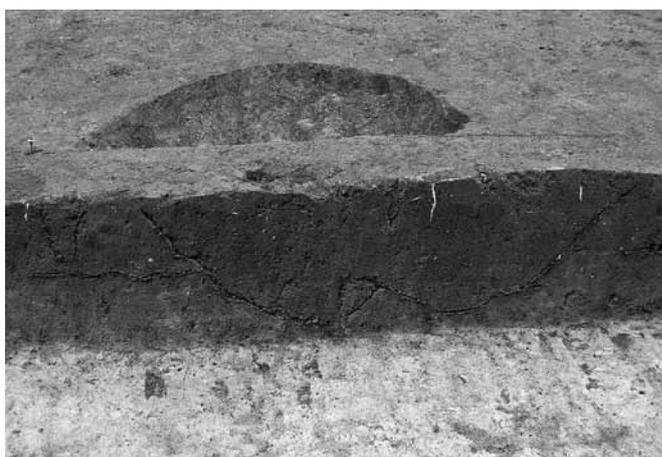
5. 46号土坑



6. 同左・埋没土堆積状況



7. 47号土坑



8. 同左・埋没土堆積状況



1. 包含層遺物の出土状況(O-21～22グリッド 東より)



2. 同上(O-21～22グリッド 東より)

縄文時代（第4文化面）



1. 包含層遺物の出土状況(北より)



2. 同左(O-21グリッド)



3. 同上(I~N-15グリッド)



4. 同上(P-22グリッド)



5. 同上(J-13グリッド)



6. 同上(G-9グリッド)



7. 同上・石匙の出土状況(I-13グリッド)



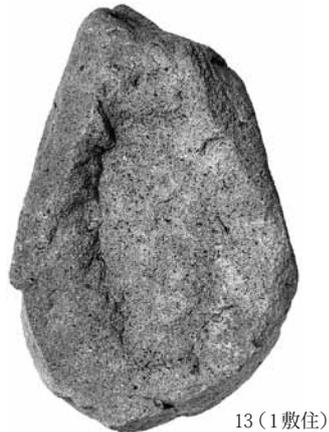
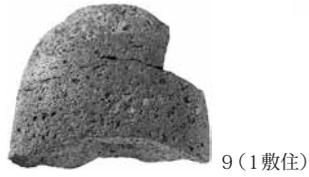
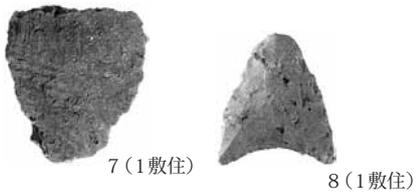
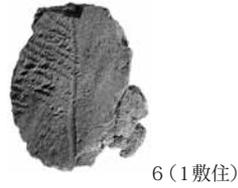
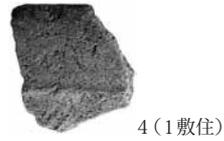
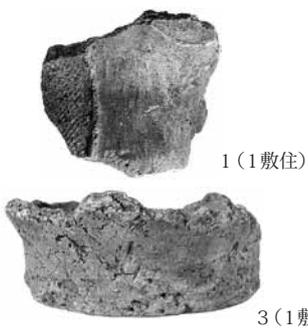
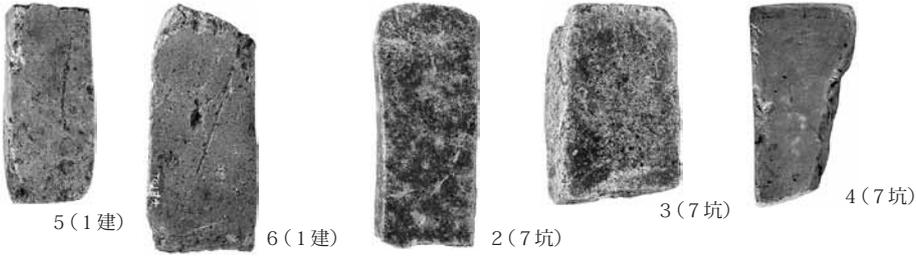
8. 同上・打製石斧の出土状況(O-21グリッド)



1. 旧石器時代調査のトレンチ配置状況(北より)



2. 同上・トレンチ内の土層堆積状況





14 (1敷住)



15 (1敷住)



1 (37坑)



2 (41坑)



3 (41坑)



6 (39坑)



7 (38坑)



4 (41坑)



5 (41坑)



8 (38坑)



9 (38坑)



10 (42坑)



11 (43坑)



12 (43坑)



1 (包)



2 (包)



3 (包)



4 (包)



5 (包)



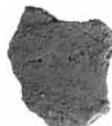
6 (包)



7 (包)



8 (包)



9 (包)



10 (包)



11 (包)



12 (包)



13 (包)



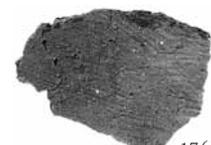
14 (包)



15 (包)



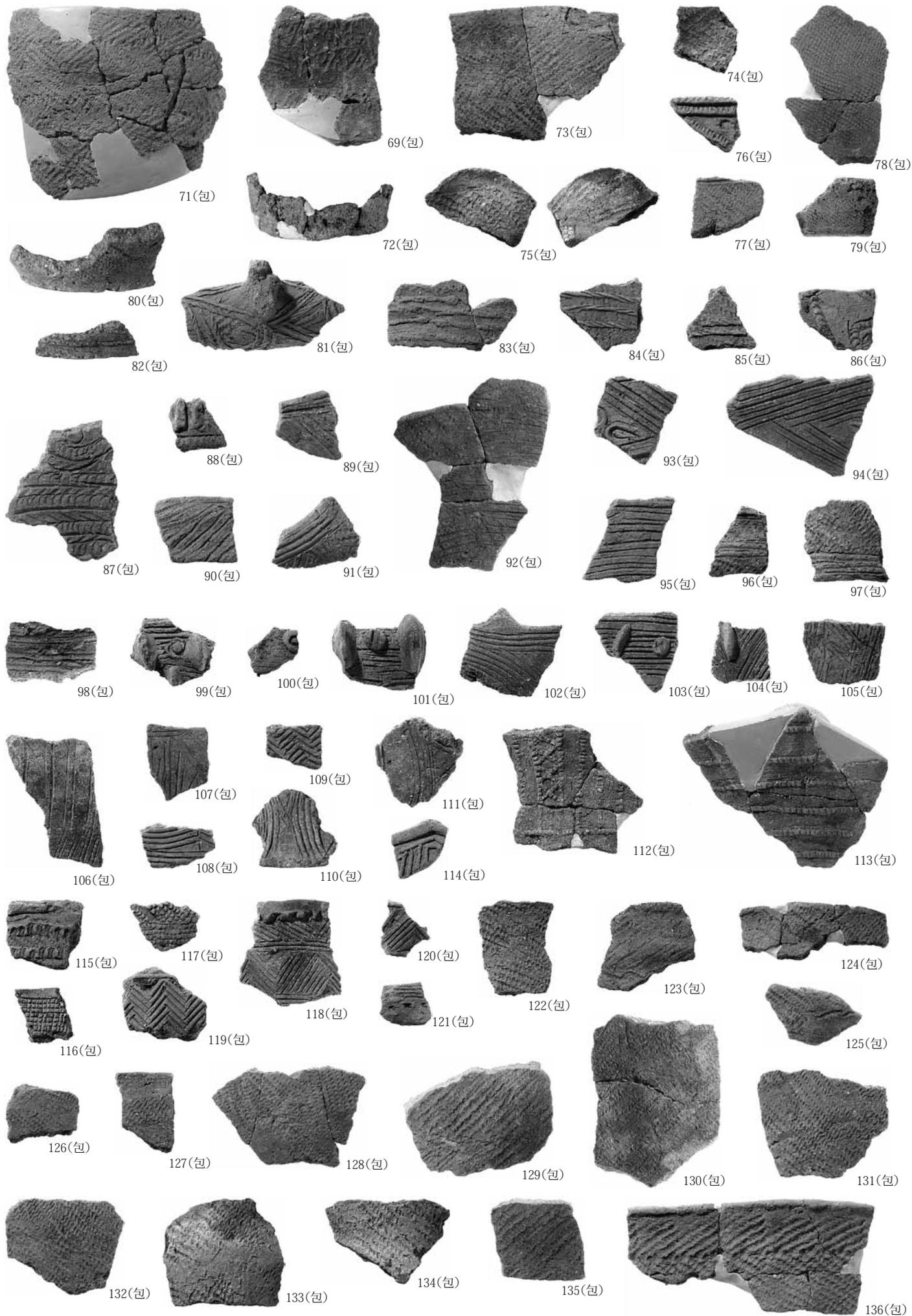
16 (包)

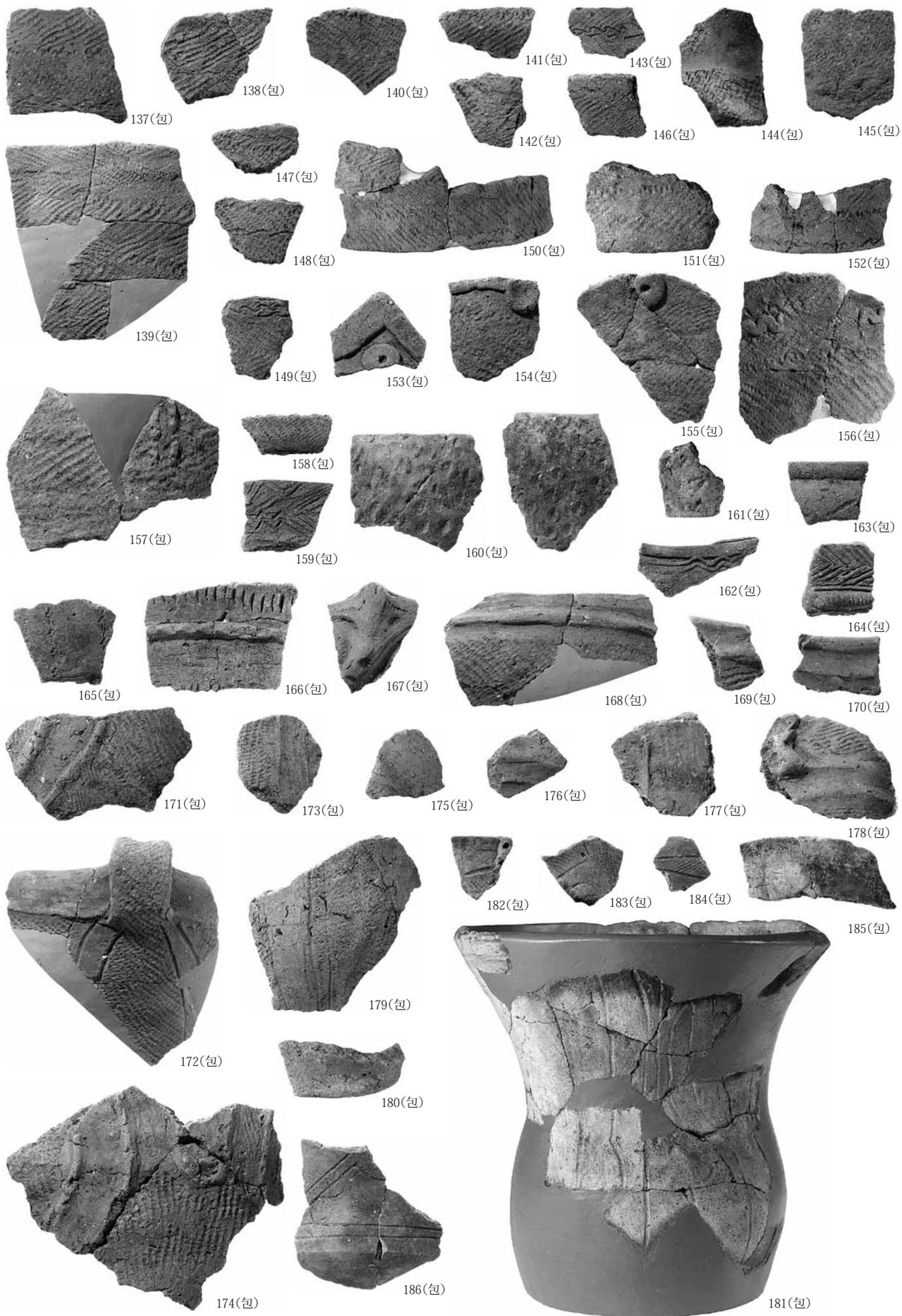


17 (包)



18 (包)





PL.30



187(包)



188(包)



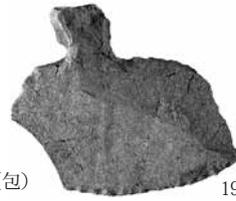
189(包)



190(包)



191(包)



193(包)



194(包)



192(包)



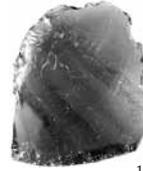
195(包)



196(包)



197(包)



198(包)



199(包)



200(包)



201(包)



202(包)



203(包)



204(包)



205(包)



206(包)



207(包)



208(包)



209(包)



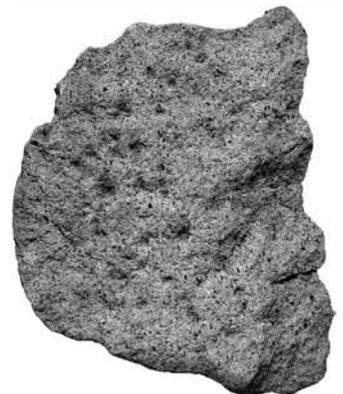
210(包)



211(包)



212(包)



213(包)

抄 録

書名ふりがな	たきざわごしょいせき
書名	滝沢御所遺跡
副書名	(一)津久田停車場前橋線上三原田バイパス地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	592
編著者名	石坂茂/齋藤利昭/徳江秀夫/石田典子/関邦一
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20141217
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	たきざわごしょいせき
遺跡名	滝沢御所遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんしぶかわしあかぎまちたきざわ
遺跡所在地	群馬県渋川市赤城町滝沢401-1・402・403-1・414-1番地
市町村コード	10208
遺跡番号	A0057
北緯(世界測地系)	360002
東経(世界測地系)	1395003
調査期間	20131001-20131231
調査面積	1,464m ²
調査原因	(一)津久田停車場前橋線上三原田バイパス地方特定道路整備事業
種別	集落跡
主な時代	近世/平安/古墳/縄文
遺跡概要	近世-建物基礎 1 +土坑38+溝12+道 3 +畠 4 /平安-住居 3 +ピット 4 /古墳-放牧地 1 +道 2 /縄文前・中期-敷石住居 1 +土坑10+配石 1 +集石 1 +遺物包含層
特記事項	古墳時代 6 世紀後半の馬の放牧地
要約	4 時代に渡る文化層が 3 面確認されており、上層より近世・平安時代の第 1 面、古墳時代の第 2 面、縄文時代の第 3 面である。第 1 面は、6 世紀第 2 四半期に噴出した榛名山ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)の上面であり、近世～近代にかけての建物基礎や土坑・畠等と 9 世紀～10 世紀代の竪穴住居を確認した。第 2 面は Hr-FP の直下に存在し、多数の馬蹄痕と道を伴う放牧地を確認した。第 3 面は黒ボク土内に存在し、縄文時代早期～後期の遺物包含層と中期末葉の敷石住居や土坑群を確認した。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第592集

滝沢御所遺跡

(一)津久田停車場前橋線上三原田バイパス地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成26(2014)年12月10日 印刷

平成26(2014)年12月17日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／ジャーナル印刷株式会社

